

63-1921



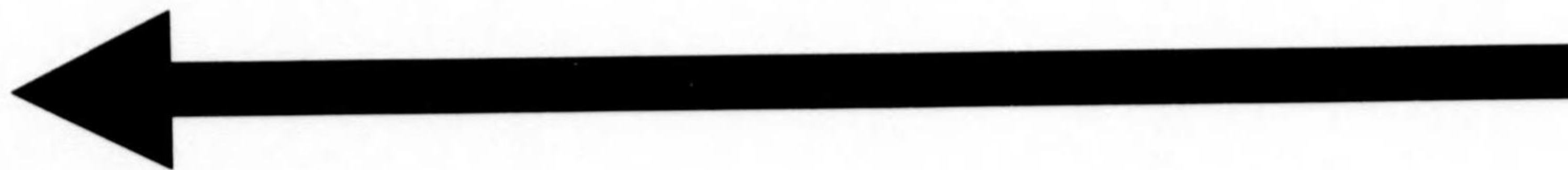
1200501277354

63

1921



始



212532



日本文法論

山田孝雄著

寶文館出版



恭しく嚴君古稀之壽を  
賀し謹みて此書を獻る

往ぬる年家君古稀之壽をなさむが爲に之が一節  
を摺卷とせしかどかにかくに障り多み、五年を隔  
て、今年こゝにこそ世に公にすべくなりぬ。こと  
初めし昔を思へば夢にも似たり。

十年あまりみとせになりぬ

言靈の神のちはひのなからましかば

唐國の聖は「我を非するものは春秋か」のたまひ  
き。又獨逸の何がし大王は「我はなすべきことをな  
す、論はむものは心のまゝに論へ」とおほせきとか  
や。おのれさまでおもひ上りうべくもあらねどな  
こがまじくもかくなむ。

をのこわれもたもあるへしや

羅波江のよしやあしやは世人定めよ

## 告白

- 63-1921
- 一、本論の著者はこの論中に芳名を掲げたる諸先輩に對して謹んで感謝の意を表す。其の恩賚の大なるものあるを信ずるによりてなり。
  - 二、著者は本論に對して大方の諸先生の嚴密なる批正を賜はらむことを懇請す。諸先生の垂教によりて昨非をさとの事あらば蓋余一人の幸のみにはあらじ。
  - 三、本論を刊行するに至りしは親友和田繁太郎君の斡旋による。こゝに之を特筆して謝意を表す。
  - 四、本論は全く著者の所見により生じたるものなれば、一切の責任は明白に著者の荷ふ所なり。

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に、  
又よきかむがへのいできたらむにはかならずわが  
脱にななづみそ。わがあしきゆゑをいひてよき考  
へをひろめよ。すべておのが人ををしふるは道を  
明らかにせむとなれば、かにもかくにも道をあきら  
かにせむぞ吾を用ふるには有ける。道を思はでい  
たづらにわれをたふとまんはわが心にあらざるぞ  
かし。

(玉かつま)

## 緒言

本論の著者は世に行はるゝ各種の日本文典の不備を慨し、之を改訂整理せむとの冀望を有して、之が研究に従事すること、殆八星霜に及べり。この間學界の進歩實に少からざるなり。然れども我が國語の學に至りては、なほ未甘心すべからざる狀況を呈せり。茲に於いて、憤然自改訂整理の任に當らむと決心し、遂に本論を草するに至れり。

本論の目的は上に説けるが如くなれば、管に自家の體系を組織して其の成案を示すに止まらずして、其の何が故にこの案を執るに至りしかの経路を明示せむことを努めたり。これ、一は在來の文法書多くは獨斷に流れて、毫も其の然る所以を示さず、讀者をして判断を加ふる餘地なからしめたる弊を矯めむと欲し、一は文法の根柢は決して學者一家の私見に止まらずして、深く人心に根ざし、固く國語の本性に存することを示さむが爲なり。この故に、間、心理學論、理學哲學上の論めきたることを述ぶるあるは止むを得ざるより出でしものなり。

本論の目的とする處は語論の新體系を樹立するにあり、句論の整理をなすにあ

り。著者の見る所によれば、現今の文典の制は國語の本性に適合せざるなり。殊に語論に於いて最甚し、改訂を要する所以なり。その句論は又支離滅裂なりとの酷評を下すものありとて辯疏すること能はざる程の状態なり。整理を要する所以なり。本論に聲音論を缺くを怪むものあらむ。著者は聲音論と言語の内容に關する論即、語法及句法に關する論とは大なる差別あるを信ず。かれは專、外的にして其の根據とする所は物理的、生理的の現象なり。勿論精神現象に關するとなしといふにあらざれど、それは專主とする所にあらず。語法や句法や、其の主とする所は人間の精神現象にあり。これを以て廣く語學といへば聲音論も入るべし。狹義の文法といふに至りては決して入るべからず。本論はこの狹義の文法につきて論述せむとするなり。且は又聲音の實相たる、音に文法學者の研究に依頼すべきものならず。物理學者、生理學者と共に研究すべきもの。吾人の見る所によれば、現代の國語の聲音を論議する者、誰か一人科學的の根據に立てるものある。著者もまた、未、十分に之を研究せず、且輕々に論斷すべきものに非ずと信するを以て、慎重の態度を執りて一切立言せず。異日研究の結果得るものあらば其の時はじめて天下に見えむのみ。

本論は如何なる時代の言語を對象とせるかと問ふ人あらむ。これ重要なる問なり。

り。著者はじめ歴史的文典を編せむと企てたり。然れども、現今の文典は著者の目より見れば、決して體制の可なるものにあらず。これによりて現今の文典の主義によりて歴史的文典を編せむか、支離滅裂に終らむこと目前に見ゆ。自家の體制を述べつゝ、歴史的變遷を叙せむか、事態頗錯雜紛糾を極めむ。こゝに於いて自家の體制を別に特立せしめ、この自説にして果して世の承認を経ば、それに憑りて、歴史的文典を編せむも遅からじと思惟し、今は記述的にのみ叙することとはなしぬ。茲に於いて自然或一時代を限定すべき必要起りたり。其の主とする所は散文に於いて、律語に於いて、現代の標準的記載語として、用ゐらるゝものを對象としたり。

語論の初に於いて、著者は語論に關する學說の變遷、及其の批評を述べたり。これわが語論の發達を叙すると共に、其の長短を明にして、將來斯學に従事する學者に前車の轍に鑑みる所あらしめむと欲してなり。其の批評に至りては決して自家の體系を以て之に臨まず、努めて公平の態度を執り、其の說自身に於いて矛盾せる點、國語の本性に適合せぬ點をのみ指摘せり。句論に至りて、學說の變遷を述べざるは、其の發達極めて淺く、最近時に至りて學者の云爲に上りたるものなれば、敢へて特別に史的研究をなすべき必要なきを以てなり。

本論を草するに當りて古今の文法書の稍可なりと稱せらるゝものは力の及ぶ限り参照せり。然れども著者常に僻地に在り、加ふるに便少く未盡さざる點あるべし。外國の文典に至りては英文典の代表として「スカート」の新英文典、獨逸文典としては「ハイゼ」の文典、この二書を主なるものとして参照したり。この故に單に「英文法、獨逸文典」といはば右の二書の所説をさすものと知るべし。

著者は自己の成案を示すまでは、あへて自己の立てし名目を用ゐず。大抵廣日本文典の名目を以て論じたり。又時としては體言、用言、助辭、形狀言、作用言、動辭、靜辭など従來の名目をも用ゐたり。その場合には、皆其の名目を用ゐし學者のさせる語類をさせるなり。體裁の一ならざるは止むを得ざるに出づるなり。

著者の案を示すに至りては、其の用語従來のに異なる點少からず。これ著者新案のものと従來のものと同じ名目にては混亂を生せむを恐れてなり。しかして従來諸家の説と合する點あるものは成るべく之をとり、若くは類似したる名目をとれり。これ又其の類似せることを示さむとてなり。

本論の目的は主として整理にあるを以て従來諸家の説にして據るべきものは直に之に依れり。其の引例は之を孫引せる所頗多し。これ一方より見れば文法家の

義務なりと信すればなり。然れども自家創見にかゝるものゝ引例につきては別に求め出でたるもの少からず。しかもなほ涉獵の至らざるが爲に缺きたるものあり。従來諸家の誤謬と断定し去りたるものにては、その例證顯然として、しかも吾人の思想の之をゆるすものは之を異例としてあげて誤謬との断定を下さず。然れども吾人の未採用せざる時代の語法なるものは論に及ばず。

著者が本論をなすに至りたるはこの論中に散見する幾多の先輩及其の説を用せし所の一切の文法家の恩賚なれば、茲に謹んで、これらの先輩に對して感謝の意を表す。然れども、學問の研究は交際によりて左右せらるべきものにあらず。この故に、著者は先輩諸氏の人格に對して絶對的に敬意を表すると同時に、其の學說の非につきては一步も寛假せず。これ頗酷なるに似たれど、由來わが語學の不振は多くは師說の墨守にありたるやうなれば、この弊を打破せむと欲してなり。

本論の體裁従來諸家の説と異なる點は詳に論じたれど、別に異論なき點には辯を費さずして直に取りたるを以て繁簡の度一定せざる點なきにしもあらず。これこの論の目的より生じ來れる自然の結果、體裁不整の責は素より著者に存す。本論は著者研究の結果を發表したるまでなり。社會の公認するか否かは未決の

問題に屬す。今若この説を採りて直に普通の教育に施す者あらば、實に大早計の事にして著者の深く遺憾とする所なり。著者は唯此によりて國語學研究の熱度を高め得ば望足れり。若社會が之を公認せば其の時はじめて普通の教育に應用せらるべし。學問の研究と教育の施設とを混同せざらむことを望む。

明治三十五年六月廿九日

本書の一部は五年の昔に、公刊せしが、全部は之を公にする機を失ひて今に至りぬ。かくて其の間の著者の研究は本書の下半部をば全く面目を一新せしむるに至りぬ。今にしてその古を思へば、慚汗淋漓たり。さはれ今是も亦昨非となることなからむや。思へばそら恐しき感に堪へざるなり。

明治四十年十二月三十日

# 日本文法論目次

## 序論

國語學の分科 文法學の内容 國語の性質 西洋文典の應用  
吾人の企圖 古學說の研究 研究方法 語論 句論  
現今文典の狀態 本論の記述順序

## 本論

第一部 語論	一
第一章 國語の單語分類法の沿革及批評	一
一 富士谷成章	一
二 鈴木 胤	二〇
三 東條義門	二七
四 富樫 廣蔭	三一
五 權田 直助	三七
六 鶴峯 戊申	四〇



七 田中 義廉 中根 淑 ..... 四五

八 大槻 文彦 ..... 五三

九 岡澤鉦次郎 ..... 六七

十 歴史的研究の概見 ..... 七二

第二章 國語の單語分類の方法 ..... 七四

一 單語とは何ぞ ..... 七四

二 西洋文典流の分類は我が國語に適するか ..... 七九

一 名詞について ..... 七九

二 前置詞と且爾乎波との比較 ..... 八二

三 形容詞について附分詞并動詞 ..... 八四

四 代名詞及數詞 ..... 八八

五 副詞について ..... 九〇

六 接續詞について ..... 一〇〇

七 間投詞について ..... 一二八

三 古來我が國に發達せる分類法は果して適當なるか ..... 一三六

一 用言と靜辭 ..... 一三七

二 體言とがざし ..... 一三七

三 動辭 ..... 一四五

四 單語類別の基礎 ..... 一四八

分類の方針、分類の法則、西洋語の單語分類の基礎、吾人の希望、分類の目的 ..... 一四八

五 余が分類 ..... 一五〇

第三章 語の性質 ..... 一七〇

日本單語の特性 第三章の要旨 ..... 一七〇

第一 體言 ..... 一七六

一 體言の一般性質及區分 ..... 一七六

二 名詞 ..... 一八一

一 名詞の性質意義 ..... 一八一

二 名詞中特別の注意を要するもの ..... 一八三

三 代名詞 ..... 一八七

一 代名詞の性質及分類 ..... 一八七

二 稱格指示の代名詞 ..... 一八八

三 不定稱代名詞の性質 ..... 一九二

四 反射指示の代名詞 ..... 一九六

日本文法論目次 ..... 三

四 數詞……………一九九

一 數詞の性質分類……………一九九

二 量を示す數詞……………二〇二

三 抽象的の數をあらはす數詞……………二〇五

四 具體的に數及量を示すもの……………二〇七

五 助數詞といふものにつきて論ず……………二一一

六 順序をあらはす數詞……………二一五

七 數詞の用法上の特質……………二一八

第二 用言……………二二三

一 用言の一般性質及區分……………二二三

二 形容詞……………二二九

一 形容詞の性質定義……………二二九

二 活用……………二三二

三 語幹……………二四六

三 動詞……………二五〇

一 動詞の性質……………二五〇

二 動詞の形體上の種類……………二五二

三 活用……………二六〇

四 動詞の性質上の分類……………二七一

一 形式用言……………三一一

二 形式形容詞……………三一三

三 形式動詞……………三一七

四 おはすといふ用言のはたらきにつきての論……………三二七

五 純粹形式用言……………三三五

五 動詞の複語尾……………三六三

一 複語尾の性質分類……………三六三

二 屬性の作用を助くる複語尾……………三六七

一 状態性間接作用……………三六八

二 受身につきての論……………三七一

三 發動性間接作用……………三八一

三 統覺の運用を助くる複語尾……………三八九

一 陳述の確めに關する複語尾……………三九〇

二 回想をあらはす複語尾……………四〇八

三 文法上の時の論……………四一二

四 推量をあらはす複語尾……………四四二

五 非現実性の思想をあらはす複語尾……………四五三

第三 副詞……………四六一

一 副詞の形態及意義につきての論……………四六一

二 副詞の職能及區分……………四八三

三 時及處の副詞につきて論ず……………五一六

四 情態副詞……………五二三

五 程度副詞……………五二六

六 陳述副詞……………五二九

七 感應副詞……………五三二

八 接續副詞……………五三五

九 將に退化せんとする副詞につきて論ず……………五三九

第四 助詞……………五四七

一 助詞の一般性質及區分……………五四七

二 格助詞……………五五二

三 副助詞……………五七五

四 格副二助詞の關係及副助詞の性質……………五八二

五 接續助詞……………六〇二

六 係助詞……………六一一

七 係助詞と格助詞との區分及關係……………六一六

八 係助詞と副助詞との關係及區分……………六二七

九 係助詞の特性及其の内容……………六五一

一〇 係助詞相互の關係及接續助詞との關係……………六六九

一一 終助詞……………六八〇

一二 間投助詞……………六八四

第五 接辭……………六九二

一 意義を添ふる接辭……………六九三

二 單語の上にあるもの……………六九三

三 單語の下にあるもの……………六九七

四 資格を示す接辭……………六九九

一 體言の資格を與ふるもの……………七〇〇

二 用言の資格を與ふるもの(尾辭)……………七〇〇

三 副詞の資格を與ふるもの……………七〇四

第四章 語の運用

七〇六

句論との區別 本章の目的

第一 語の複合

七一一

一 疊語

七一一

一 體言の疊語

七一一

二 用言の疊語

七一五

三 副詞の疊語

七二七

四 疊語に於ける語形の變態

七二九

二 熟語

七三〇

一 熟語の體言

七三五

二 熟語の用言

七四六

三 熟語の副詞

七五五

四 熟語の助詞

七五九

第二 語の轉用

七六二

一 體言の取扱を受くるもの

七六三

一 用言が名詞の資格をうる種々の段階

七六四

二 準體言

七七一

三 目的準體言

七八一

二 代名詞に關する資格轉換

七八四

一 稱格代名詞に擬せられたる名詞

七八四

二 代名詞の稱格の轉換

七八六

三 用言に關する轉換

七八八

一 「あり」と「す」との交渉

七八八

二 準形式用言

七九三

三 敬語動詞

七九六

四 敬意をあらはす複語尾

八〇二

第三 語の位格

八〇五

一 呼格

八〇六

二 主格

八〇九

三 賓格

八一八

四 補格

八三二

一 動詞の補格

八三二

二 形容詞の補格

八五二

三 間接作用に於ける主語及補語

八五五

五 述格 ..... 八六〇

六 連體格 ..... 八六八

七 修飾格 ..... 八八三

八 接續格 ..... 九〇五

第四 語の用法 ..... 九〇九

一 體言の用法 ..... 九〇九

一 絶對成分としての體言 ..... 九〇九

二 相對成分としての體言 ..... 九一一

二 用言の用法 ..... 九四〇

一 用言の本幹と複語尾との連接 ..... 九四三

一 推量をあらはす複語尾 ..... 九四四

二 屬性の作用を助くる複語尾及非現實性思想をあらはす複語尾 ..... 九五一

三 回想をあらはす複語尾 ..... 九六〇

四 陳述の確めに關する複語尾 ..... 九六六

五 動詞の音便 ..... 九六八

二 複語尾と複語尾との連接 ..... 九七四

一 間接作用の複語尾をうくるもの ..... 九七五

二 統覺を助くる複語尾 ..... 九八三

三 複語尾多數の連結 ..... 九九五

三 用言より用言に連ぬる状態 ..... 一〇一八

一 同格連用語 ..... 一〇二〇

二 從屬連用語 ..... 一〇三五

三 形容詞の連用形にあらはるゝ特種の状態 ..... 一〇三九

四 複語尾より用言への連接 ..... 一〇四三

四 裝法に立てる用言 ..... 一〇四六

五 述法に立てる用言 ..... 一〇五五

一 終結の用法 ..... 一〇五五

二 前提の用法 ..... 一〇六九

三 副詞の用法 ..... 一〇八八

一 連體語たる副詞 ..... 一〇八九

二 賓語としての副詞 ..... 一〇九〇

三 修飾語としての副詞 ..... 一〇九二

四 結合素としての副詞 ..... 一〇九九

四 助詞の用法……………1100

一 語の集團を助くる助詞……………1101

二 引用の語句を示す助詞……………1105

三 體言の位置を占むる助詞……………1108

四 呼格附屬の助詞……………1110

五 主格附屬の助詞……………1111

六 賓格附屬の助詞……………1113

七 補格附屬の助詞……………1116

八 連體格附屬の助詞……………1122

九 修飾格附屬の助詞……………1124

一〇 述格附屬の助詞……………1129

一一 連用語に附屬する助詞……………1140

一二 助詞と助詞との連結……………1144

第五 本章の概括……………1152

第二部 句論……………1154

第一章 句論の概説……………1154

一 句論と他學科との區域……………1154

二 句論と語論との限界……………1157

三 句論の研究の基礎……………1160

四 句とは何ぞ……………1174

五 句の種類……………1191

六 句の運用及句論の極限……………1211

第二章 句の性質……………1217

第一 喚體の句……………1218

一 喚體の一般性質及區分……………1218

二 希望喚體の句……………1221

三 感動喚體の句……………1227

第二 述體の句……………1238

一 述體の一般性質及區分……………1238

二 命令體の句……………1247

三 叙述體の句……………1257

一 主格の語の状態……………1260

二 述格の語の状態……………1268

- 一 完結終止……………一三〇
- 一 用言にての終止……………一三〇
- 二 助詞にての終止……………一二七
- 二 不完終止……………一二八
- 一 省略述法……………一二八
- 二 中止述法……………一二八
- 三 擬換述法……………一二七
- 第三 係結法の論附詞の玉の緒の價值……………一二九
- 第四 喚體と述體との交渉……………一三〇
- 第三章 句の組織……………一三〇
- 第一 句の構造の單複……………一三一
- 一 一の位格内の語の数の多きもの……………一三一
- 二 同一の位格の多數あるもの……………一三二
- 三 修辭的副成分……………一三四
- 四 修辭的結合……………一三四
- 第二 句中に於ける語の配列……………一三五

- 一 自然の配列……………一三五
- 一 必然の法則……………一三五
- 二 當然の法則……………一三五
- 二 故意的配列……………一三六
- 一 強き感情を寓する配列……………一三六
- 二 對象を特示するもの……………一三七
- 第三 句中に於ける語の相關……………一三七
- 第四 不完體の句……………一三七
- 一 未成體の句……………一三七
- 二 略體の句……………一三七
- 第四章 句の運用……………一三八
- 第一 單文……………一三八
- 一 單文の構成……………一三九
- 二 單文の用法……………一三九
- 一 稱格の方面より見たる用法……………一三七
- 二 他の文との關係より見たる用法……………一四〇
- 一 單獨の用法……………一四〇

二 關係ある用法……………一四〇二

第二 複文……………一四〇五

一 重文……………一四一一

一 重文の構成……………一四一一

二 重文の排列、照應、省略……………一四二二

二 合文……………一四二六

一 合文の構成……………一四二六

二 合文の排列、照應、省略……………一四四三

三 有屬文……………一四五八

一 有屬文の構成……………一四五八

一 引用句……………一四六九

二 準體句……………一四七四

三 連體句……………一四七七

四 修飾句……………一四八三

五 附屬句の位置……………一四八五

二 有屬文の照應及省略……………一四九一

第三 修辭的文結合……………一四九六

# 日本文法論

山田孝雄 著



## 序論

緒言に述べし如く、我がこの論は專語論と句論との改訂整理をなすにあり。余は本論に入る前に國語學の分科及言語文章につきて、聊述ぶる所あらむとす。最初に明すべきは、言語其の者の觀念なり。之を泰西言語學者の所説に徴せむ。ホット氏は曰はく、言語は吾人の表彰せむと欲する思想及感情の符號として種々に結合し若くは配列せらるゝ音聲の變化なり。とかくて言語には二の要素の存在するを見る。思想と聲音とこれなり。吾人がこゝに思想といへるは感情欲求等をも含有せる廣義の思想なり。この故に言語を研究するには二の方面の存在するなり。主として聲音を研究するもの之を聲音學といふ。言語の思想的方面を研究するは辭彙學及文法學なり。辭彙學は個々の言語の意

序論



義を研究す。文法學は言語を思想に應じて運用する法則を研究す。然るに言語には又二様の發達あることあり。話語と記載語となり。話語は即本來の言語と稱すべきものなり。記載語は之を記載して以て聲音の倏忽にして消滅する不利を補ふより生じたるものなり。然れども人間の技術としては、未、聲音を精密に記載すること能はず。茲に於いて記載の方法の上に於いて特別なる約束生ず。且一旦之を記載せばこゝに聲音を有形的にあらはす外、更に思想の状態に制約せられ、言語の構造に牽制せらるゝことあるべし。この故にこの記載の方法と第一者たる言語其の者との間に種々なる關係生じ來る。ことに我が國語の如き他國の文字を借用する言語にありてはなほ更のことなり。この故に又記載法といふ一科はなほ語學の一分科たるべきなり。以上述べし所を概括すれば、左表の如し。

語學	直接に言語の本	辭彙學
記載法	質に關するもの	文法學
	面に關するもの	

聲音論に關しては、吾人未云爲しうべき十分なる材料を有せず。この故に緒言にいへる如く論議を試みざるなり。記載法に至りては、別に述ぶる所あらむとす。今吾人の主眼とする處は實に文法學なりとす。

今なほ立入りて文法學の内容につきて論せむ。吾人の精神は或實體、或感覺、知覺、

或感情、欲求、又は事物の關係、様式等を個々に思惟す。しかして一方には又之を統一して一の思想として思惟す。吾人の心的作用に分解と統合との二方面存する事實によりてなり。之によりてこの分解の結果吾人の一觀念と認むるものを代表するもの、之を單語といひ、單語を材料として統覺をあらはすもの、之を文といふ。然れども單語と文との關係頗明瞭ならず。一單語にして一思想をあらはすものあり。一概念をあらはすにすぎざるものにして數多の單語よりなるものあり。かくて文法學は二つの部門に分たる。單語につきての分解的研究と總合的研究これに語論といひ、語を基として思想發表の方法を研究するもの、之を句論といふ。

今、若一の國語につきて論せむと欲せば、先其の國語の性質を顧みざるべからず。さても言語は個人の所生にあらずして社會の生産なり。民族の所生なり。言語の内容容は民族の心理なり。個人の精神状態の互に異なるが如く、言語も亦民族の異同によりて差あるは自然の數なり。而して其の差や聲音の原素の差、聲音の集合方法の差、即言語の形態の差のみにあらず、その構造を異にし、又之を思想に應じて運用する方法をも異にすることあり。一國の語學を研究せむものは此の差異に著眼せざるべからず。この故に國語の學をなさむもの、先國語の本性を知らざるべからず。國語の性質につきて説をなす者、近來稍あらはれたり。然れども之を根本的に研究せしもの、果して幾人かある。多くは泰西言語學者の所説を傳承せるのみ。

泰西の言語學者多くは世界の言語を其の構造の種類によりて三とし、孤立語族、附著語族、活動語族とせり。而して我が國語を以て附著語族の中にありとす。この分類の十分に確實なりといふべからぬことは先哲既に論あり。思ふに、我が國語の本性的問題は實に言語學者の大手腕を要すべき處なり。我が國語が附著語族として土耳古語などと同なるものか否か、實際如何に決すべきかは今なほ不明の問題なるにもせよ。しかも活動語と稱せらるゝ語族の中にも、又孤立語族の中にも入るべからざることとは十目の見る所誤りなかるべきなり。

又言語學者は分析的言語と、総合的言語との二者を區別せり。而して、英語の如きを稍分析的に傾きたるものとし、アリアン系の國語の大部分は総合的言語なりとせり。分析的言語の特徴は前置詞又は助動詞を補助として語想の關係をあらはすものなりといへり。この點を以て英語は殆ど分析的の言語といふことを得べし。支那語亦同じ。若し分析的言語の標本とすべきものありとせむか、わが國語の如きは實に好標本と云ふべきなり。

次に又語の配列の状態によりて區別することを得べし。かの孤立語たる支那語に見よ。かれらは語想の關係を示すに言語の位置を變更して之によりて特別なる意義を寓す。わが且爾乎波によりて意義を示す比にあらざるなり。之を以て、かれらの文章構造法は吾人の目より見れば、轉倒せるものなり。かくて言語を直行式のと

轉倒式のとに分つことをうべし。所謂附著語族は皆直行式なるが如し。活動語中又直行式のなきにあらざれど、多くは轉倒式なるが如し。孤立語はいはでもしるく轉倒式なり。勿論我が國語とても修辭の必要より轉倒することあるべし。しかもそはなほ轉倒せるものなるを承認しての上ならでは意を通することあたはざるなり。以上略説せる所のみを以て見ても我が國語は其の語の構造の上よりも語想關係の上よりも單語配列の上よりも支那又は英獨諸國の語と背馳せる點あるは明なりとす。

今の世にありて、支那語の法式をとりて國語を律せむと企つる者はなかるべし。然れども英獨諸國語の文典を齎し來りて吾れに加へむとするもの多きは何故ぞ。文法は言語の法則を記述したるものなり。國語と英獨諸國語と語性に於いて、既に異なり。いかで直に之を適用しうべき。然るになほこの愚をなさむとするものあるは嘆すべきなり。

西洋文典は西洋語に關しての法則の記述なり。この形を以て我が國語を律せむとす。靴の爲に足を削り、冠の爲に頭に布を纏ふ類にあらざらむや。然れども泰西人精緻の工夫に出でしもの、其の外形こそ加ふべからざれ。其の根本なる眞理に至りては、恐らくは適用せられざることなかるべし。文法の根柢にして人間思想の根柢より生ぜしものとせば、しかして人間の思想は根柢に於いて、一なるものとせば、吾

人は彼等の文典によりて益する處なかるべき理なし。この故に、かれの精緻に眩みて、叨に我れに用ゐむとするは陋なり、表面我に適せざるを以て其が根本の眞理までを拒否せむとするは蒙なりといふべし。吾人の冀圖する所はこの蒙たり、陋たる譏を免れむと欲するにあり。

凡言語の學自國語のみにて之に比較すべき外國語なきときは起らざるなり。これ實に認識の始は差別なりとの哲理に合す。我が國語の研究も亦然るべし。然れども文脈語性を異にしたる他の國語の法則をとりて、この異なる言語に適用しうべきものなりや否や。今の西洋文典は遠く羅馬の昔に起りきといふ。今に至りてもなほ大體に於いてかの古法を遵奉する所以の者は深く語の本性に適應せるが故ならむ。未知らず、かの西洋文典が日本國語の法則として採用せらるゝか否かを、翻つて思へば、自家のみにては認識しえず、他と比較して始めて知るものと雖、其の本性は自家なほ最よく知れり。精密ならずといへども誤認することはなからむ。他人の見るは精密なりといへども時に誤認なきを保せず。この故に他人を鑑として、自家の反省するにしくはなし。されば、古來この國に發達せし語學はたとへ精緻ならずといへども、悉、捨つべきものにもあらざらむ。この故に吾人は古來の學說を研鑽して其の長を採り、西洋文典の主義を參酌して、我が短を補ひ、以て學說を建設せむことを試みたり。

凡學問の成るは一朝一夕の故にあらず。必、其の由て來る所あるべし。而して其の一學說起るや、此れが短所を見て、茲に反對說生じ、更に、二者の總合說生じ、又反對生じとやうにかの「ヘーデル」の說きけむ辨證法の如き順序を以て進歩するものならむ。さても人心の構造は一なり。人の考へ出すこと、多少精粗の差こそあれ、大體に於いてはしかく背違すべきものにあらず。今若學說の沿革を究めずして、直に自家の說を述べむか、時に或は自家の創見なりと負めるものは既に幾十年の昔に古人が道破せしものなるをきいて、呆然たることなからむや。これを以て、吾人は主として主要なる學說を歴史的に略說し、其の取るべきは取り、誤れるものは其の過を復せざらむ注意として、しかも之を自家立脚地の豫示とせり。諺にいはすや、羅馬は一日の經營になりし先哲諸氏の說を何の容赦もなく攻撃追及するは頗禮を缺くに似たりといへども、學問は實際によりて左右せらるべきものにあらず。又學問の事は師にだに假さず。況んや先哲の說を補ひ、其過を訂すは、これ即進歩の宿る所にして、しかも先哲の本願ならずや。吾人は先哲の人格に對して滿腔の熱誠を以て尊敬の意を表す。然れども學說の非に至りては毫末も寬假せざるべし。それ學問は天下の共に議すべき所、一人の私すべきものにあらず。世の職々者流、叨に師說呼はりなせど、其の說を改訂増補するは後輩の先哲に對する義務なり。所謂國學の正統と稱

せらるゝ諸大人の本懐實に此の如し。西洋學者の研究の態度みな此の如し。我が國近時の學風此の點に於いて讓る所なきか。

吾人はこゝに、自家研究方法の一斑を示して其の立脚地を明にせむとす。一切の學問に通じて、研究法に二大別あり。分析的研究と總合的研究となり。分析的研究の主とする所は對象の比較にあり。比較とは一致及差異を確定する所以なり。總合的研究の主とする所は關係にあり。關係とは相依り相俟つ状態なり。分析的研究に於いては其の對象の本性を發揮しうべし。然れども之を以て研究の目的達し了りたりとはいふべからざるなり。如何なる對象といへども分析のみにては、未、それらの關係を明瞭に認識せられざるなり。こゝに於いて分析の後には總合來らざるべからざるなり。分析のみありて、總合なき時は其の研究散漫にして之を統一運用する所以を知らざるなり。しかも分析なくしては總合は起るべからざるなり。分析は總合に先たざるべからず。總合は分析の後には必來らざるべからず。この二のうち、一を缺かば、車の輪なきが如し。何を以てか之をやらむ。從來の研究に於いては分析のみ盛にして殆總合的研究のみるべきものなかりき。語論に於いても句論に於いてもこの二法は共に存すべきなり。しかも語論と句論とは又實に分析的研究と總合的研究との二大別より生じたる文法學の二大部門なり。今之を説明せむ。

語論の主とする對象は單語なり。單語とは思想發表に必要な言語の觀念單位

に分解せられたる結果なり。この故にこの部門にありてはこの分解せられたる單語を個々に比較して、其の差異一致の度を以て分類彙聚を企て、次にそれらの關係を論せざるべからず。これ即この論の主とする研究方法なり。かくの如くして單語の本性は、悉明瞭となり、其分類は相犯し相交はることなく、其の關係は瞭然として明なるべし。この場合にありては、吾人は、右に國語の本性を握り、左に論理の學を參して歩武を進めざるべからず。しかもこれたゞ單語の本性の發揮せられたるにすぎずして思想發表の方法として、此の單語どもが如何に運用せらるゝかの委曲に至りては遂に知るべからざるなり。之に於いてか、句論の必要生ず。

句論に於いては、語論に於いて分析的に研究せられたる語を基礎として之れを以て如何に思想を發表するかを總合的に研究す。しかして其の句論は人間の思想と言語との交渉の状態を研究するに外ならざるものなれば、之が研究に従事するものは、心理の學と國語の状態とを參考研究せざるべからざるなり。吾人の研究方針實にかくの如し。

古來の學者は分析に密にして總合に粗なりき。この故に一部の研究、頗深くして殆、確定不動の秘境に闖入したるものあり。これらの研究に於いては、吾人、一言の是非をいふを要せず、唯そのまゝに之を繼承すれば可なり。然れども一步外に出で、國文法全般の狀況を達觀すれば、支離滅裂戰國時代群雄割據の狀あり。こゝに於い

て之れが統一を試みむとして西洋文典の範疇を持來すものあり、しかりといへどもこの地に深く根柢を有し、しかも今は牢として抜くべからざるまでになりたるものが新來の歸化人によりて統一せられむと思ひもよらず、たとへ歐米諸國といふ後援を頼むとも、固有の土豪は其の命の存せむ限り、時だにあらば、反抗せむ勢あり。今の國語學の狀況實にかくの如し。吾人はまさに外國來襲の敵にあらずして、海内を一掃せむの信長たらむと欲す。若夫中道にして功を奏せずば、後の秀吉をまたむのみ。

著者は、始めに西洋文典の範疇によりて國語を律せむことを試験したりき。しかして、其の研究の愈進むに従つてますます、背馳する點を増し、遂にこの論を草せしむるに至れり。

本論は之を二部に分ち、第一部には專語を論じ、第二部には主として句を論ず。各最初に全般に關する論をなし、漸詳細の議論にうつるなり。

語論の要旨は從來西洋文典の範疇を以て、説明したる一切の文典を否定せむとて説を立てたり。語性の異なる國語を西洋文典の範疇によりて支配せむことの非理なることは吾人の研究の結果之を證せり。然れども、吾人は之を以て西洋文典を批議するものにあらず。かれは彼れの立脚地あるべし。我れはわれの立脚地あるなり。即語論に於いては別に範疇を立つる必要を認めて之を設け、それによりて組

織したり。本論の主眼實にこゝに存す。

句論に至りては直接に人間思想に根柢を有す。人心の現象に大差なしとせば、東西又大差あるまじ。然れども吾人を以て見れば、西洋文典にてはなほ語と文との關係頗曖昧なるものあり。これが故に新に心理、論理等の學に參酌して之れが整理を企てたる所あり。しかして我が文法學に文章論の入りしは實に最近の事に屬するを以て今なほ混沌たる所あり。著者は之れを整理せむが爲に苦心せしこと少からねど、なほ足らざる所あるべし。しかも從來の説に比して確に一步を進め得たりと信するなり。

## 本論

## 第一部 語論

第一部に於いては語の性質及用法につきて研究を試む。而して之を四章に分つ。第一章は古來の單語分類法の一時期を代表するに足るべきもの、又學說の推移の要點にあたる學者の説を歴史的に叙述し、これが批評を試み、以て其の長短如何を明示せむと試みたり。第二章は我が單語分類法に行はるゝ二大潮流の可否を探究し、進みて自家の提案を試みたり。以上の二章は第三章の基礎たるものとす。第三章は語の性質を詳説し、第四章は語の運用を説く。この二章は即語論の二大部門なりとす。而第四章は本論の特に設けたるものにして、從來缺如せられしものなり。

## 第一章 國語の單語分類法の沿革及批評

國語學上語論に於いて、單語を如何なる品類に分つべきか、これ國語研究上最大の問題にして、又最根本の問題なり。この基本概念にして一旦當を失はむか、其の枝葉の議論は深く求め、詳に探るに隨ひて、いよく紛雜を極め、遂に國語の眞價を誤るに至らむ。世の語學者たらむもの、まさに此の點に三思を凝さざるべからず。

さても今の單語を分類するもの、或は從來の説によりて直に之を奉ずるものあり、或は西洋文典の法なりとて之に従ふものあり、甲論乙駁其の是とするも非とするも更に、國語本性上の研究より導かれたる結果にあらずして、徒に枝葉に涉り、又は單に盲從するのみ、畢竟するに眞摯の研究にあらざるなり。

今此の如き重大なる研究に従事するものは必又慎重の態度を執らざるべからず。今此が研究の方途を述べれば、まさに二法あるべきなり。一は歴史的研究、一は批判的方法なり。然りとはいへども、この二者截然區別あるべきにあらずして、唯重きを置かれたる方によりて名づけたるなり。即其の沿革につきて批判的に研究し行くものをば歴史のといひ、國語の本性を標準として之によりて諸説を批判するものは批判的といふべし。

余は此の章に於いて古來學者が如何に國語の品類を區分せしかを述べ、併せて之を批評せむと欲す。而してこの章にあげし諸家は皆一新説を唱道せるものに限りにて採録せしにて如何なる大家にても單語分類に重きをなさざるものは措いて顧みざるなり。又吾人が批評の態度を明言せざるべからず。吾人はこの批評に際して決して自家の成案を以て臨まず。論理と國語の本性とを執りて、努めて公平の態度を以て臨めり。其の批評の委曲に至りては讀者の見る所なり。すべて自家の説を述ぶるは此章の目的にあらず。



所謂代名詞にあたるもの かの、いづこ、いづれ、  
 所謂副詞にあたるもの あまり、あやに、  
 所謂接續詞にあたるもの また、  
 所謂接頭語と見るべきもの うち、いや、  
 其の他代名詞、副詞等に亘爾乎波のそひてなれるもの、  
 もしも、なにそ、

以上の如く現時の多くの文典に説く所の代名詞の一部、副詞、接續詞、及接頭語等  
 すべて他の語の頭に冠せらるゝものをいふに似たり。

脚結は、今の亘爾乎波と助動詞と感動詞と接尾語となり、其の研究頗詳密なり  
 といへども、今は唯其の名目と要領とのみを紹介せむ。氏は脚結を五に分類せり、

屬 五種あり、咏、疑、願、詭、禁、これら皆文の述素に關して何等かの意  
 義を與ふる性を有す。一例をあぐれば、

咏や、疑か、願ばや、詭よ、禁な、  
 の類なり。

家 十九種に分ちたり。所謂亘爾乎波の第一類、第二類と接尾語の一部となり、  
 其の一例をあぐれば、

そ、を、は、も、に、と、し、の、へ、ら、のみ、だに、より、なん、

ごと、もて、がほ、ながら、がてら、

これ十九家の概目なり。

倫 六種あり。所謂助動詞の類なり。概目左の如し。

べし、す、ん、あり、ぬ、き、

身 十二種あり。これも亦助動詞の類なり。

て、し、めり、なり、ゆく、らる、す、等、

隊 八種あり。所謂接尾語の類多きに居る。

み、く、げ、かし、なへ、もの、はた、がて、

これらは何を標準として分類彙聚せるかといふに、あゆひ抄中はいはく

たぐひはその心をとりてすべたり。家はそのたぐひをえらびてあつめたり。

この二卷のあゆひはたゞ名をもうくべきかぎりなり。ともはそのことわりを

もてよせたり。身はその立ゐるべきをたとへたり。つらは此ふたつに似て立ゐ

ざるをつらねたり。この三まきは名をうくべからぬかぎりなり。

之を以て見れば、この五種の分類は意義と形體と文章構造上の職分とによれる

ものなるが如し。

今大略の紹介をへたれば、批評にうつらむ。氏の説枝葉につきては論議すべき  
 點頗多しといへども、國語をかゝる四種に分類することは一の原理によりてなされ



しことにして、其の各分類は整然分界を有し敢へて相犯すことなきは明瞭なる事實なりとす。

次に余は氏がこの分類の國語の本性に適合せるか否かを研究せむとす。抑國語はかの英獨諸國語などに比するに言語の位置につきて一定の順序先天的に單語の本性として備はれるが如し。たとへば獨逸語の前置詞 *前置詞* の如きもの、名こそ前置詞といへ、場合によりては名詞の後にも用ゐらるゝが如くなれど、國語の且爾乎波と稱せらるゝものは如何なる場合にも其の助けむとする名詞動詞等の後に附せらるゝに限るものなり。成章氏の *あゆひ* はこの本性より名づけられたり。次に又かれらの副詞と稱せらるゝものは、其の意義によりて動詞等に副へらるゝものにして其の位置は必要によりて動詞の前にも後にも、又動詞助動詞の中間に入りても用ゐらるゝなり。しかるに富士谷氏のかざしの用法は悉く皆其の動詞形容詞等の上にも用ゐられて、更に他の用法をゆるさざるなり。この故に *あゆひ* は語順の上にもいつも *あゆひ* にして、*かざし* は又語順の上にもいつも *かざし* たるなり。而して其の本幹となれるは所謂動詞形容詞とす。即、*装* *これ* *なり* *名* *は* *装* *の* *よ* *り* *て* *生* *ず* *る* *所* *動* *詞* *形* *容* *詞* *の* *よ* *り* *て* *立* *つ* *所* *の* *も* *の* *、* *あ* *ゆ* *ひ* *中* *名* *を* *助* *く* *る* *も* *の* *又* *多* *し* *、* *然* *れ* *ど* *も* *な* *ほ* *あ* *ゆ* *ひ* *た* *る* *性* *質* *は* *之* *を* *爲* *に* *消* *滅* *せ* *ざ* *る* *なり* *、* *こ* *の* *故* *に* *名* *装* *、* *か* *ざ* *し* *、* *あ* *ゆ* *ひ* *の* *四* *類* *の* *意* *義* *上* *語* *順* *上* *共* *に* *國* *語* *の* *本* *性* *に* *一* *致* *し* *た* *る* *分* *類* *な* *る* *を* *見* *る* *べ* *し*。

然れども仔細に、其の内容につきて檢すれば、頗難駁なる點を發見するに難からざるなり。例へば氏が挿頭なりとせる中にも名詞を修飾せる「いかなる」「いづれの」「か」の如きものと、所謂副詞と稱せらるゝものと混在せり、「いかなる」「か」は皆熟語動詞の連體形なるにて特別に一の語と見るべからず、「いづれの」「この」は代名詞に「なる」且爾乎波の添はりて名詞の修飾語となれるにて特別に一の語類をなさす。要するに、かく名詞の修飾をなせるもの、しかも叢語となりて始めて用をなせるものと、動詞形容詞の修飾語として本性より存在するものとを同一類に總括するは不倫なりといふべし。又、*ほども* *なく* *誰* *も* *お* *く* *れ* *ぬ* *世* *な* *れ* *ど* *も* *の* *誰* *も* *の* *如* *き* *主* *語* *と* *な* *れる* *も* *の* *を* *か* *ざ* *し* *と* *せる* *は* *甚* *し* *き* *誤* *り* *と* *い* *ふ* *べ* *き* *なり* *、* *其* *の* *他* *代* *名* *詞* *を* *以* *て* *其* *の* *一* *方* *の* *用* *法* *の* *み* *に* *よ* *り* *て* *直* *に* *か* *ざ* *し* *と* *斷* *定* *せ* *る* *も* *多* *く* *、* *又* *あ* *ゆ* *ひ* *は* *か* *ざ* *し* *に* *附* *屬* *す* *る* *か* *否* *か* *は* *明* *瞭* *に* *示* *さ* *れ* *ず* *、* *即* *一* *方* *に* *あ* *ゆ* *ひ* *の* *添* *ひ* *た* *る* *か* *ざ* *し* *を* *舉* *げ* *な* *が* *ら* *他* *方* *に* *は* *あ* *ゆ* *ひ* *の* *添* *ひ* *て* *い* *は* *る* *べ* *き* *を* *別* *に* *添* *へ* *も* *せ* *で* *あ* *げ* *た* *る* *も* *見* *ゆ* *、* *要* *する* *に* *氏* *の* *挿* *頭* *と* *い* *ふ* *も* *の* *は* *十* *分* *精* *選* *せ* *ら* *る* *べ* *き* *餘* *地* *を* *存* *せ* *る* *なり* *、* *名* *装* *は* *説* *を* *な* *す* *べ* *き* *材* *料* *乏* *し* *き* *に* *付* *今* *批* *評* *す* *る* *こ* *と* *難* *し* *、* *所* *謂* *動* *詞* *活* *用* *の* *發* *明* *は* *氏* *と* *本* *居* *宣* *長* *氏* *と* *い* *づ* *れ* *か* *先* *なる* *な* *ど* *頗* *興* *味* *多* *き* *問* *題* *も* *あ* *れ* *ど* *、* *こ* *の* *論* *の* *關* *す* *る* *所* *に* *あ* *ら* *ず* *、* *あ* *ゆ* *ひ* *に* *至* *り* *て* *も* *又* *缺* *點* *を* *見* *出* *し* *う* *べ* *し* *、* *然* *り* *と* *雖* *、* *余* *は* *唯* *あ* *ゆ* *ひ* *中* *に* *入* *る* *べ* *か* *ら* *ぬ* *も* *の* *を* *あ* *ゆ* *ひ* *と* *せる* *缺* *點* *の* *み* *を* *説* *く* *べ* *し* *、* *即* *身* *中* *に* *説* *ける* *、* *あ* *ら* *た*

まれども我ぞふりゆく<sup>のゆく</sup>道もさりあへず<sup>のあふ</sup>はたゞ動詞の一慣用法にすぎぬをあげてあゆひとし<sup>はたの</sup>かざしの倒置法なるを以てあゆひとせるなどこれなり。然れどもあゆひは氏の最力をこめられたるものなれば成功せる點極めて多く、永く後世に規範を垂れたり。

富士谷氏の説の大意は右の如くなるが氏の學説は大體に於いて殆成功に近づきたるものなれば、若天氏に年を假し研究を進めしめ、或は又さなくとも之を祖述して精鍊を加ふる者ありしならば、或は日本語學の一族幟を東洋の天地に押立つることを得けむものを惜いかな。氏の學説は唯氏によりて説かれたるのみにて、其の著書は永く學界の記念とはなりつれど、唯古學説の標本として貴重せらるゝのみにて、更に新學説の源泉とならざりしは惜みても餘りあることなり。然れども氏の學説の大觀こそ傳ふるものなけれ。其の枝葉の説は後世學者の規範となれるもの蓋少からざりけむ。大槻氏の動詞助動詞の研究は氏に負へる所あるべきは著しく、岡田氏の存在詞の説も亦端を氏に發したる説ならざらむや。これらの研究は頗興あるものなるべけれど、余はさる暇を有せず、いでや進みて次の學者にうつらむ。

## 二 鈴木胤

安永八年富士谷氏歿してより、文政七年鈴木胤氏の言語四種論出づるまで、四十五年の間、わが國語品類を如何に區分すべきかにつきての研究を見ること能はざ

るなり。其の間に出でたる本居宣長、春庭の二氏頗語學に精通せられ、其の研究の結果は優に後世の典據となりたれば、天下靡然として皆之を仰がざるものなきに至りぬ。しかも其の主とする所、且爾乎波、活語にありしを以て、滔々たる大勢は唯この二點にのみ集注せられたり。吾人のこの研究は國語全體の議論なるを以て、吾人は直に鈴木氏にうつるべきなり。

鈴木氏の説はなほ言語を四種に分類せるなり。然れども其の方面は富士谷氏の異なりて。

### 體の詞、且爾乎波、形狀の詞、作用の詞

とせるなり。之を説明せるを四種論とす。其の説の大意次の如し。

體の詞は今の名詞にあたり、形狀の詞は所謂形容詞と良行變格動詞の「あり」となり。作用の詞は今の動詞に當る。唯良行變格のみは形狀の部に入るものと定めたり。且爾乎波は富士谷成章氏の挿頭と脚結と混せるが如し。

今之れにつきて氏の解説を見む。

體ノ詞ヲ二ツニ別クレバ形アル物ト形ナキ物トノ違ヒアレドモ、總テ物ニテモ、事ニテモ形狀ニテモ理ニテモ一方ニ定メテ指シ呼ブ名目ノ詞ハ皆是ナリ、用ノ詞ハタラク詞、活語ナンド古來一ツニ言來レルヲバ今形狀、作用ト分チテ二種ノ詞トセルハ終リニ附キテハタラクテニヲハノ、本語ニツキテキレ居ワリ

タルモジノ第二ノイノ韻ナルト第三ノウノ韻ナルトノ差別ナリ、第二ノ韻ナルハシリノ二ツナリ、シハキラキラシ、スガノシ、ナンドノシニテ其意シラル、即俗ニ何々シイト云シイノコ、ロニテ、其有様ヲ形容イヘル詞ナリ、云々リハ有リナリアハアリ、アザヤカアラハル、アキラカノアニテ、物ニツグ時ハ省カレ消ユルナリ、居ハキアリナリ云々カクリモジヲ終リニツクル時ハ本作用ノ詞ナルモ皆其形状ニナルナリ、サレバコノシリノ二モジニテトマル詞ハスベテ皆物事ノ形状ナリ、第三ノ韻ナルハクグスツヅスフムユルウノ十二ナリ、クハメクノ類ヒフハナフノ類ヒ、スハ爲ナリ、令ナリ、プハブルノ意ナランカ、フムハ相通事アリ、此十二モジノテニヲハノ意ニハ種々別チアルベケレドモ、一ニイヘバ皆爲ト同韻ニテ此韻ニテトマル詞ハ皆作用ナリ、人ニテモ物ニテモ何ニテモ動キ働キ移リ變ルワザヲイフニテ是ヲコノハ用ノ詞トシテ體ノ詞ト反對スベキニ、カノ形状ノ詞ヲモ一ツニ用ノ詞トイヒ來ルハ少シイカガニテ形状ハ體ニ近キ所アリ、其證ハ善シ惡シノト云ヒ、有リノマ、ト云フタグヒノモジニ續クサマ體ノ詞ノ格ニ同ジ云々、サレドモ、體ノ詞ニハ働ク事ナキニ此二ツ共ニ終リノテニヲハ動キ働ク故ニ一ツニシテ是ヲ働ク詞又活語又活用ノ詞ナドイハンハナル事ナリ、

とて體及形状作用の差別を立てし理由を示せり。且爾乎波に至りては氏は前三種

との關係を比喩的にいへり。其の言左の如し。

三種の詞

サス所アリ、

詞ナリ、

物事ヲサシアラハシテ

詞トナル、

玉ノ如シ

器物ノ如シ、

テニヲハナラデハ働カズ、

といへり。其の内容頗廣漠なるものなり。其の類別を列擧すれば、

獨立チテ詞ヲ離レタルテニヲハ

ア、アハレ、アハヤ、アヤ、アナ、アナヤ、ヤ、ヤヨ、ヲ、イナ、ヲ、

ウ、幾、何、誰、

こは所謂感動詞と副詞と代名詞となり、

詞ニ先タツテニヲハ

ハタ、イデ、アニ、ナドカ、ソモソモ、マタ、ナホ、

こは所謂副詞と接續詞となり。

且爾乎波

サス所ナシ、

聲ナリ、

詞ニツケル心ノ聲ナリ、

緒ノ如シ、

器物ヲ使ヒ動ス手ノ如シ、

詞ナラデハツク所ナシ、

詞ノ中間ノテニヲハ

ノ、ツ、ニ、ヲ、ハ、バ、モ、カモ、ゾ、シ、ヤ、コソ、イ、ト、ド、

こは所謂且爾乎波全體に渡れり。

詞ノ跡ヲウケテトムルテニヲハ

カ、カモ、カナ、ガ、ガモ、ガナ、ナ、ゾ、ヨ、ネ、モ、ハモ、ヤ、ハヤ、

ヤハ、バヤ、カシ、ラシ、

活語ノ終ニツキタルテニヲハ

形状ニハ シリ 作用ニハウ韻十二、

附クニハアラデ跡ヲウケ、又中間ニモアリテ切レモ續キモシテ動クテニヲハ

ゴトシ、ベシ、マシ、リ、タリ、ナリ、ケリ、メリ、ラン、セン、テン、

ス、ツ、ス、

こは今の助動詞なり。

氏の説につきて第一に考ふべきは且爾乎波なり。氏は且爾乎波と他の詞との區分を唯比喻を以ていへるのみなるが故に、其の本義は遂に捕捉すること能はざるなり。其のうち比較的に定義に近きものをとれば「詞ニツケル心ノ聲」といふ事なり。心の聲とは如何なるものか。思想をあらはす聲音の義か、しからばいづれの語か心の聲ならざる。詞につける心の聲とは遂に解釋すべからざるなり。余輩愚昧にして

其の眞義を解すること能はざるにも由るべしといへども、要するに一種の謎にすぎず。其の他の三種との別明なるが如くにして明ならず。故に余は實例につきて批判すべし。

第一に氏は所謂用言の語尾を以て且爾乎波の一種とせり。おもふに、こも亦一種の見解なり。條理立ち、國語の本性に合せば、亦從ふべきものなるべし。然れども氏の説、自自殺せざるべからざる矛盾を有せり。何ぞや、既に其の語尾が且爾乎波たらば、かの形状作用の詞は正に二分せられて、一は且爾乎波として存し、他は氏の所謂體の詞か何かになりて存すべく、形状作用の詞といふは、二者の合せ用ゐらるゝ偶然の現象にすぎずして單語分類上の實體として、取扱はるべきものならぬにあらずや。この點に於いて氏の説は自の手にて致命傷を負へるものと斷言するに憚らざるなり。

次に氏の四種の分類はかの用言の語尾を且爾乎波より除き去りたりとしても、なほ矛盾不理を存せずや。且爾乎波と他三者とは補缺部分をなすものなりや。はた、同一原理より四つに分ちたるものなりや。體の詞は用の詞の補缺部分ならずや。しかるに形状作用の二別を同一列に體の詞に對せしむ。これ果して有理なるものなりや。吾人をして氏の説を系統的に表示せしめばまさに左表の如くなるべし。

詞 且爾乎波 體の詞  
 詞……………用の詞……………形状の詞  
 用の詞……………作用の詞

氏の説明はこの徑路を明示せず。又體の詞といへるも二重の意義を有せり。一は形體上の意義にして一は觀念上の意義なり。氏は總説の際には形體上の意義を以て「體トハ動カヌ言ヲ云」といひながら體の詞の説明にては「名目ノ詞なり」といへり。いづれによりて體の詞に命名せられしか。氏は詞に四種の別ありといへるが故に且爾乎波も詞なるべし。然らば且爾乎波は體の詞用の詞の二つに分ち屬すべきにあらざるか。これらの點すべて氏の説の破綻なり。さて又獨立して用ゐらるゝ且爾乎波と詞に先立つ且爾乎波とは富士谷氏の所謂かざしの類にて其の他は所謂あゆひの類なれば、寧ろ富士谷氏の如く區分する方至當なるべきにかへりて之を合併したるは進歩とやいはむ。退歩とやいはむ。然れども氏は富士谷氏と立脚地を異にせるにもよるべければ深くは問はぬことにしても、氏がよつて立つ立脚地は抑如何。

氏が體の詞といふに兩義あるをすて、觀念上の意義とし之に作用といひ、形状といふこと又且爾乎波を釋して心の聲なり、器物を使ひ動す手の如しといへるに考へあはするに大體に於いて、觀念上より分類せしものならむ。觀念上の分類によりたるものとして見れば、體の詞も形状の詞も作用の詞も皆首肯せらるべし。しかるに且爾乎波に至りては俄に錯然として異種交り存せるが如き觀あり。要するに氏の且爾乎波といふは自用語、主位觀念と屬性觀念とをあらはす語、以外の一切の語を集めたるものにして、いはゞ一種の塵塚の如く、何にてもあれ、混在せるなり。この故にこの且爾乎波は頗精鍊せらるべき餘地を存せり。

惟ふに氏にしてこの且爾乎波を今一層精研して矛盾なからしむべく分類したりけむならば、頗見るに足るべきものありけむに惜むべきかな。氏の説はかく矛盾に富めども、之を離れて見れば、又參考すべき價あり。作用形状の別、且爾乎波の種類分けに至りては後世を益せしこと少からず。

氏の説の基く所を見るに作用形状の分類は富士谷氏の裝を祖述したるものなり。その用言に特に精密なる研究をなし、はこれ時世の風潮にして、かの八衢全盛時代の佛がしらすく、こゝにあらはれ來りしものにあらずや。

鈴木氏につぎて述ぶべきは若狹の僧

三 東條義門

とす。氏は鈴木氏と略時代を同じくす。然るに余が鈴木氏を先にして義門氏を後にせるは故あるなり。氏曰はく

わが右四種論(鈴木氏の)をばよしとは諾ひながら少しみちかへてわけ行やう

は、一切言語を先二にして體と用となりといひ、其體の中に有形のと無形のとわ  
かる、其無形の、中、自らいはゆる語辭なるあるあり。さて用の中に、形狀作用相  
別れ其形狀四に別れ、四の中に初の一が又別れて二となるとし、さて作用すべて  
三十五箇の活きとする中に、自ら八ちまたの四種并變格等皆攝まる事、一ひらの  
紙だにひろぐれば、一目瞭然とか云らん様に識られぬべう物したるが和語説略  
圖なり。かくていはゆる體用とわけ有無形と名づくるやう、又形狀作用のけぢめ  
等は活語指南に辨せるが如し。(玉の緒線分)

かく氏の説は鈴木氏の言語四種論を見てさて自家の説を立てたるものなれば、  
順序はまさに氏を次に置かざるを得ざるなり。

先に引ける線分によりて氏の所説は明ならむ。なほ其の解剖の一例を次に示さ

む。  
用言 無形體 無形體 用言 有形體言 無形體言 體言 用言 無形體言 無形體 無形體 體言  
てらし見よ 本末 必ずぶ ひも鏡 三くさ に うつる ち、の 言葉 を

其の説を表示すれば次の如し。  
言語 體言 有形體 無形體 語辭自ら此のうち在り。

用言 形狀言 鈴木氏の説そのまゝ。

活語指南に曰はく

活クトハ、タトヘバ思ト云ハ思ハシ、思ヒ、思フ、思ヘ、斯様ニハ、ひ。へト動ク類ス  
ベテ略圖ヲミテ曉了セヨ。

活カヌトハ君ガ思ヒ我思ヒナドト云トキハ思ヒト云ガ一名目ナレバコレ即  
體ノ言バニテ活動セス詞トナル、コレヲ體言ト云、思ヒハ元來ハ用言ヲ體言ニセ  
ルニテ原ヨリノ體言ナラネド、物ノ名、事ノ目トナリテ活動セスキハ全コレ體語  
ト云物也、産ヨリノ體言ト言ハ雨土人鳥ナドト云モノ是也、斯ク分ルガ本體ノ分  
レ也、ソレニ又上ニイヘルスベテ物體ナキ詞ニテモ、タトヘバ語辭ノ中ニのやナ  
ドハ體ト云ヒ、けりぬるナドハ用ト云如キヲ心エ置テヨ、けりハけら、けり、ける、け  
れ、ト動クユエ活用スルカタニマカセテ用ト云フ、コレハキコエタレド、のやナド  
ヲ體ト云ハツマラヌト難評スル人モヤアラン、サレド此レハイハユル活用セヌ  
方ヨリ、シバラク體トイヒオク也、トガムルヲ勿レ、  
上略カクテコレラノ體言ヲ受ル辭ハ云々  
さて又かの線分にいはく、

そはもと語辭といふものは體言と用言とを連れ、或は用と用と又體と體と、又  
用と體となど萬言を貫きて自由なり。

義門氏の説以上の如し、見れば氏はすべての言語を其の活くと活かぬとにより

て二大別を施し、體言を更に其の指す所の形の有無によりて二種に分ち、用言を更に二種に分ちて形狀作用の二とせること實に秩序整然たりといふべし。之を鈴木氏のに比するに彼は所謂用言の目を否定して、形狀作用の二目を以て體の詞に匹敵せしめしに、これは之を下し次等の類別とし、體言に對するものはこれら二種の總括なる用言を以てせること頗る要領を得たるものといふべし。この點より見れば、確に鈴木氏のものより一步を進めたるものといふべし。

さて鈴木氏の説はかく秩序整然たるものなるが、其の秩序は實地の活用に供せらるべき秩序か、はた又机上の空論にすぎざるかを一考せよ。無形有形の體言、形狀作用の用言、これにて國語の一切は網羅せられたるか、これにて國語の本性を發揮し盡したるか。この疑問を以て義門氏の解答を乞はざるべからず。氏は一切の言語を分類して體用の二種とすといひながら別に語辭といふものありて體言用言を連ね助けて其の運用を自在にすとやうにいへり。さらば語辭は體言用言の外にあらずや。體言用言にて一切の言語を網羅すといふ以上は語辭は一切の言語の外のものか。氏は之に解決を與へざるべからず。氏は又別に語辭を體言用言の二類に分ち屬せしむべきを説けり。この説を以てすれば體言用言の外に言語なきなり。然るに語辭は體言用言を助くといへり。然りとせば之はまさに體言用言は自互に相助くとか何とかいはざるべからず。而して語辭云々の議論は生ずべき理由なきなり。又

氏ははずや、此ンハイハユル活用セヌ方ヨリシバラク體トイヒオクナリ」とこれを以て見れば氏の所説は一時の試みにして根本的に研究したる結果にてはなく、自も確信したらぬものなること明けし之を要するに且爾乎波を如何に處置するかにつきては更に定見なきものゝ如し。氏は活語及且爾乎波に精通せられたれど、言語全體の分類に關してあまりに力を盡されざりしが故に、其の研究は目立ちたるものゝなきなり。而して氏の説の難點は實に語辭の處置如何にあり。

次に又氏の説が果して國語の本性に該當するか、せぬかを考ふれば、其の活用の有無を區分する點は間然する處なしとしても、國語の本性は單に活用の有無の區分のみにて發揮しうべきものなるか、有形無形の體言、形狀作用の用言にて我が單語の全般は網羅し盡しうるか、用言ならぬものうちにて何かのかざしの如きものと名の如きものとあゆひの如きものとはこれを區分する方利益なからずや。少くも氏は且爾乎波を分類の如何なる位地に置くべきかにつきては失敗せること明なり。しかも氏の且爾乎波研究は後世の模範となれるものなるに、其の學者にしてかゝりとは豈奇異なる現象にあらずや。

#### 四 富樫廣蔭

義門氏について此の種の意見を發表したるは富樫廣蔭氏なり。氏は時代に於いて、殆ど義門氏と同じけれど、學説はまさに義門氏のを基礎とせるものなり。

氏は全體の言語を三種に分別し更に之を小分せり。  
言 今の名詞これなり五種に分る。

形言 月、雪花、鳥、山川、

様言 物、事、是、故、春、秋、（代名詞も交れりと見ゆ）

居言 謠、宿、紅葉、戀、楯、

略言 歌、宿、來、長、遙、

合言 春日、秋風、山川、谷水、

詞 今の動詞形容詞なり二種に大別し更に細分す。

説動用詞 今の所謂動詞

四韻詞 今の四段活

一韻詞 今の上一段活

伊字韻詞 今の上二段活

衣字韻詞 今の下二段活

變格詞 今の四種變格

説容體詞 今の所謂形容詞

音雜活 今のくしき、しくしきの活

辭 は即且爾乎波の類なり氏は動辭二種に分ち更に五種に細分せり。

動辭 今の所謂助動詞なり言に繋らず辭辭に合することなく説動用詞又他の動辭に繋りて断て止りも下なる言詞に續きも又段々の辭の繋て下なる

言詞に係りも言に續きも断て止りも爲る者にてこれに二種あり云云

屬とならざる動辭 詞并辭に憑所のあらざる者四種あり（特別なる形を有する義か）

ずぬ、ね、む、め、ませ、まく、ましまし、か、け、き、し、しか、

屬となる動辭 詞又は辭に憑所あるを其詞其辭の屬と號て區別たるなり。

九種あり（動詞形容詞と同じ形を有する義かすべて屬といふ事詳ならず）

てふ、てへ、て、つ、つる、つれ、しめ、しむ、しむる、しむれ、

なに、ぬ、ぬる、ぬれ、ざら、ざり、ざる、ざれの類、

べく、べし、べき、べけれ、まじく、まじ、まじき、まじけれ、

てむ、てめの類、てけてきてしかの類、

靜辭 は言詞并に動辭に繋り辭辭に合せ等して上の意を下なる言詞へ云係

て、下の結に拘ると拘らぬと二種（所謂且爾乎波願歎禁となり上の意を問掛

け等して断て止る一列所謂感動詞の一部）と併て三種の差別ありといへり。

以上は氏の分類の大要なり而して氏は別に屬詞といふ一目を設けて説明せるものあり。



その屬詞と稱せらるゝものは所謂良行變格再轉格と稱せらるゝ

善か ら り る れ  
書け ら り る れ

の類と所謂相の助動詞と稱せらるゝ

させ、 さす、 さする、 さすれ、  
せ、 す、 する、 すれ、  
られ、 らる、 らるゝ、 らるれ、  
れ、 る、 るゝ、 るれ、

等をあげたり。

今氏の説を義門氏の説に比するに、其の詳密なること數頭地を抜けり。義門氏の所謂體言を言とし、用言を詞とし、かの且爾乎波の處置につきて頗困難せるを看破し更に辭の一目を設けて其の位置を確めたるなど實に著眼の凡ならざるを見るべし。此に於いて義門氏の過失は救はれたり。之を鈴木氏のに比するに體言と用言と相對する所はまさに氏の誇るべき所ならむ。かの辭を動靜二種に分つは直接にいへば義門氏の考案をとりたるものにして、富士谷氏、鈴木氏の共に存在を認めたるは明なる事實なれど、氏の如く判然區劃を立つべきを言明せざりしを以て、功はまさに氏に歸すべし。其の他靜辭の小區分の如きも亦富士谷氏の影響は多少存在

すと認められ、其の分類甚明晰なるものとす。この點に於いては又大槻氏の説の源泉となりしものと察せらる。又從來「あり」を形狀言に入れ來りしを氏は之を動詞の中に編入せり。今の大抵の文法家の説之に基くなり。要するに氏の説は頗注目すべきものにして、先後の學者との關係も頗緊密なるものとす。

然れども翻つて考ふるに氏が分類の根本原理は如何、氏は一の主義によりて一切を區分せしか、否かと問ふに至りては返答に躊躇せざるを得ざるなり。言詞辭の三者は決して一の見地よりして三分しうべきものにあらざるなり、少くも辭と辭にあらざるものと二分せられ、其の辭にあらざるものが、又所謂言と詞とに區分せらるゝものならずんば、其の區分や一時の思ひ付、感情的にして決して學理上の根據を有せざるなり。氏の命名は明に三種對立の形勢を有せり。これ頗疑を挾ましむるものなり。而して氏は辭に動靜の區別をなし亞類を立つることをしながら、かの觀念詞には體用の別あるを直に採りて辭の對等の地位に立たしめたり。その説を合理的になさしめば、まさに次の如きものならざるべからざるなり。

第一分類

第二分類



氏は第一の分類に於いて形體上の區分と職能上の區分との二原理を何の苦もなく配合して都合よき分類をなせり。これ論理上あるべからざるものなり。且、又氏は屬詞といふ一目を別に設けたり。この屬詞とは詞に屬するものなるは明なるが、其は分類上如何なる地位を占むべきか。詞か詞ならば單に詞といひて可なり。屬詞とはいふべからざるなり。詞にあらずとせば遂に入るべき地位を發見せざるなり。これ、氏自が造りたる一破綻なり。なほ又氏の言とは如何なる意ぞ。主位觀念をあらはす義か、さらば必しも活かぬ言の義にあらざるべし。若し「蓋し」の類は氏は如何なる地位に置かむとかする。言の例を見るにこれらの語を容るべき地位なきなり。しかも、これらは純粹の國語にあらずや。之を以て見れば、氏の論はなほ論理上の缺點と國語の本性に適合せざる點とを有するは明なり。

氏の説は此の如く缺點を有するにもかゝらはらず、殆わが國語學界に瀾漫し、明治の聖代に至れり。其の間名目こそかはりたれ、實質は毫もかはりたることなく、所謂舊派の語學者と稱せらるゝものは滔々として皆氏の亞流たるなり。即體言(言)用言(詞)助辭(辭)の三大別をとれるものは、悉氏の繼承者なり。

氏の説と殆前後して西洋文典の範疇は鶴峯戊申氏の手によりて輸入せられたり。今の文典と稱せらるる程のものいづれか西洋文典の影響を蒙らざる。然れども余は今鶴峯氏等の影響を蒙らざる近時の學者を紹介してしかして鶴峯氏にかへらむとす。

### 五 權田直助

權田直助氏は學說上廣蔭氏に次ぐべき學者なり。廣蔭氏の説を繼承したるあと見ゆると同時に氏は當時盛に行はれし西洋文典の模倣文典の外に超越して殆關せざるものゝ如くなりしを以てなり。

氏も體言、用言、助辭の分類をとれり。然れども、語學自在を見るに氏の分類は條理あるものなるを示せり。曰はく、  
詞と辭とは本ツ圖の如く詳に別れたり。然れども動もすればこれを混交ることあり。故、今是を辨ふべし。そは先詞は各一つの理を有ちて其の理の隨に用をなし、辭は獨其の理を全く有てる事無く、詞に附きて用きを爲す。これ詞辭の差別なり。

といへり。理とは所謂觀念の事なるべし。觀念上の差によりて詞と辭との別を明示せり。かくて詞を再體言用言に二分することは明言せられざれど推して知らる。

さて體言の條に曰はく、  
體言とは居りて動かぬ言をいふ。これに大別六種小別三十六種あること詞の眞澄鏡に圖せるが如し。

といへば詞にして活用なきをいふこと明けし。其の大別六種の目左の如し。

有形體言 名あり形あるもの、

無形體言 名のみありて形なきもの、

假體言 名にもあらず形もなく唯居りて用かぬ者、

轉用體言 諸の用言の連用言の言居りて轉りて體言となれるもの、

合體言 上の四種の體言の二つ合りたるもの、

屬體辭 上につく辭どもをいふ。

次に用言の説明に曰はく、

用言とは動きて活く言をいふ。これに大別二種小別六種あること詞の經緯圖に圖けるが如し。

といへり。其の大別小別の目は左の如し。

作用言

四段活、上一段活、下一段活、上二段活、下二段活、

形狀言

良行四段活一格 久志幾活

この作用形狀の別は富樫氏のより鈴木氏にかへりたるなり。さてこの體言用言が所謂辭に對する詞なるは詞の眞澄鏡にて體言を表示し、詞の經緯圖にて用言を圖

示せるを以ても知らるべし。詞は今活かぬと活くとにて二分せられたり。辭は如何

助辭は詞に附きて其の用きを助くるものをいふ。これに體辭用辭の別あり。體

辭とは居りて動かぬ辭をいふ。これにまた上辭下辭の別あり。上辭とは詞の上に

附きて用く辭にて感歎、疑問、接續、指示、助勢、通用の六種にして眞澄鏡に載せたる

屬體辭是なり。下辭とは詞の下につきて用く辭にして經緯圖に出せる歎、疑、願、請

助、雜の六種なり。用辭とは用言と同じく四段、二段、久志幾等の活きあるをいふ。こ

れにまた作用言、形狀言の別もあり云々。

これを以て見れば氏が分類は、更に紛亂の跡なく、第一次には、其の語の職能上よ

り二種に分ち、互に相交又する所なからしめ、第二次には共に活くと活かぬとにて

相對せしめたる所實に明瞭なる條理を存すといふべし。之を表示すれば、

體 用

詞 體言 用言

辭 體辭 用辭

の如くなるなり。惟ふにかゝる整然たる分類は殆、前後に比較すべきものなく、若、この分類にして國語の眞性に合するものならしめば、我が國語の法則ばかり秩序正しき語は地球上にまたとあるまじ、之を西洋文典の模倣よりなるものに比すれば、素より同日の論にあらず。富樫氏の缺點も、義門氏の難點も、鈴木氏の矛盾も、悉、氏に

よりて一掃せられ、夕立の一村雨すぎしあとのすか／＼しきにもたとへつべし。富士谷氏の説も或は一步を譲らざるべからざるかも知るべからず。

氏の説はかくの如く、秩序整然たる如く見ゆれども少しく注意すれば、直に一破綻の眼前に現はれざるべからざる運命を有せり。何ぞや。氏は體辭中の上辭といふもの一方にては辭なりといひながら、一方にては體言の分類に入れ置けり。氏の體言の大別六種のうちの一種はこの體辭なり。この故に體辭の一半は體言六種の一に該當す。これを以てそれらには上辭として體辭の一部に存し、一方には屬體辭として體言の一部に存す。而して何れに入りても資格にも何にも變動を來さざるは氏の明言せる所なり。之を以て論ずれば氏はこの一種のものにつきて頗窮したるなり。この辭の如くにして言の如く言の如くにして辭の如くなるもの歸する所は遂になきなり。これ氏の説の一大破綻なり。この所置につきて判然たる斷案を下さざる以上は氏の説はそこよりして根柢を覆さるゝに至るべし。

氏の説は條理あるが如くにして、しかも遂に最後の勝利をば有せざりき。之につきて起れるを今の岡澤鉦次郎氏とす。岡澤氏の説は系統上權田氏の説を受けたるは明なれど、西洋模倣文典につきての一種の反動と見るべき點もなきにあらざれば、今は先鶴峯氏にかへらむ。

六 鶴峯戊申

鶴峯氏の説は寧富樫氏に先てり。氏は實に西洋文典の範疇を國語に應用せし最初の學者なりとす。

氏の説の和蘭文典に根柢を有するは疑ふべからざる事實なり。其の所説が如何程迄國語の本性に適合するかは一大問題なり。今先其の大綱を紹介せん。

氏曰はく凡ての言語は九品九格に分ると。九格は今用なし。九品の目左の如し。

第一實體言 國、都、山、川、霜、雪、人、畜、ナドノ如ク實物アル體言ヲ云ナリ。其中ニ白さ長さナドイフ辭ハ其分量ヲイフ體言ニテ是スナハチ實體言ノ類ナリ。今の名

詞)

第二虛體言 深き、淺き、長き、短き、白き、黒き、多き、寡き、マタ有る、無き、ナドノ如ク實

物ナキ體言ヲイフ。今之形容詞)

第三代名言 自ラヲサシテ吾ト云ヒ、他ヲサシテ汝ト云ヒ又彼トイフ類或ハ汝が妻、我がの、此雪、其白き、これ、それ、なに、たれ、いく、みな、ナドノミナ事物ニ代ヘテイフ辭ニシテ、スベテ六等ニワカレタリ。今之代名詞にあたり。

第四連體言 降る雪、照る月、行く人、鳴く蟲、ナドノ如ク、用言ヨリ體言ニ續ク辭ナリ(英文典などの分詞をいへり。すべて動詞などの連體形をさせり。)

第五活用言 行く、ゆき、ゆけ、ゆかん、鳴く、なき、なけ、なかん、ナドノ活ク辭ナリ(今之動詞)

第六形容言 雪が白くふる。虫が悲しく鳴くナドイフトキノ白く悲しくノ如ク、  
スベテ用言ノ活ラクサマヲアラカジメ形容スル辭ナリ。(副詞の義)

第七接續言 譬へバ汝が顔色は甚だ白しト切レタル語ヲ直ニ下文ニ接ケテ然  
れども雪にくらぶればいさゝか紅なりナドイフトキノ然れどもノ類是ナリ。

(今の接續詞)

第八指示言 雪の中雪の上ナドイフガ如ク上下内外遠近前後ナドヲ指シシメ  
ス辭ナリ。(前置詞の雛案なり)

第九感動言 (今の感動詞)

以上の九種は、これ氏が單語分類の品目なり。其の説の可否は今いふまでもな  
るべし。唯氏の説は吾人に西洋文典の所説が到底其のまゝ國語に應用せらるべ  
からざる事を教訓したり。

氏の説は何に基きしものか。今明にする事を得ざれども、其の用語が文化年中に  
和蘭文典の原書に本づきて藤林泰介氏が著したる和蘭語法解といふ書と大體に  
於いて一致するを見れば、多少參酌せられたりしは推知するに難からず。而して和  
蘭語法解に數言の目あるにこれにはなきなり。この故に氏の語學新書に「蘭に十品  
四格あり。云々戊申語名を正して諸家を折衷し論定して九品九格とす」といへるは  
この數言の目を缺きたるによること著し。他は其の術語の上までも一致せること

少からず。

氏の命名の不當なること、たとへば形容詞を以て、虚體言といへると、かくては所  
謂實體言と相對するものなるべきに、それを修飾するものをいへること、又別に連體  
言といふ目を設けてかの分詞にあてたること、こは一の詞にあらずして動詞の一  
用法にすぎぬをや。又活用言の名の下に動詞のみを含ましめたることこれなり。  
其の他分類の矛盾せるは形容言、接續言、指示言、感動言に於いて著しく發見せら  
る。

形容言十九種の分類を見るに紛糾錯雜條理殆立たず。今假に之を概括すれば左  
の異類存す。

今の所謂副詞 かつ、先づ、遂に、まだ、大方、なに、

形容詞の副詞法 よく、深く、間なく、

副詞と且爾乎波 もしも、

且爾乎波 見よと咲く、霜の置く、すらも、

且爾乎波と名詞 よりさき、

叢語 一日もなし、理りありや、いさ知らず、

ならねば、涼しや、

接續言に至りても亦同じ。

且爾乎波

と、に、とも、ども、ど、よりは、て、にて、とは、  
よりは、

接續詞

また、はた、さて、かれ、すなはち、  
たとひ、

副詞

より外、より後、

熟語叢語

さらば、然らば、もしあらば、願くは、こひしくば、  
指示言に於いても同じ。

且爾乎波と名詞

のなか、のほか、がした、上に、中に、後を、上を、  
跡より、間より、

感動言に於いては殊に甚し。今繁を厭ひてあげず。  
以上一例をあげたるのみにても國語の分類として決して承認すべからぬこと  
は明なり。氏の所説は吾人に教ふるに名詞代名詞動詞等は更に衝突する所なしと  
すとも、副詞接續詞に至りては殆ど指示する所の實體の有無をだに疑はしむること  
を以てせり。

嗚呼單語分類の學甚難きかな。從來の學説にしては助辭の本性殆ど解すべからず。  
外來の學説にしては副詞接續詞の本體捕捉し易からず。余は氏が教訓を荷ひて學  
史上氏の繼續者たるべき學者に就きて解決を乞はむとす。

七 田中義廉、中根淑

安政六年鶴峯氏歿してより十五年明治七年に至りて田中義廉氏の小學日本文  
典出づ。

田中氏のは英文典を基礎とせるものなるが如しといへども鶴峯氏が残し、問  
題は氏に至りて解決せられざるべからざる順序なり。

氏は國語の一切を七品詞に分てり。其の目次の如し。

名詞、形容詞、代名詞、動詞、副詞、接續詞、感詞、

其の順序の鶴峯氏のかはらざるは、又今の文典と體裁を異にせるを見るべし。今  
の文典は殆ど全名詞の次に代名詞を説くなりしかして、今の文典の術語は氏の説に  
よりて殆ど確定せられたるものとす。

先虚體言を形容詞とし、これによりて形容言を副詞と改め、連體言、指示言の目を  
廢したるなど、研究の歩武の進めるを見ることをうべし。今其の難問となるべき品  
詞につきて氏の解説を見む。

形容詞は事物の性質模様を示す詞なり。

形容詞は名詞の現したる動植事物の性質形狀を精く示すものにして、常に名  
詞の前にあり。即良キ人美シキ花暖ノ春大ナル家等ノ如シ。

形容詞には本來のものとの他の詞より轉じ來るものあり。假令ば眞砂の眞小川

の小初陣の初等は本來の形容詞にして他の詞に變ずることなく、又詞尾を加ふることなし。

其他赤白黒高廣甘苦等も亦本來の形容詞にして直に名詞に續くものなり。即赤糸黒馬高山廣庭甘酒苦菜等のごとし。然れども此類の詞は又キの詞尾を取ることもあり。即赤キ糸高キ山苦キ菜等のごとし。此等は又詞尾を變化するに由て他の詞となることもあり。假令ば赤キ糸といふときは糸の性質を示すものにして、形容詞なれども糸ヲ赤ク染ムといふときは副詞となるが如し。

これを見るときは氏の形容詞の今の所謂形容詞と異なる點を發見すべし。こゝに於いて余は氏が所謂形容詞の語尾を如何に處置せるかを見むと欲す。

通例形容詞の格別なる語尾はナルナノ キシキラシキベキタルル、ラル、なり。此等は皆其意味に差異あれば、又各其用法を異にす。

ナルナノの詞尾は多く名詞に加へて、形容詞となすときに用ゐ、或は又本來の形容詞に加ふるものなり。(略)

キの詞尾を加ふるものに四體あり。

第一本來の形容詞に加ふるものなり。即青キ赤キ高キ廣キ等のごとし。

第二シに終りたる語に加ふるものなり。即宜シ美シ麗シ等のごとし。

茲に宜シ美シ麗シなどは動詞の形をなせども、元來形容詞とシなる助動詞

と結合したるものなり。さて此シは變化せざる助動詞にしてアルアリと同意なり。故に宜シ美シといふは宜シクアル、美シクアルといふに同じ。

第三詞尾のシをキに變じて形容詞となすものなり。即善シより善キ等の如し。(節略)

第四ムに終る動詞の詞尾をキに變じて、形容詞となすものなり。即痛キ ハ痛ムより來、或は樂キ 悲キ等は樂ム 悲ムより來るが如し。(節略)

シは多く動詞の詞尾をア緯の音に替へて、これに加へ、形容詞となす時に用ゐるものなり。假令ば噪ガシキ 疑ハシキ 望マシキ 悦バシキ 紛ラハシキ 穢ラシキ等ハ皆噪グ 疑フ 望ム 悦ブ 紛ル等より來るが如し。(節略)

ラシキの詞尾は名詞に加へて、其の近似せる風情を示すものなり。即男ラシキ 女ラシキ等の如し。

ベキの詞尾は動詞に加へて、活動の意味を示すものなり。即見ルベキ 書眠ルベキ 時等の如し。

右等の詞に於けるキシキをクシクに變じ、又ラシキベキをラシクベクに變ずるときは皆副詞となるものなり。

タルル、ラル、の詞尾は動詞に加へて形容詞となすときに用ゐらるゝものなり。即學ビタル 人定メタル 事流ル、水教ヘラル、生徒等の如し。

これらが形容詞の詞尾と稱せらるべきものか否かは別問題として氏の説の形容詞より副詞に轉ずる緣故によりて次に副詞を尋ねむ。

副詞は動詞或は形容詞の現したる形狀情態を猶精く示すものにして、常に動詞及び形容詞に副ひたる詞なり。

又他の副詞の傍にありて其の意味を審定することあり。

さてかのクを如何に説明せるかと見るに、

第一キに終る形容詞の詞尾をクに變じて副詞となすものなり。即高ク早ク云々等は皆高キ早キ云々なる形容詞より來るが如し。

又此類の詞の詞尾をシに變ずるときは活用の意を示す故に往古は總てクシキ活用の詞として用言、動詞の中に收めたり。然れども本然の性に從て今之を三種に區別す。

さて又氏は副詞を十三種に區別せり。其の内容を見るに又なほ雜駁なり。

所謂形容詞の副詞法

名詞代名詞數詞にニを添へたるもの

右ニ コ、ニ 第一ニ、

所謂副詞なるもの

所謂助動詞なるもの

ズ ヌ

動詞にテの添はりたるもの

別シテ 限リテ

熟語の動詞

且爾乎波

然リ バカリ ハ バ ノ ミ リ カ

次に動詞にうつりて氏の説に聞かむ。

動詞は事物の作動仕業等百般の狀態を示すものにして、實に文章に主格の名詞と共に最首要の詞なり。故に一の動詞を缺くときは全き文章をなさざるを以て意義を通曉すること能はず。云々、此故に説話文章を論せず、一の動詞を缺くときは全體をなさざるものなりと知るべし。

次に氏は動詞の活用を説明して曰く、

我國の動詞は作動の次第法及時限に從つて或は分詞となり或は助動詞と結合し或は獨立して名詞となる等に於いて、悉く其の形を變書す。これを動詞の活用といふなり。

分詞につきていはく、

此變化の中形容詞の用をなすものあり。これを分詞といふ。如何となれば此詞は元來動詞の變書にして文主の作動を示せども亦形容詞の用を兼ねるを以て兩部分の詞に涉る故に分詞と名づくるなり。

次に接續詞にうつらむ。

我邦の接續詞に二種の大區別あり。第一種は兩名詞間の關係を示し、或は名詞



と動詞との關係を示すものにして、多くは名詞の位地或は作動の時限を審定するものなり。さて此詞は常に名詞の後にあるを以て又後詞と名づくることあり。とて其の例として出せるものを見るに、

ヨリ、マデ、中、外、上、下、前、後、周圍、内、裏、  
を示せり。第二種のは

詞を連ね、句を合はせ、或は章を續き、文意を連續するものなり。  
とし、其の例として

ト、及び、而シテ、并ニ、且、加之、ツ、ナガラ、此ノ故ニ、然ル故ニ、  
從テ、爲ニ、ニ於テ、雖モ、ト、トモ、ド、ドモ、ナラバ、モシアラバ、  
ヨリハ、專、譬ヘバ、即、

等を擧げたり。之を氏の説の眼目とす。

田中氏にさしつぎて中根淑氏あり。明治九年一書を著して日本文典と名づく。其の説大體は田中氏のに似たり。今其の異なる點の重なるものを示さむ。

田中氏が接續詞の第一種とせるものを中根氏は擧げて一品詞として之に後詞といふ名目を與へたり。こゝに於いて八品詞となれり。この名目は既に田中氏の試みしものなるは上に述べし所なり。然れども氏の後詞は田中氏の第一種の接續詞とは其の内容に於いて異なり。即中根氏の後詞といふものは大抵今の所謂且爾乎

波にあたり。これを田中氏のに比較するに中根氏の所説の妥當なるは明なり。此の點に於いて田中氏は中根氏に數歩を譲らざるべからず。田中氏が形容詞の詞尾の中に計へ入れたるノはこれによりて自然の結果として後詞となれり。

中根氏は今の所謂形容詞を全動詞とせり。曰はく、

シヲ語末ニ含ミタル動詞ニテ之ヲ加縦行ニ變ズル者多シ即善シ惡シ強シ等  
ノ如キ變ジテ善カラン惡カラン善キ惡キ善ク惡ク善ケレ惡ケレ等トナルナリ。

この説はかの田中氏のクシキを分ちて箇々の語尾とせることとは矛盾せり。而して中根氏はこのクキの用法を如何に説明せしか副詞の條に曰はく、

語尾ニクヲ含ム者トハ即淺ク掘ル深ク疑フ高ク聳ユ亂リガハシク爲ル等ノ  
如シ是ハ形容詞ニ於キテ何レモ語尾ニキヲ含ム者ナリ。

これを以て見ればなほ田中氏の説の如し。

中根氏は後詞を一方に立てながら、又一方に於いて、其の後詞が形容詞、副詞の一分たることを明言せり。又所謂形容詞を動詞の一種としながら、一方に於いては、又形容詞副詞となるものとせり。かくてはいづれか本體なるを詳にせず。且又一方に於いて分詞といふ目を立てながら所謂シを語末に含みたる動詞のキの變化の形容的用法を分詞なりとせで、直に形容詞としたるなど、頗曖昧なるものなり。

西洋文典の範疇が國語の分類に如何程迄應用せらるべきかを論ずるはこの章

の目的にあらねば、余は之を論せざるべし。然れども其が國語の本性に全然適合せぬことは明瞭なる事實にして二氏の論之を證明してあまりあり。

今二氏の説を品騰せんに田中氏のが英文典に近く、中根氏のが比較的國語の本性に近きは誰も見る所ならむ。かくて見れば、田中氏は英文典に近き度の多きにつれて、國語の本性に衝突する點多く、中根氏は國語に近づきたるだけ不合理の點多し。兩氏の説到底此のまゝにて永く保存せらるべき命數を有せざるなり。

今兩氏が吾人に教ふる處を摘記すれば、

田中氏によりては吾人の且爾乎波と唱ふるものは、品詞篇に存立すべきものにあらずして各自分散して各種の品詞の附屬物となるべく、所謂單語の價値を有せざるものとなるなり。くしき活は一の活用ある語として立つべからず、必動詞形容詞、副詞に分屬すべきものなるを示し、副詞接續詞の大半は且爾乎波及其の他の語なるべきことを教へたり。此の如くせざれば西洋文典の範疇に合せざることを明瞭に示せり。

中根氏の説によりて又吾人は學べり、國語の本性によりてくしきの活を立てむとすれば西洋文典の範疇によりて少からぬ支吾を受くることを、又且爾乎波を一品詞に立つる時も亦一方に隙を生ずると共に一方に贅物を生ずることを、其の他枝葉の點につきては今論する邊を有せず。

西洋文典の模倣は最初鶴峯氏に試みられて成功なく、次に田中氏に試みられて又成功なく、中根氏に至りて到底望むべからざるを發表せり。之について起れるものは又模倣をのみ事とすべからざる事更に論するまでもなし。茲に於いて折衷説起れり。

#### 八 大槻文彦

西洋文典の模倣行はれ、其の到底不可能なるを見るに及びて、古格と西洋風との折衷を試みるもの出来れり。惟ふに鶴峯氏以下三氏も亦なほ折衷にすぎざるなり。かくて、何の文典くれの文典と雨後の春草に劣らずあらはれ來り、折衷又折衷、遂に空中に樓閣を構へ、西洋文典にも從來の語學者の説にもなく、さりとはた、國語の本性に合せりとも思はれぬ如何はしき鶴の如き文法書の出でしこと其の數幾何ぞ。此の間に嶄然頭角をあらはし、西洋文典の智識を根柢とし、我が國語を精査し、遂に一世を風靡する大著をなしたるを大槻文彦氏とす。

惟ふに大槻氏の説は折衷の尤粹なるもの、しかもそれら文典のうちにて最、國語の本性に適せるものとは一般學者の認むる所なり。吾人はこの畏敬すべき最近の先輩の説に對して十二分の觀察を加ふべきなり。

氏は單語を八品に分てり。

名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、且爾乎波、感動詞、

これなり。抑氏は何を標準としてかくは分類せるか。余は先氏の詞の觀念にきかざるべからず。

言語ハ一音又ハ數音ニテ成ル、をりく、にあそぶ、いとまは、ある、ひと、の、いとま、なし、とて、ふみ、よま、ぬ、かな、トイフ歌ノ中ニテ右ノ方ニ點ヲ付ケタルガ如ク、個々ニ別ツトキハ十四トナル、斯ク分チタル一ツヲ單語トイフ。

ココニイヘル單語ハ英語ノ Wordニ當ル、

といへり。かくては唯例示せるのみにて解説にあらず。吾人は、先第一に方途に迷はざるべからず。止むを得ず、英語の Wordをたよりにて其の觀念を得んとす。

A word may be defined as an ultimate independent sense-unit

余は先この ultimate independent sense-unit を以て氏の單語の定義なりとして進まむ。かくて氏が且爾乎波を以て斷然單語の一種となして他の種類と截然たる區域を立てられしは實に氏が功績の一なりとす。かの鶴峯氏以下この單語の觀念につきてだに曖昧なりしこと想像するに難からぬなり。

次に氏は何故に舊來の分類法を執られざりしか。其の説に曰はく、

衆語ヲ先ヅ體言、用言、助辭ト大別スルコト惡シトニハアラネド、此ノ概別ニテ能事了ルベキニアラズ、必ズ復タ其ノ下ニ小別(八品詞)ヲ立テ、更に詳説セズハアルベカラズ。然ルトキハ、先ヅ體言、助ニ大別シテ説クコト何等ノ必要モナキヤ

ウニテ徒ニ一ノ煩ヲ設クルニ過ギザルベク、初ヨリ直ニ八品詞ヲ各獨立ニ説クコト、却テ甚ダ簡明ナルヲ覺ユ、此ノ故ニ此ノ篇ハ體言助辭ノ舊別ニ據ラズ、初ヨリ八品詞ニ部門ヲ立テ、説ケリ。

體言用言助辭の區別の確乎たる根據を有する説ならぬことは余の既に論せし所なり。而して氏はこれを以て敢へて惡しとはあらねど、其が概別にすぎざるを以て更に詳説すべき必要を認め、こゝに其の研究を始め、其の結果としてかの體言助辭の三大別はかへりて煩を設くるに過ぎざるを以て、直に、八品詞を各獨立に説くこととせざるは明に言はれたることなり。此を以て見れば氏の品詞は類別の順序として第一に三大別し、更に八小別したるものと見ゆるなり。而して、其の分類の根元理は何處にあるか。第一類別の體言、用言、助辭の三つが既に根柢薄弱なる分類なるに其の上に加へられたる分類の覺束なきことは砂上の樓閣にあらざらむや。さるにても、氏はかの三大別と八品詞との關係を如何にしたるか。氏は研究の順序を立てて示されざるが故に、確に之を知るを得ずといへども、なほ之を認むるに難からざる點あり。氏は曰はく、

體言トハ語尾ノ活用セヌ語ノ意ニテ名詞之ニ屬シ、用言トハ語尾ノ活用スル語ノ意ニテ動詞之ニ屬シ、形容詞モ之ニ入ル、助辭トハ體言用言ノ外ナル一切ノ單語ヲ雜揉包括シタルモノニテ即チ副詞、接續詞、且爾乎波、感動詞ノ如キ活用ナ

キ語モ助動詞ノ如キ活用アル語モコレニ屬ス、扱體トイヒ用トイフハ元來支那ニテ事理ノ性、理、動、靜等ニイフ名詞ナルヲ、姑ク名詞、動詞、形容詞ノ活用有無ノ類別ニ假用セルナリ然ルニ世ノ文典中ニ副詞、接續詞、感動詞ノ如キヲモ其語尾活用セネバトテ妄ニ體言ノ中ニ加ヘテ體辭ナド名ヅクルアルハ體用ノ字義ヲモ解セズ、當初命名シタル人ノ趣意ヲモ誤解セルワザナラム、是等ノ語ヲバ支那ニハ助辭、助字ナドトコソイヘ實字ト同一ニ見ルベクモアラズ。

とあるによりて、氏の説の源泉はまさに富樫氏のなること明なり、氏が本居大人、義門師などの名を唱へたるは少しあかぬ心地す。さても氏のこの三大別の説明もなほ矛盾せるは何事にも條理正しき氏にも似合はぬことよ。先、見よ體言、用言の言と助辭とは區別あるものなりと何處に明言せるぞ。氏は單語の種類を區別する説として三大別を説けり。この點より見れば、體言、用言、助辭は共に同一原理によりて區別せられしものなるは明なり。氏の後の説によりて見れば、體用の別は言の類別なりといへるに似たり。然らば何故に言辭の區別を明示せざるか。之を明示せずして、明りに人を答む。吾人より見れば、體言、用言、助辭等の名目取るべくば、まさに權田氏の如くならざるべからず。又氏の説明にては體言も語なり、用言も語なり、助辭も單語なり、共に同一類の語たるなり、單語たるなり、英語の *Word* に當るものなり。何處に其の差を認むべき。既に體言、用言、助辭を以て共に單語とし、*Word* とせば語尾活

用の點より見れば體言、用言の外さらに他の種あるを許すべからず。且又氏は體言、用言以外に又活用せぬ語と活用する語とを集めて、助辭の一種を爲すといへり。かくては語以外に又語あることゝなる。其の何の義たるか、殆解すべからざるにあらずや。而してこれ實に余が義門氏に對してはなちし批難の矢なり。余はこの畏敬すべき先輩の、なほ、謬見を脱せざるを怪む。之を要するに氏は舊來三種の別は實際必要あるが如くにして必要なきをいひ、之を了解し得し如くにしてなほ、十分に條理を立てぬ所を以て見れば、氏は唯一時の思ひ付にかの三種別を當つべく試みられたるまでにして、さまで深き根據あるにあらざるべし。氏の唯急とする所は英文典と國文法との調和なるのみと思はざるを得ざるなり。いでやこの邊の消息をうかがはむ。

西洋ニテハ單語ノ類別ニ、名詞、代名詞、形容詞、冠詞、數詞、動詞、分詞、助動詞、副詞、前置詞、接續詞、間投詞、等ノ名稱アリ。今左ニ概略ニ此ノ篇ノ類別トノ異同ヲ説カム。右ノ名詞、代名詞、數詞、動詞、助動詞、副詞、接續詞ハ此篇ニ説クモノト略同ジ、但シ我が數詞ハ代名詞ト共ニ文中ニ在リテ、其位置用法名詞ニ異ナラズ、因テ共ニ名詞ノ中ニ入ル、我が形容詞ハ語ノ末ノ變化スルコト動詞ノ如ク、其ノ語形、彼ノ形容詞ト甚異ナル所アリ。國語ニ冠詞ナシ、分詞トイフモノ我ニテハ動詞ノ變化ノ中ニアリ。又彼ニアリテハ助動詞ハ多ク動詞ニ附屬セシム。然レドモ我が助動詞

ハ其語形ノ動詞ニ似タルアリ、形容詞ニ似タルアリテ語ノ末ノ變化スル者モ多ケレバ獨立スルナリ。彼ノ前置詞トイフモノハ名詞ノ前ニアルガ故ニ其名アレド、我ニアリテハ共同趣ノ語ハ名詞ノ後ニアリテ、位置正ニ相反セリ、因テ名詞ノ後ニ付クベキ同趣ノ語ト共ニ且爾乎波ノ中ニ入ル間投詞ハ此ノ篇ニイフ感動詞ナリ。然レモ彼此稍用法ヲ異ニス。これを以て見れば氏が説の根柢は西洋文典にありて、それを我が國語に對照して説を立てたること明なり。今次を追ひて氏の説が單語類別の上に於いて如何に貴重なる教訓を吾人に與ふるかを述べむ。

- 一、氏は名詞を意義によりてよりも語形によりてよりも寧且爾乎波との連接によりて之を確めたり。これ頗注目すべき點なりとす。
- 二、氏は代名詞數詞を名詞の一種とせり。かの語形よりも意義よりも且爾乎波との承接に重きを置きて見るものとすれば、誰もこれに首肯すべし。
- 三、西洋の代名詞と我が所謂代名詞との一致せぬことを明言し、我が所謂代名詞の只名詞中一種のものにして畢竟するに煩を省かむが爲に用ゐらるゝものなることをいへり。
- 四、西洋にていふ關係代名詞の存在せぬことをいへり。

五、所謂形容詞が西洋文法譯語の形容詞と意義は似たれど、語體用法甚異にして、語尾に變化あり、法あること動詞の如くにして、且名詞の後に居て文の終をも結べるものにて *Attributive verb* といふべく、直に形容動詞と命名せば可ならむとまでいへり。

六、所謂接續詞と且爾乎波との別を認めたり。

七、洋文典の譯語の間投詞などいふものと所謂感動詞との差異を明言せり。

氏の説の成功せる點は名詞動詞にあり、形容詞も亦成功に近し。然れども其の品詞の分類全般の大局は如何。氏は

各國天然ノ言語ニ差違アルベキハ理ノ然ルベキ所ニシテ其間ニ惑ヒヲ入ルベキニアラズ。唯其國語ノ天性ニ隨ヒテ語法ヲ制定スベキナリ。彼ニアレバトテ我ニ模擬捏造シ、彼ニ無ケレバトテ我ニ制定セザルハ其見亦陋ナラズヤ。といへり。意氣軒昂殆當るべからざる風あり。豈、欽すべからずや。而して氏のこの主義によりて立てし所のもの果して何ぞ。助動詞の一門を立て、動詞に附説することとを止めたるなり、前置詞の名を廢して且爾乎波の目を置けるなり、冠詞の目を廢したるなり、分詞を動詞變化の一としたるなり、數詞代名詞を名詞の下に攝したるなり、形容詞の動詞と似たるをいひたるなり。これ西洋文典との異點とする所なり。然れどもこれ氏が大發見なるか。冠詞が國語になきは古來一人異論者あるをきか

す。且爾乎波を一門と立て、分詞を動詞の一變化とし、數詞代名詞を名詞の下に攝せしめ、形容詞の動詞と似たるを承認するは所謂體言用言助辭の分類を取れる古來の學者の既に説ける所、助動詞を動詞より離し、且爾乎波とも區別するは富樫權田諸氏の既に試みし所なり。すべてこれら諸氏の教へによらでも少しく國語の學に携はるもの誰かこれらにつきて知らざるものあらむや。氏の創見はこゝに存せざるなり。氏は唯これら從來の説を西洋文典に比較して説き、西洋風の名を與へたるのみ。然れども彼の西洋文典の眼より見れば、實に國語と洋語との區別を説破しえたりと見らるべきは必然の數なり。たゞ從來の語學家は西洋文典を知らず、洋文典家は國語の法格を深く索めず、こゝに於いて一世舉りて氏に謳歌せるは實に自然の事なりといふべし。

さても古來の語學家の目より見て是非するに躊躇するはかの副詞接續詞感動詞の三種に過ぎざるなり。氏の創見は實にこの三品詞を確立せむとするにあり、その他はわがこの語類の研究史上更に珍とするに足らざるなり。この三品詞に於いて氏は洋文典と多少の差異を認めながら斷じて之を立てし所のものなり。この三品詞と他の五品詞との由來は明白に氏の學說の折衷たることを示すものなり。吾人は今この三品詞が西洋文典のと如何に異同あるかを問はず、唯氏の説の合理的なるか否かを檢せむと欲す。西洋文典の所説と國語との比較の如きは章を新にし

て讀者に見えむと欲するなり。

氏が副詞接續詞又は感動詞と名づけたるものは詞を如何なる點より見て立てたるものなるか。氏は曰はく、

副詞ハ動詞ニ副ヒ或ハ形容詞又ハ他ノ副詞ニ副ヒテ其ノ意味ヲ種々ニ修飾スル語ナリ。

といへり。副ふとは如何なる義か。何處にも釋せるを見ず。遂に其の義を知るべからざるなり。止むを得ず、之を實例に徴するに大抵其の所謂修飾せらるべき語の直上にありと見ゆ。そは次の言にて知らる。

問ニ他ノ語句ヲ隔テ、修飾スルコトアリ。

禁止ノ意ヲナス副詞ニテ動詞ノ下ニ居ルモノアリ。

此れを以て見れば氏の「副ふ」といへるは其の被修飾語の直上にあるを最多き例とし、時として他の語句を隔て、上にある事あり、又動詞の直下(氏は明言せざれど實例一のみにしてしかも其の形はこれなり)に來ることもありうるものなるを示せり。この點は氏は少しも明言せず、又西洋文典との比較も説かれざるなり。

次に修飾すとは如何なる義か。氏は

英語ニ to modify トイフ、更ニ別様ノ意味ヲ附加スル義ナリ。

といへり。この見解を以て、かの副ふる方法を以て論せむか。氏が「且爾乎波のうち

入れたる「や」「か」などは副詞といはるべからざるか。氏が「な」を副詞とするが如く動詞の下に來りて又其上に在りて疑問反語の意味を附加するにあらずや。これらは氏が説によれば、必然副詞といはるべき運命を有せざるか。しかも氏は之を第二類且爾乎波に編入せられたり。なほ一步を進めむに禁止は修飾にして疑問は修飾にあらざるか。氏また之を明言せず。去つて洋文典に求めむに淺劣なる余が所見を以てすれば、英獨文典共に疑問副詞の目を設けたり。然るにこは取るべきか否かをも説かずして關知せざるさまなり。これ頗訝しきことなりといふべし。又禁止の「な」が副詞なる以上は動詞の命令法に副ふ「よ」も副詞ならぬか。

上二段、下二段、上一段、加變佐變等ノ命令法ニ添フ「よ」モ云々尙活用中ノモノト見ルベキナリ。

この「添フ」と「副フ」と意義に何程の差あるか。氏は「よ」を「活用中」のものとするべきなりといへり。然りしか、暫見るべきものにして本性は尙一の單語なること氏が最初の立脚地にても承認せざるべからざる義務あるなり。何が故に氏は之を副詞とせずや。西洋文典には動詞に命令法あるが故か。然らば西洋文典には禁止の副詞あるか。余は淺學にして知らざるなり。又思ひ見よ。命令と禁止とは其の根底一なり。積極的の者之を命令といひ、消極的のもの之を禁止といふ。禁止を修飾なりといはゞ命令も亦勿論なり。且又動詞に命令法を附説するものならば、禁止も亦打消の命令法と

して命令法の中に攝せしめざるべからず。然らずは氏の單語類別も亦矛盾を起すに至るべし。英文典の *not* の用法などに眩惑することなかれ。かれは命令法に添ひては禁止となり、其の他に添ひては打消となる。混同すべきにあらざるべし。この禁止の「な」を副詞とすること鶴峯氏に始まり、爾來翻譯的文典の脱しえざる弊竇なり。若、又この種の論法を以て進まば、助動詞のうちにも且爾乎波のうちにも副詞となるもの頗多かるべきは明なり。何となれば、氏の定義と實例とは之を示して、餘りあるなり。以上は唯副詞につきての氏の説の曖昧にして未賛成すべからぬ點を示せるのみ。

次に接續詞は如何。氏は

接續詞ハ並ビタル同趣ノ文、又ハ句ノ間ニ入リテ、上下ヲ續ギアハスル詞ナリ、といへり。この續ぎ合はすとは如何なる義ぞ。

接續詞ハ唯上下ヲ接續スルノミ、且爾乎波ハ上ヲ承ケ下ニ接シテ、其意義ヲ増減左右ス、サレバ相混シ難シ。

といへるを見ても毫も意を了せず。更に文章篇に至りて、

接續詞ノ全句全文ヲ接續スルモノハ主部客部説明部ノ外ニ立ツ。

とあるを見て、やゝ其の意を解するに似たり。之を以て見れば、氏の接續詞といふものは、全句又は文の成分外に立ちて之を續ぎあはするものなるなり。しかして、其の

續ぎあはするは第三類の且爾乎波の如く緊密に一體となるべくつぎあはすものならずして、その續ぎあはせらるゝ句、文には形體上何等の關係なきことを示せるなり。これ實に重大なる點にしてかの西洋文典の接續詞に似たるものは、所謂接續詞か第三類且爾乎波なるかは深く研究すべき問題なり。而して氏はこの接續詞を以て寧かの文典のに似たることを冥々の裡に説けるものにあらずや。吾人は今これが可否を決せむことを企てず。暫第二章の宿題として残しおかむ。さても氏は自舉げたる次の例の如きは如何に處置せんとするにか。

山また山を越えゆけば、

無文の青色もしは蘇芳など五重にて、

などのまたもしは氏は氏が定義にあはぬにはあらずや。然れども、余はなほ氏の句といふものを確めざるべからず。氏の文章篇を見るに句は決して上の「山」又は「無文の青色」蘇芳などの類にあらざるなり。之を要するに氏の説はなほ不完全なるを免れざるなり。近日氏の教科書として編せられし日本文法教科書といふものを見るに語の間にありて接續することを明言せり。然らば氏の説一進歩を來せるに似たり。思ふになほ他の進境あらむ。きかまほしき事なり。然れども亦翻つて思へばこれ亦活用表の類にて枉げていはれしものか。

感動詞に就ては、氏が洋文典と同一ならずと既に明言せる所なり。既に投問性あ

るを除きて考ふれば敢へて一目を立つるに及ばざるにあらずや。感動詞を唯其の感動をあらはすといふ點より見てのみ彙類せるは、西洋文典にもなく、古來の語學も之を許さず。之を主張するは翻譯流の一派のみ。之に於いて氏が説は前後大矛盾を來せり。何ぞや。名詞に於いて且爾乎波の承接を以て其の資格の最有力なる判定の要素となし、かくて代名詞數詞をも之に攝せしめ、助動詞且爾乎波も亦他の詞を承接するを以ての故に、氏は大言して一門を立つべく主張しながら、感動詞に至りて種々の關係に立てる語を集めて、他の詞に對する關係を問はずして、唯其の觀念如何によりて之を立てたるは抑如何。助動詞且爾乎波が他の詞との承接によりて獨立の品詞となりうべくば、感動詞も亦種々雜駁なる用法のものを含有すべき理なかるべし。これを以て見れば氏はかの *Interjection* の本性を誤認し、唯其の意義上よりのみ考へられたるにはあらざるか。さばかりの學匠にも似もつかぬ事ならずや。且又氏は、始の五品詞には相互間の關係及語形の一致用法の近似に重きを置きながら、後の三品詞に至りて遽に意義を主眼とせるは頗矛盾せるものといはざるを得んや。

吾人がかの三品詞につきて氏に學べる所は到底此のまゝにては圓滿なるものといふべからざるなりとの一事なり。この故に氏の説は從來の語法論を西洋文典に比較して成功し、西洋文典を國語に應用して未十分の成功を有せざるものとい



ふべきなり。

然れども吾人は前の五品詞の氏の研究によりて頗得たる所あるなり。そは廣日本文典別記五七、六六、七一、一八九、二五一節に其の研究の順序を示して氏が苦心の跡を吾人に告げたり。吾人は豈氏が失敗を悲むに止まるべき。直に氏が研究の法を活用して氏が失敗の善後策を講せざるべからず。

要するに氏が所説の大綱は從來の説なりきとはいへ、之を西洋文典に比較して異同を明にし、以てかの洋癖家に吾人の國語にも亦整然たる秩序あるものなることを明示したるを見れば、吾人は實に氏に對して滿腔の感謝を捧げざるを得ざるなり。たとへ、舊來の諸説を如何に精細に知りたりとて西洋文典の知識なくば、いかにこの大功あらむ。又たとへ、洋學に精通したりとて我が諸家の説を探ることの深く、我が國語を愛することの篤きにあらずば、いかにこの大功あらむ。氏の如く東西兼該の博識にあらずば、決してこの成功を見るべきにあらざるなり。

最後に吾人は氏の研究によりて得たる貴重なるものを注意しおかむとす。何ぞ。從來語學者の所説、悉捨つべきにあらず。又誤れるにもあらず。寧足らざるなり。氏はかの舊派の説を殆悉、網羅して、之を組織したるにあらずや。しかして其の結果また從來諸家の説と矛盾する所少きにあらずや。氏の成功せざる點は、副詞接續詞感動詞にあり。而してこれ實に從來諸家の全くいはざりし處。後のこの學に入らむとす。

るもの深く茲に思を凝さざるべからず。

大槻氏の廣日本文典の前後に簇生したる文典頗多し。然れども分類學上見るに足るべきものなし。此の際に當り大體に於いて權田氏の説を奉じ、縦横無盡當るべからざる論鋒を以て現れ來りし學者あり。之を

九 岡澤鉦次郎

氏とす。氏の著未完なりといへども、其の意見は載せて雜誌に散見す。略其の立脚地を窺ひうべし。惟ふに吾人の研究は先氏を以て終らざるべからざるなり。

氏の理想とする所を伺ふに、まさに日本語の本性に適合せる文典を組織せむとするにあるが如し。而して折衷文典の到底不可能なるを觀破して、舊來の説の國語の本性に適合せるものなることを主張せり。これ氏の理想は理想として、一方より見れば、折衷文典に對する一種の反動なりといふことを得べし。吾人は氏に就いて舊來の説の如何に合理的なるものになりたるかを見むことを冀ふなり。

氏の文典に於いては先、第一に詞と語といふ二種の術語を立てたり。其の語とは語性篇に於いて取扱はるべき性質のものにして、詞とは文素篇にて取扱はるべきものなりといへるが如し。而して其の語の意義如何にといふに、

文章ハ人ノ思想ヲ文字ニアラハシタル者ナリ。思想ハ片々ノ考ヘドモヨリ成  
レルモノニシテ其ノ片々ノ考ヘヲアラハシタルモノヲ語トイフ。(初等日本文典)

といへり。さて之を大別してコトとテニヲハとに分てり。この點に至りては、權田氏の説と異ならざるなり。

思想ヲ成ス片々ノ考ヘニハ或ル物、或ル事、或ル舉動、或ル有様等ノ考ヘナルアリカ、ル考ヘヲアラハス語ヲ「コト」又言トイフ。

又コノ片々ノ考ヘノ寄り集リテ一思想ヲ成サントスルニ方リテハ、マツ其ノ考ヘドモヲ寄セ集メ、或ハ其ノ關係ヲ指シ、或ハ其ノ補助ヲナシテ種々ノ意義ヲ附加シ、其等ヲ纏ムル考ヘアリ。カ、ル考ヘヲアラハス語ヲ「テニヲハ」又ハ辭トイフ。助辭トモイフ。

かくて、言をも辭をも其の活用の有無によりて各二種に分てり。こゝに於いて氏の分類は左の如くなれり。



こは余がかねて望みし所の分類なり。さて其の各種の分界は如何。

體言トハ言ニシテ活用ナキモノナリ。コレニハ物ノ名、事ノ名ナルガ多シ。「熊」「虎」「机」「書」「仁」「義」等ノ如シ。

頭注ニ曰ハク所謂人代名詞トイフモノモコノウチニ入ル。

體言ニハ物事ノ名ナラヌガアリ。高塚「廣場」「長靴」「大夫」ノ「たか」「ひろ」「なが」「おほ」ノ如ク、清げに「清らに」「清らかに」「大きに」「きよげ」「きよら」「きよらか」「おほき」ノ如キ或ハ熟語ヲナシ或ハ慣用ノ叢語ヲナス時ナドニ使用セラル、モノコレナリ。コレ等ヲバ物事ノ名ナル體言ニ對シテ準體言ト稱シ、物事ノ名ナルヲ正體言トイフ。上例ノ外「第一」「把」「某殿」ノ「第」「把」「殿」ノ如キ其語固有ノ義ヲバ失ウテ熟語ヲナス時ニノミ用ウル語「且」「又」「稍」「最」「彌々」「益々」「必」「抑」「皆」「各」ノ如キ語、嗚呼「あはれ」「あな」「すは」ノ如キ語ハ皆準體言ニ屬ス。

頭注ニ曰ハク俗ニ所謂副詞接續詞間投詞ハ大概此ニ入ル。サレド詞トシテハ文素篇ニ至リテ學ブベクシテ、コ、ニ其ノ稱ヘヲ用ウベカラズ。

用言ハ言ニシテ活用アルモノコレナリ。コレハスベテ物ノ運動スルコト及ビ種々ノ有様ニテアルコトヲアラハス。

靜辭ハ辭ニシテ活用ナキモノナリ。動辭ハ辭ニシテ活用アルモノナリ。

これを以て見れば、この四類は一絲亂れず、權田氏が一のものを言と辭とに兩屬せしめし弊もなし。古來かつてかゝる整然たる秩序を立て、説を述べしものを見ず。若この説にして國語に該當せば、實にうれしき事の限りなりといふべし。

然れども氏が體言を正準の二つに別ちしは如何なる意ぞ。一絲亂れず、一點紛糾の迹なからしめむには、この區別、頗首を傾けしむるものあらざるか。今其の理を述べむ。

先氏は言を如何に説けるか、或る事、或る舉動、或る有様等の考へをあらはすといへるにあらずや。然らば、其の言といふものは等しく同じき資格を有するものならずや。この故に活用の有無によりて體用二言の區別生じ、更に區別すべくば、用言の形狀作用の別の如く、體言其の者のうちにても亦互に同等の價値を有し、其の間に一を正とし、一を準とするが如き區別を施すべき理あらむや。萬一正準の區別を示すべき理あらば、其の理由を明示せざるべからず。吾人の不敏なる、其の何が故に正準を區別せざるべからざるを知るに苦む。この點は氏が一毫をも苟且にせざる學風に於ける一の瑕瑾にはあらずか。しかして是が判定の標準かと思はしむるものあり。何ぞや。細注及頭注に曰はく、

コ、ニ一ノ試験法アリ。正體言準體言ヲ判定スベシ。マヅ或ル語ヲ取り、其ノ使用セラレタル義ヲ失ハシメズシテ之ニ辭「は并ニ」を「ヲ」加ヘテ言ヒ試ムベシ「は并ニ」を「ヲ」加ヘテ使用スベキモノハ正體言ナリ。然ラザルモノハ準體言ナリ。  
 コノ試験法ハ必竟其ノ體言ノ文ノ主素トナリ得ベシヤ否ヤヲ試験スルモノナリ。文素篇ノ智識ヲ以テイヘバ正體言ハ思想ノ主素タリ得ベキ言ニシテ準體

言ハ然ルコトヲ得ザルモノナリ。

これを以て推考すれば、正體言とは思想の主素たりうべきもの、準體言とは思想の主素たりうべからぬものなることを知りえたり。之を以て其の標準は思想の主素たるか否かを以てするものと斷定するをうるなり。

かく斷定し置きて更に考ふるには、かの準體言の本體は何かといふ問題あり。凡一切萬物こゝには贅物の如く見ゆるものも、必其の本據とする所なきはあらず。こゝに準體言といふ以上は到底正體言たらざるものにして體言に準せられたるものなるは命名の方法之を證明す。然らば體言に準せられざる以前の本體は如何凡事物の假といふに二種あり。一は其の本性を有するものが、一時の必要に應じて他に準用せらるゝなり。この意にての假に準せられたる體言は「たか」「ひろ」「なが」「おほ」「きよげ」「きよらか」「おほき」「第」「把」「殿」などこれなり。これらは皆其の本據を有し、若し體言に準することを拒絶せられなば、各分散してかへる所を有するなり。且「又」「稍」「最」「抑」「各」「皆」「あはれ」「あな」「すは」の如きはまさにいづこに歸せむとするか。氏が嚴密なる分類はこれらをして浮浪の徒たらしめむとするか。又他の意義よりいへば或物の缺乏よりして假に物を充用するが而も其の物は其の代用せらるゝ元來の物とは同様の資格を假に與へらるべきなり。かゝる場合にありては其の用するたるのちには歸する處なく廢棄せられても敢へて怪むべからざるなり。この意味

に於けるものは氏が所謂假體言なり。しかもこれらも歸する所はあるなり。而してかの前に浮浪の徒となりかゝりたる準體言は或はこの類かと思はるに氏が試験法は之を否定してあまりあり。然らばかの「且」又以下の準體言は其の本性如何なるものか。吾人は遂に五里霧中に彷徨せざるを得ず。

然れども、こはなほ輕き問題なり。氏の持論は詞と語とを區別し、語性篇の智識と文素篇の智識とを峻別し決して之を混淆すべからず、これを混淆するが故に國語の本性埋没して明ならずと主張せられたり。然るに體言のうちにおいて正體言と準體言との區別は全く文の主素となりうるか否かを以て試験して定むといへり。かくては氏は自己の佩刀にて自殺するにあらざるか。この時に際して氏の所き方途は三あるのみ。準體言の名を除き去りて他の名に更ふるか、しかして氏の所謂試験法は試みらるべきものにあらず。或は準體言の「且」又以下を除き去るか、されど氏が分類より除き去りたりとて國語の本性を曲説すること叶ふべからず。文素篇と語性篇との智識を峻別するを撤回するか。とにかくに吾人はなほ氏の説に謳歌すること能はざるなり。

十 歴史的研究の概見

以上、余は多少、單語分類學上の時期を代表せりと見ゆる諸家の説を批評したり。而して余は決して自家の好惡を之に加へざりき。批評の方法は其人自身の説の矛盾

盾せるを示すを以て主眼となせり。其の田中、中根二氏の説を比較的に詳にあげたるは大槻氏のに對照せしめむと思ひてなり。余がこの研究を見たる人は古來學説が如何に變遷せしか、又如何なる學説には如何なる長短存するか、又いかなる點に於いて最困難を感ずるかを見たるなるべし。之を學ぶものは前轍を再、ふまざらむことに注意せざるべからず。

さて余は自家の研究に移るに先ち、これら諸家の共に苦みし點は如何なるものなりしかを概括して示さむ。所謂體言、用言は諸家の研究によりて殆秘奥をあばかれたり。唯其の迷宮たるものは、大槻氏の所謂副詞、接續詞、感動詞なりとす。上にし

ては富士谷氏の挿頭、鈴木氏のテニヲハ、權田氏の上辭、助體辭、終にしては岡澤氏の準體言、嗚呼、これ實に古來幾多の學者をして頭腦をいたためしめし者なり。今の國語の學に志すもの豈この點に注目せざるべけむや。

## 第二章 國語の單語分類の方法

前章に論じたりし所を見たる人は誰も古今の單語分類法のいづれも未満足すべきものにはあらざるを知りしならむ。又かの論を見し人は如何なる點に於いて最困難を感じるかをも認めしならむ。既に其の分類の幾多の眞理を有しながらもなほ後人に待つある所以を知らば、吾人この學を以て一生の事業とするもの豈これが提案を試みる義務なからむや。吾人は敢へて魄を以て任ずるものならずといへども、わが愛すべき國語の前途につきて頗る苦慮する所あるもの。聊これが解決に従事せむと欲するなり。

さて吾人が最初の大問題たる單語の分類法につきて、予はさきに歴史的に之を叙論せり。今進みてこれが批評的討究にうつらむとするに先ち、第一に單語其の者の概念を確定せざるべからず。これ研究の第一歩なり。

### (一) 單語とは何ぞ

抑言語とは如何なるものぞ。吾人が精神内容を聲音の方便によりて秩序的に發表したるものならざるべからず。吾人の言語は千差萬別なり。世界の國語は其數限りなし。しかれども人間の思想が略一致する以上は、其が思想の發表たる言語も亦

根柢に於いて一致すべき點あるを信せざるべからず。こゝに於いて吾人は單語といふ觀念につきては東西一致すべきを信せり。吾が古にありては嚴密なる意義にての單語の分析的研究あるべくもあらず。近世西洋文化の刺戟によりて始めて緻密なる研究の生じたるなり。之れを最近の學者に徴するに大槻氏は單語を英語の Word に當るといはれ、岡澤氏は、

思想ハ片々ノ考ヘドモヨリ成レルモノニシテ、其ノ片々ノ考ヘヲアラハシタルモノヲ語トイフ。

といへり。吾人の見たる一切の國文法家の單語の説明にしてこれより以上委しく説明したるもの、吾人の見たる所にては存在せざるなり。吾人は到底かゝる簡單なる説明にては満足すること能はず。今 Word の縁によりて英文典の所説に徴せむ。

A word may be defined as an ultimate independent sense-unit. A sentence such as *cats catch mice* is an independent sense-unit, but it is not an ultimate one, for it can be subdivided into the smaller independent sense-unit *cats* (or *cut*), *catch*, *nice*. We call such a sound-group as *cat* an ultimate sense-unit because it cannot be devided into lesser sense-units. We call *arbitrary* an ultimate sense-unit for the same reason ; for *arbi* and *trary* by themselves make nonsense. Such a sound-group as *tripod* is also an ultimate sense-unit, because, although its two syllables *tri* (*tri*) and *pod* are by themselves real sense-units, yet their meaning has no connection with that

of tripod itself. Cat, arbitrary, tripod are further independent sense-units: they can stand anywhere in a sentence, and enter into any combinations with others that are not contrary to their meaning and the principles of English grammar.

スキート氏のこの解説頗傾聴すべき價あらざるか。吾人も亦スキート氏の説に學びて左の定義を下さむと欲す。

單語とは言語に於ける最早分つべからざるに至れる究竟的の思想の單位にして、獨立して何等かの思想を代表するものなり。

この定義に對しては恐らくは誰も不同意を表するものなかるべし。ともかくにも吾人の單語の定義右の如し。これにつきては分解説明せざるべからず。

第一、單位とは最早分解せられざる極限を示す。即ち其の上に分解せらるゝ時は、其の物の本性作用を滅却すべき點に至れる終極のものをさせり。

第二、單語は思想の單位をあらはす。しかも、それは、必言語といふ一の形に制せられたるものなるべし。白しといふ語は單語なり。しかも、こは、物體の光學的屬性觀念と人間精神の統覺作用とをあらはせり。その觀念と統覺作用とは心理的論理的にいはゞ二の單位なり。然れども、それは言語としては一なり。この故に二者は思想上の單位なることを得としても言語上單位なることを得ざるなり。

第三、思想にては一單位なりとも、そがなほ語としては叢りたるものなるときは

單語と稱すべからず。例へば「梅の花」といへば思想上唯一の觀念なり。されど語としては「梅」といふ單語と「の」といふ單語と「花」といふ單語とに分解せらるべきものなれば「梅の花」は單一思想なれども單語にあらず。

この故に單語といふには思想上の單位と言語上の單位とが一致せる場合、若くは思想が語の單位に制限せられたる場合に限るべきものなり。以上は單語の分解的説明なり。吾人はなほ總合的に單語の意義をたづねざるべからず。

抑言語の目的は説話文章を組織するにあるものなれば、吾人が單語と稱するものも亦直にこの文の成分ならざるべからず。直接に文の組織に影響を與ふるものならざるべからず。かく單語は文を組立つる直接の材料として相互の間に相依り相保つ關係を有したとへ觀念用法上の差はありとも、文の構造材料として一箇體をなせるものならざるべからず。

吾人は單語につきては以上の如き解釋を下すなり。こゝに於いて單語と語根と接辭との區別を立てざるべからず。

單語を更になほ少き部分に分ちて考ふることあり。しかるときはこれを語根といふ。語根は何らかの思想をあらはすには相違なけれども文に對しては直接に其の要素となるにあらずして、一旦單語を組立て、其の一部分をなし、さて間接に文の

要素とはなるなり。かく語根は單語内の一成分にして、單語を理論上より分析したるものにして、實地の運用上更に其れ等の存在を認めうべからざるものなり。單語といふ以上は、我等の談話文章に於いて、思想の單位の一箇體として認めうべく、從つて實際上それらが一箇體として取扱はるゝものならざるべからず。語根に至りては、實際一の語としての資格なく、唯理論上抽象の結果その存在を認むるにすぎざるものなり。

接辭は單語にあらず。しかも單語の附屬物なり。夫自身はいはゞ一種の語根に似て、しかも一旦成形せる單語に附屬して、それに何らかの意義を添へつゝ、なほ一の單語を構造す。この接辭の接せる場合には接せられたる單語の意義資格に些少の變動を呈することありといへども、其は唯その觀念上の小變動にして、それが單語たることに於いては更に變することなし。これが單語と異なる處は、單語は單語を助くることありとも、そは直に文の組織に關すべく助くるに、接辭は語根の如く文の構造に直接の影響をなすことなし。接辭と語根との異同は語根は單語の抽象的分析の結果あらはるゝものなれど、接辭は別に存在して、決して單語の分析の結果あらはれしものにあらずして、單語の副成分として單語分解の際同時に成立せるものなり。接辭は又單語のみならず、語根に附屬して一の單語をなすことあり。しかれども語根は一旦成形せる單語に附屬すること決してなし。

單語の意義は上の如し。吾人はいよく進んで批評的討究に著手せむとす。

(二) 西洋文典流の分類は我が國語に適するか

この疑問に對しての答案はかの鶴峯、田中、中根、大槻諸氏の研究に鑑みば、蓋思半にすぎむ。然りとはいへども、彼れは唯諸氏の研究に見たるのみ。余は今その適否の點についてなほ仔細に研究すべき必要あるなり。

先英文典にていふ品詞につきても人によりて説を異にするものなれど、吾人はキーント氏の分類を數へむ。

- Noun 名詞      Adjective 形容詞      Pronoun 代名詞      Numeral 數詞
- Verb 動詞      Verbal 動名詞      Adverb 副詞      Preposition 前置詞
- Conjunction 接續詞      Interjection 間投詞

右のうち Verbal は普通に動詞中にて説くものなれば、今九種類として説を述べむ。

英獨語の名詞は事物の觀念をあらはすものとして、はなほわが所謂名詞の如くなれども、それらは同時に他の語に對しての位格 Case をあらはし、數及性の區別を指示す。國語にては、かゝることなし。位格をあらはさむには所謂且爾乎波を用ゐざるべからず。

こゝに於いて且爾乎波の一部を名詞の格なりとする説出で來れり。然れども其の説の非なることは廣日本文典別記の説を見て知るべし。

我が且爾乎波ニハ特ニ一定ノ成形アリテ、且何レノ名詞ニモ一様ニ接スベク、コレヲ名詞ノ語尾變化ト見テモ、其ノ變化ハ「が」「の」「に」「を」「と」「へ」「より」「まで」等ニテ千篇一律サラニ異狀アルコトナシ。サレバ羅甸ノ格バ足ノ如ク、其名詞ニ生ジテ離ルベカラズ、我且爾乎波ハ履ノ如ク、脱シテ衆ニ通用スルコトヲ得ベシ。且、コレヲ別語トスル方、其意義ヲ説クニ錯雜ヲ避クルコトヲ得テ、教フルニモ學ブニモ共ニ簡便ナルガ如ク思ハル。因テ今ハ本文ノ如シ。

然れどもこの論は盡さざるものあり。氏の論は根本的の議論にあらずして、便宜的の處置にすぎざるなり。抑西洋諸國語の格といふものが、名詞附屬の者の如くに説かるゝは彼の語性によりてなり。彼れは人も知る如く所謂屈曲を有する語なり。屈曲とは一觀念詞の詞形の一部を、其の觀念の小變化をあらはす爲に變化せしむるものをいふなり。これあるが故にかれらは活動語 Inflectional language と稱せらるゝなり。

*By inflection we understand an addition to a whole class of words expressing some grammatical function, or a meaning so general as not to constitute a new word.*

さて英語にては名詞の屈曲と稱せらるゝものは複數を示すものと持格を示す

ものが形にあらはるゝのみ。其の他の格は皆唯名詞の文章中の所在位地によりて示さるゝのみ。かくの如くにして英語は支那語に近づき來りたるが故に未活動語の標本といふべからず。スキート氏も

*English is mainly an isolating language which has preserved a few inflections.*

とまでいへるにあらずや。獨逸語に至りては屈曲頗多く、格をあらはすもの、數をあらはすもの、性をあらはすもの、悉みな屈曲を以てあらはす語なり。この故にその語の特別な性質によりて活動語の稱の生せしなり。今この獨逸語の屈曲の如何なるものなるかを少しく説かむ。

Diese Beziehungsformen werden teils 1) ausserhalb des bezogenen Wortes durch selbständige Formwörter (z. B. Präpositionen), teils 2) innerhalb desselben durch eine Abänderung des Wortes selbst ausgedrückt, die entweder in einer Veränderung seines eigenen Vokallantes (Ab- und Umlautung) besteht, oder durch Lautausätze oder Endungen bewirkt wird.

Einen solchen Ausdruck für eine Beziehungsform eines Wortes nennt man eine grammatische Form oder Wortform und den ganzen Vorgang, vermöge dessen ein Wort seinen verschiedenen Beziehungsformen entsprechende Wortformen annimmt: Flexion oder Wortbiegung. Ein Wort durch alle seine grammatischen Formen hindurchführen heisst: es flektieren, biegen oder beugen, auch abwandeln.



此説の如く語形の一部を變化せしめて種々なる關係を表示する性質を有するなり。吾人の且爾乎波はかの *vorhiegung* の如く語形の一部にあらずして一の單語たるなり。一の *Formwort* なり。且爾乎波に類似するかれらの品詞を求めば、まさに前置詞なるべし。かれ既に前置詞を以て一の單語と認めたる以上は、かれの見地と同じ位地に立てるものは、必且爾乎波をも一品詞と見るべし。されば、且爾乎波を名詞に區別して異種の品詞とするは、彼の見地よりしての正當なる意見にして更に便宜的のものならざるなり。數性については、今いふを止めむ。唯この場合にありては、とにかくに英獨語の名詞と國語の名詞との間に重要な差別あるを發見すべきなり。何ぞや。彼れは所謂事物の觀念をあらはすと同時に其の事物觀念が他の語に對する關係をもあらはすものなるに、吾人の國語にては名詞は單に事物の觀念を裸體的にあらはすのみに止まれることこれなり。こゝに於いて直に發すべき疑問は我が名詞が他に對する關係をば如何にしてあらはすべきかといふことこれなり。

二 前置詞と且爾乎波との比較

こゝに吾人は且爾乎波の研究にうつるべし。既に述べし如く、且爾乎波に似たる彼れの品詞は前置詞なり。

つらく前置詞の職能をかへりみるにスキート曰はく、

*Prepositions, such as of, are joined to nouns to make them into adjunct-words, as in man of*

*honour, where of honour is equivalent to the adjective honourable.*

The grammatical function of a preposition is to make the noun-word it governs into an adjunct-word. A preposition——

- (a) A noun-word, as in *a man of honour, a widow with three children, freedom from care.*
  - (b) An adjective, as in *black in the face, free from care, good for nothing.*
  - (c) A verb, as in *climb up a tree, I thought of it, he did it with the greatest ease.*
  - (d) A sentence, as in *I stopped at home because of the rain, he caught cold through getting wet.*
- さてその位置を顧みれば、

*Preposition are put before noun-words.*

これ前置詞の名の出で來りし所なり。然れども必しもしかるにあらず。獨逸語などにては、

*Der Name Präposition oder Vorwort deutet darauf, dass diese Wörter im Zusammenhange der Rede ihren Platz in der Regel unmittelbar vor dem Worte erhalten, das sie in ein Beziehungsverhältnis zu einem andern Satztheile setzen. Indessen stehen manche Präpositionen ebensowohl hinter, als vor, einige sogar regelmässig hinter dem von ihnen abhängigen Worte.*

といへるが如く、それが助けて關係を示す詞の次にも來ることあるなり。我が所謂且爾乎波にありては其の助けむとする詞の前にあらずして必後にあ

り。これ其異なる處なり。其の名詞の後に屬して他の語との關係を示すには其の後に來りうべき語は名詞なるあり。形容詞なるあり。動詞なるあり。この點に於いて、かの前置詞に酷似す。又英語は格に於いて印歐語系中尤少きものにして僅に三あるのみ。この英語を以て、他の獨逸語等の格の數多き語を譯するには其の不足の格は皆前置詞を以て示すなり。この點に於いても亦酷似せることを知るべし。然れどもそは唯我且爾乎波の一部、大槻氏の所謂第一類且爾乎波にすぎざるなり。ともかくにも前置詞といふ名目は、到底國語に應用すべからず。これに類似するものは且爾乎波の一部あるのみなり。

三 形容詞について、附分詞并動詞

次に余は形容詞にうつらむ。從來形容詞といふ語を以て英語の Adjective の譯語にあて同時に、又我が國語の古格派の所謂形狀言にあてたるを以て甚しき迷惑を初學者に與へたり。余はこの別を明瞭に區別せむが爲にハイズ氏の獨逸文典の所説を左に引かむ。

Das Prädikat oder das Ausgesagte kann zweifacher Art sein, wonach zweierlei Attributiva zu unterscheiden sind. Es ist nämlich entweder a) ein im zeitlichen Werden begriffener Zustand, eine vorübergehende Thätigkeit (z. B. lieben, grünen, wachen, denken etc.); oder b) eine bleibende, feste Beschaffenheit oder Eigenschaft (z. B. lieb, grün, wach, vernünftig etc.) Das Attributiv

der ersteren Art heisst Verbum oder Zeitwort; das der letzteren Adjektivum oder Beiwort. —

Das Verbum hat zugleich selbst die Thätigkeit, die in ihm enthaltene Vorstellung dem Subjekte beizulegen; es enthält also neben seinem materiellen Inhalte zugleich die formelle Kraft des

Aussagens. — Das Adjektivum hingegen entbehrt diese aussagende Kraft; es benennt bloss die Eigenschaft, wie das Substantiv den Gegenstand, daher man es auch als *nomen adjectivum* (Eigenschaftsnamen) dem *nomen substantivum* (Gegenstandsnamen) nicht mit Unrecht an die Seite stellt.

これを以てみれば西洋語の形容詞も根本は動詞と同じく賓位觀念として使用せらるべき本性ある屬性詞なるなり。動詞は附屬性の觀念をあらはすと同時に陳述に於ける形式的能力をも有するに、其の補缺部分たる形容詞はこの屬性觀念のみにて、更に陳述の形式的能力を有せず。これ、かれにてはかの形容詞と動詞との區別を立つる所の最大要點なりとす。我にありては如何。形容詞と稱せらるゝものにてかの屬性觀念と同時に陳述の能力即統覺作用をも一の語にてあらはす。この故に形容詞のまゝにて、

この花は美し。 *Die Blume ist schön.* かの山は高し。 *Der Berg ist hoch.* などいふことを得るなり。この能力を缺ける彼の形容詞はかゝる場合には如何にするか。ハイズ氏は前の文のつゞきに曰はく、

Um dem Subjekte beigelegt zu werden, bedarf es daher eines besonderen Bindemittels. Dieses kann nur ein Verbum sein, und zwar nur ein solches, das den weitesten, unbestimmtesten Zustand bezeichnet, welcher die notwendige Voraussetzung für jede Beilegung irgend einer Beschaffenheit ist.

かくてこの場合に所謂鎖として使用せらるゝものは英語にては to be 獨逸語にては sein なりとす。かく二語にてにあらざば陳述し能はぬを一語にてあらはしうることを以て見れば、國語の形容詞といはるゝものと西洋の形容詞との間に大なる差あるを見るべし。

其の他彼の形容詞が動詞と異なるは比較なり。かれらの形容詞には、常級、比較級、最上級を詞尾の屈曲にてあらはす。これ、かれの動詞になき處なり。この故に形容詞と動詞と區別する必要あるなり。われにはかゝるものなし。

かれらの形容詞の本性的用法は單に名詞を修飾するのみ。我が形容詞は動詞と形容詞との區別の生ずる觀念的要素なる動作的、時間的の性質上の差を除きて考ふれば、更に動詞と異なる所あるにあらず。故に、動詞に終止形の三類あれば形容詞にもあり、動詞に接續形の三類あれば形容詞にもあり、動詞に連體形あれば形容詞にもあり、動詞に中止形あれば形容詞にもあり。吾人の形容詞は其の觀念の差別を除きては動詞と異なる用法を發見せざるなり。

次にわが所謂形容詞は其の用法に於いてかれの三品詞に該當す。即副詞、形容詞、動詞の三つなり。高く、高し、高きをかれの語に譯し見よ。かゝればかれの形容詞とわれの所謂形容詞とは到底同一のものと見るべからざるなり。

又西洋文典には動詞の一變體として分詞といふ目を設くるによりて我が文法家亦往々之を設くることあり。陋も亦甚し。抑分詞といふ名目はかれの動詞と形容詞との性質上の差より生じたる破綻を彌縫せる窮策なり。かれの屬性觀念をあらはす動詞、形容詞は我が如く一様の發達をなさずして、一方の形容詞に於いて專裝定的の發達をなし、一方の動詞に於いて、專述定的の發達をなしたるより自然に二派に分れたるが、元來屬性觀念といふ以上は裝定をも述定をもなしうるものなるが故に、専ら裝定的の發達をなせる形容詞も動詞の助によりて述定的用法に立つことあり。專述定的發達をなせる動詞も裝定することあるが、之は形容詞の專つかさどる職能なりと見たるが故に、かれらはこれを説明するに苦みて曖昧極まる分詞といふ目を設けたるなり。我にありては形容詞動詞共に述定裝定をなすべく發達をなしたる故に、更に一品類を立つべきにあらざるなり。分詞法などいふ目を設けて得々たるものの如きは其の愚濟度し難きものといふべし。

次は動詞なり。動詞は意義用法東西略一致す。其の語性の相違より生ずる差異は、多々あるは明なる事實なれど大體に於いては用ゐらるべきものなるべし。唯上に

いひし如く我が形容詞と動詞とは大體に於いて一致せるものなることを忘るべからず。

四 代名詞及數詞

代名詞については大槻氏の言、また、きくべきなり。  
西洋ノ代名詞ハ前ニモイヘルガ如ク男女中性、單複數、格等ヲ表ハサムガ爲ニ其ノ語形ヲ變ジ、隨テ之ニ應ズル動詞等モ、共ニ同一ニ變ズルヲモアルガ故ニ獨立ニ説ケドモ、我が代名詞ニハ夫等ノ事絶エテ無ク、且、「の」「に」等を履ム用法モ全ク常ノ名詞ト異ナラズ、サレバ唯名詞中ニテ一種ノ代理トナル語ト見テ可ナリ。

これ誠にいはれたり。彼と我との代名詞の差誠に明なり。  
かれの代名詞はかれらの文法上頗重要なものにして、言語學者の説によれば、彼等の國語の特性たる動詞の詞尾屈曲も元來は語根と代名詞との結合にして自然の結果として詞尾の如くなりしものなりとまでいへり。しかしてかれの代名詞の用法は頗複雑なるものにして、名詞にては殆屈曲なきかの如き英語、孤立語の傾向を生じ來りたりと稱せらるゝ英語にてすらも代名詞の變化頗多きなり。かれには代名詞といふうちにも人代名詞、指示代名詞、關係代名詞、疑問代名詞の目ありて、各特別に複雑なる用法あり。到底名詞と同一列に説き去るべからず。これもかいた

での國語學者唯譯語の面をのみ見て妄りに當つるが故に大なる誤りも出でくるなり。人代名詞は人の代に用ゐたる代名詞にあらず。Personal Pronoun とは、決して人間の代表たる代名詞たる義にあらずして、いはゞ稱格代名詞とも稱すべきものにして説話文章にあらはるゝ事物のうち、自ら説話をなすもの、直接に説話者の對手たるもの、第三者として説話中にあらはれ來るもの、これらをあらはすものなり。かの第二人稱、第三人稱と稱せらるゝものを見よ。何ぞ人に限らむ。國文法家多くはこの意義に注意せずして唯人の代表たるものと思へり。指示代名詞とても我にありていはゞ、たゞ且爾乎波にて示すのみなり。一の代名詞として取り立ていふべきものにあらず。我には關係代名詞にあたるものなく、疑問代名詞とても、我が國の代名詞にて疑問をあらはすものありとすとも、そは唯意義の上のみにして用法上更に特別の制約あるにてもなく、其の他又物主代名詞の目を設くることあれど、そも又我にありては且爾乎波を附して示すのみ。かれらの代名詞は語形、意義、用法等頗名詞と異なり。殊に關係代名詞の如きは到底名詞と混同すべからず。一部門を立つる理由あるなり。我が代名詞は唯意義の上にてかこれに似たるのみ。用法語形等に特別の約束なきなり。大槻氏が名詞中のものとせられたるは一理なきにあらず。

數詞は彼にありては形容詞の一部として説くもの多し。スキート曰はく、

Numerals, another special class of nouns and adjectives: three in three of us is a noun-numeral,

*in three of men an adjective-numeral.*

これを以て見れば、數詞がかれの文典上の考へとして名詞の如く形容詞の如く用ゐらるといふを以て遂に一目とせるものとせば、別に部門を立つべき理あるなり。國語にありて若一目を設くべき必要あらば、西洋文典の數詞と同じ意にてはあるべからず。

五 副詞について

副詞に至りては、かの大槻氏の曖昧なる説明に満足すること能はず。今先かの明快なるハイゼ氏に學ばむかな。

Bestimmungswörter des Prädikats sind a) das Adverbium, Neben-oder Umstandswort, das dem Prädikate sei es Verbum oder Adjektiv, irgend einen näheren Umstand, ein *Wie? Wo? Wann?* etc. hinzufügt. Die Adverbien drücken teils eine dem Prädikate selbst inwohnende (qualitative) Bestimmung aus und gehören dann als Qualitätsadverbien zu den Stoffwörtern; diese sind von den Adjektiven entlehnt. Teils drücken sie eine dem Prädikat äusserliche, bloss formelle Bestimmung aus, als: Ort, Zeit, Zahl u. dgl.; dann gehören sie zu den Formwörtern und sind teils ursprüngliche, teils von andern Wortarten (besonders Substantiven und Pronomen) entlehnte Adverbien, von denen jedoch manche durch eine Formveränderung auch zu Adjektiven umgebildet werden können. Auch zu weiterer Bestimmung der Adverbien selbst können wieder Adverbien gebraucht werden.

かくの如くかれの副詞といふものは、動形容詞に、如何に、何處に、何時といふ如き有様の觀念を添加する所のものにして、所謂形容詞動詞の限定詞たるなり。而してそは一部は性質状態等其の動詞形容詞に自然に依存する限定性を發表し、一部は場所、時、數量の如き外部的の形式限定性を發表す。しかして又他の副詞にも限定詞として附しうるものなり。この副詞の意義用法は英語にても、異なることあらず。さて其の副詞を意趣によりて考ふれば、

- (a) Adverb of Place. } Order.
- (b) Adverb of Time. }
- (c) Adverb of Quantity.
- (d) Adverb of Manner.
- (e) Adverb of Cause.
- (f) Adverb of Assertion.

右は英文典に説けるものなるが、獨逸文典にては、

- (1) Adverbien der Qualität und der Weise.
- (2) Adverbien der Intensität oder des Grades.
- (3) Adv. der Quantität.
- (4) Adv. des Orters.

- (5) Adv. der Zeit.  
 (6) Adv. der Modalität.  
 (7) Adv., welche ein logisches Verhältnis ausdrücken.

今之をわが所謂副詞なりと稱せらるゝ所のものに比するに甚しき相違あるなり。第一彼にありて處の副詞と稱せらるゝものは我にありては副詞といふ一品目を立つるに適せず。これらは皆代名詞に處を示すものある、それに且爾乎波を添へてあらはすなり。かゝる時に其の且爾乎波を其の代名詞に添へたるものを以て一の副詞と見る時は可なりとの論も出づべけれど、それを以て可なりとする人は、自家の主義よりして一切を之にあて、解せざるべからず。一旦且爾乎波といふ一部門を立つる以上は決して之をかの副詞の接辭と同様に見ること能はざるなり。かゝる場合にはかの Word group にて副詞をつくれるものといふをえむ。しかれどもそこまでも叢語にして單語にあらず。單語としてはどこまでも二品詞なり。且や Locative を一の格としたる昔の語に對してそれを名詞と前置詞とにてあらはす場合にても、なほそれを名詞の Locative なりとは、洋癖家の本據とする西洋の語學者もいはざるべし。この論法に同じく日本にてはこの Locative を示す且爾乎波が名詞に屬しては、かれの所謂 Locative の格と同じ様なるものをなし、場所の代名詞に屬しては、彼れの所謂場所の副詞に該當するものをつくるなれば、いかで場所の副詞といふものゝ存在を認むる空隙あらむや。

次には時の副詞なり。これらの意義は種々あり。

Sie bezeichnen 1) einen Zeitpunkt oder Zeitraum auf die Fragen; wann? seit wann? bis wann? ; 2) eine Zeitdauer; 3) eine Wiederholung in der Zeit.

かくの如く時期又は時間をあらはすものと、時の繼續と、時間内の反復とをあらはすものなるが、このうち時間又は時期をあらはすものは國語にては副詞の類にあらで、なほ場所の副詞の類にて、且爾乎波「に」にて「より」「まで」等にて其の時間の如何なる意義をもてるかを示し、其の時間はかの代名詞にてあらはすなり。「今」「昔」「いつ」などは副詞にあらで名詞的に用ゐらるゝなり。この故に主語となりうるなり。

今は五時なり。昨日は日曜日なりき。散歩にはいつがよきか。などこれなり。これにかの且爾乎波そはりて始めて副詞の用をなすなり。この故に亦上にいひし場所の副詞の如し。元來時及場所は屬性觀念の附屬物たるよりは事物存在の普遍的形式なれば、この點に於いては西洋語よりは國語の方正しきならずや。たゞ時の繼續と反復とは附屬性觀念の依存するものなれば時の副詞といふものは本來この二つに存在すべきなり。時の繼續とはいへどそれは客觀的に時の繼續することをいふにはあらで、其の屬性觀念が時間的に繼續することを示すなり。松はとこしなへに綠なり。淺間山は常に煙を吐く。

の如きもの。これらみな「縁なること」「煙を吐くこと」の繼續せるを示すものなり。時間内の反復に至りても亦屬性觀念の反復にあれば、我れにても所謂副詞として存在するなり。

我庭に鶯しばく來鳴く。

のしばくの如きこれなり。このとこしなへに、常にしばく等は到底名詞として取扱はるべきものならず、必副詞の類とせずばあるべからざる性質のものなり。次には數量に關するものなり。

insbesondere 1) Adv. des Masses oder Umfanges auf die Fragen; wie viel? wie stark? ; 2) der Zahl, welche teils bestimmt, teils unbestimmt oder allgemein entweder Teilung ausdrücken, oder Ordnung, oder Wiederholung, oder endlich Vielfältigung.

かく、如何に多きか、如何に強きかの量又は範圍を示すもの、確定したるもしくは不定なる、普通の數、又は部分の數をあらはし、順序、反復、又は倍増等の數をあらはすものなるが、國語にても多少この類にて副詞と稱せらるべき性質のものあり。十分「稍」頗「悉」殆「なほ」等はこゝの副詞といはゞいはるべし。然れども「順序」に至りては數を示す詞に或は且爾乎波を添へてあらはす。なほこれらは別に論定すべきなり。今は似たるものあるをいひてやまむ。

内部的強度即程度の副詞といはるゝものは余が先にいひし「稍」「十分」「なほ」「殆」

等なり。これらは數量の副詞といふよりも寧程度の副詞といふ方まされりとす。性質と方法との副詞は二種あり。實質的と形式的となり。實質的のは吾に在りては主として所謂形容詞の副詞法を以てあらはし、又形容詞より轉成したるものにてあらはす。形式的のものには「かく」と「まか」「さ」あり。これらは純粹に副詞と稱せらるべき性質のものなり。

陳述の方法に關する副詞も我にはあり。もし「けだし」等は上の「まか」「かく」の類にて到底名詞と同一に見らるゝこと難し。

原因理由の副詞といふものは彼の

daher, demnach, deshalb, deswegen.

therefore, wherefore, why, because.

獨逸語  
英語

等なるが、吾には多く叢語にてあらはされたり。

以上大略ながらも彼我の比較について大方は察し得らるべきなり。かゝれば我が國語にありても副詞と稱すべきものゝ多少存在すべきは明なりとす。又彼にありては他の方面より副詞を三種に分つことあり。

尋常副詞、疑問副詞、關係副詞。

これらは皆用法上より來れる區別なり。關係副詞は我になし。我が國に限らず、すべてウラルアルタイ語系に屬する國語は一般にこの關係副詞又は關係代名詞をか

けりといへり。これ語性の差より來れるなり。さて疑問副詞と尋常副詞との間にも意義の外に重大なる區別あり。疑問副詞はいかなる場合にありても必文の先頭にあることこれなり。尋常副詞にはかゝる拘束なし。かゝる區別は吾人の文法にありやなしや。

又西洋語の副詞には形容詞の如く比較の詞尾屈曲あり。吾にありては且爾乎波等を用ゐて比較をなすことあり。しかもそれは副詞に依存するものにあらすして、獨立したる單語なり。これを以てもかれの副詞と我のとの大差をさとするべし。

次に形容詞の副詞法と稱せらるゝものを以て直ちに副詞なりとすることの非なるをいふべし。西洋語にても性質をいふ副詞の多數は形容詞より轉化せり。然れども、かれは接辭の附屬によりて化成せり。即接辭を履みて始めて副詞たるなり。形容詞其の者が直になりたるにあらす。我にていはば「しづけし」といふ形容詞が語根に於いて「しづか」となり、所謂接辭「に」によりてはじめて副詞となりたるなり。英語の *General* より *generally* となり *bright* が *brightly* となりたる類これなり。わが形容詞は詞形の一變化として「く」といふ語尾を有す。こは中止形ともなるべく、又同時に副詞形となるなり。若くは中止的語法のなきならば、或は副詞なりといふべけれど、中止形と連用形とは動詞形容詞に通じて一つにて兩方に用ゐらるゝ形なり。されば決して之を獨立なる一品詞と見るべからざるなり。

次にかれの副詞の用法を見れば、又わが副詞と稱せらるゝものと大差あるを見る。關係副詞は我になし。疑問副詞は既に述べつ。其の他の副詞にありても種々の用法あり。

通常の用法に於いては、其の修飾せらるべき語の直前にあり。そは形容詞、副詞、前置詞、接續詞に對しての場合なり。動詞に對しては、自動詞には、其の直後に、他動詞にては、其の前若くは賓語 *Object* の後に來る。又通常は動詞の前に來る副詞も特別の意義に用ゐらるゝ時は動詞の後に來る。其の他意味に従つて其の修飾すべき語の前にも後にも來るべく、又文の劈頭第一にもありうべく、動詞と助動詞とある時は、其の中間に入るなり。其の他、英語の *Not* 獨逸語の *Nicht* の用法の如きは、其の意に應じて頗錯雜せるなり。すべて西洋語の副詞は頗複雑なるものなり。吾人の副詞の用法は、かの大槻氏の「な」を除きていふ第一に副詞は必動詞、形容詞等すべてを修飾せむとする語の上にあらざるべからず、決して其の下に來ることなきなり。萬一下にあることありとすとも、そは本來の用法にあらずして、一時の轉置法を施せるのみ。さる場合には其の眞意を解せむには、先副詞を唱へてさて、其の被修飾語にうつらざるべからず。こは誰にも自顧みて知らるべき事實なり。頃者山田美妙といふ人ありて言文一致の文例といふものを出版したり。其の書中に「句を交へる法」と題して曰く、



漢語で命名すれば、交錯句法とでも言はうか。

例すれば斯う

(一)「恐ろ……實に……しかつた。」

右を通常にいへば――

(一)「實に恐ろしかつた」

杯である。

といひて、かくて感動を深からしむる語法なりとて頗得々たるさまなり。「恐ろしかつた」は數多の單語の合成なり。之を還元すれば、「恐ろしく」と「あつた」となり。今、若「恐ろしく」といふ單語を中間にて切斷して、「おそろ」と「しく」と分離せば、互に意をなすか。然るにこれは、之を中斷して中間に副詞を嵌入したり。かくては既に何の意をもなさぬ嘆語にあらずや。かれが如きは實に言語殊に國語に對する智識の皆無なることを證するものなり。かれが頭腦には如何はしき西洋の副詞の觀念のみありて、更に國語の觀念なきなり。一の動詞又は形容詞を中間より隨意に切斷して其の間に副詞を入れ、かくて感動をつよむる方法は天下にありや。西洋語の動詞と助動詞との中間に副詞を入れることあるに思ひつきたるか。かれは獨立の二語なり。かれは一定の法格存してなり。たとへば、

*We have not seen him since Monday last.*

*The winds has suddenly risen.*

などの場合にはみな助動詞と動詞との中間に副詞のある場合なり。今之を次の如く、

*The winds has ri suddenly sen.*

としたらば、誰かあつばれの妙手とほむるものあるか。思ふにかゝる語法は美妙氏一人の語ならむ。斷じて日本國語にあらざるなり。余はかの小冊子を繕き、この條に至り、一度は驚き、二度は涙潜然たり。余は實にかゝる事をまで、わが論文に記載せばならぬかと願ひ、我が敬愛すべき國語の運命につきて悲憤の涙にたへず。日本國語を用ゐる法をも知らず、堂々旗幟を張りて言文一致を呼號す。何の爲の呼號ぞ。余は往年の日本大辭書の編者なる氏が、かゝる狂人的語法を公々然天下に刊行して得々たるまで語學の智識の麻痺せるに驚く。かゝる事は取り立て議すべきほどのことならねど、苟も文例と名のり、日本辭書の編者たる人の言論なれば、更に國語を知らぬ外國人、さては輕薄なる雷同者流が、かゝる噴飯すべき語を妄信するものあらむことを恐れてこゝに一言したるなり。

さても國語の副詞は動詞形容詞の下には決して用ゐざるものなるに、大槻氏の日本文典には禁止をあらはす「な」を以て副詞として動詞の下に用ゐらるゝことありとなす。若「な」を以て副詞とせば動詞の下に用ゐらるゝ副詞は余が知る所にては

一あるのみ。第一章に於いて既に述べし如く、之を副詞とする以上は、疑問の「か」や「は」必副詞ならざるべからず。其の他の第二類且爾乎波も亦副詞ならざるべからず。動詞形容詞に係りて其の意義を化裁すること、頗深し。特にかの「ぞ」「こそ」「なむ」の類に至りては、動詞の語法に曲調を生せしむるまでの勢力あり。これを副詞とせずして、たゞ一の「な」のみを副詞とせるは何の理あるか。且又かの「な」は古來且爾乎波と稱せざるもの稀なり。之を副詞とするは鶴峯氏に始まりぬ。爾來翻譯文典は、みな、そのまゝに襲用せり。慧眼なる大槻氏も亦舊套を脱せず。舊習の脱し難く、新智の明にし難き、かくの如く甚しきか。嗚呼歎はしきかな。

要するに副詞は頗研究すべきもの。吾人は今之を詳論する機に接せず。唯我にはかれの副詞に似たるもの、存在すといふに止むべし。

#### 六 接續詞について

接續詞についての余が研究は不幸にして従來の學者の殆全體と意見の衝突すべき結果を來せり。今次に、之を開陳せむ。

今余が論に入らむ前に西洋文典にいはるゝ接續詞とは如何なるものなるかを確めおかすべからず。スキート曰はく、

Conjunctions, such as *if*, are used mainly to show the connection between sentences, as in *if you do so, you will repent it*.

The grammatical function of conjunctions is to connect words with words and sentences with sentences. Conjunctions are therefore of two kinds, word-connecting and sentence-connecting.

之をハイゼの説明に見む。

Konjunktionen oder Bindewörter sind diejenigen Formwörter oder Partikeln, die ganze Sätze, zuweilen auch einzelne Satzteile, mit Bezeichnung ihres Gedankenverhältnisses aneinanderknüpfen oder ineinander fügen. Man kann sie daher Verhältniswörter der Sätze nennen. Ohne sie würde der Zusammenhang und die feinere Beziehung der Gedanken aufeinander unbestimmt und oft undeutlich bleiben.

Reichtum an Konjunktionen ist Beweis für die hohe Ausbildung einer Sprache. Die deutsche Sprache hat deren eine grosse Menge und wird dadurch in den Stand gesetzt, die feinsten Beziehungen der Sätze aufeinander ausdrücken.

之を以て見れば、かれらの接續詞は文と文との結合をなすものと、語と語との結合をなすものとの二種あるなり。

かれらの接續詞といふものは、唯、思想の連絡を助くるのみならず、其の間の微妙なる意義上の関係をも同時にあらはすものなることに注意せざるべからず。

我が國語學者の接續詞といふ事いひ出でたるも、全く西洋文典のをうつしたるものなれば、吾人はかれらの意義にていふ接續詞が果して國語に存在するか否を精査せざるべからず。

吾人はこの接續詞の存在を説くうち、最近の著書につきて現時の潮流をトせむ。岡田氏の日本文典にいはいはく、

接續詞とは二個以上の思想又は觀念を結ぶ爲めに用ゐる語の總稱なり。例へば、

鳥鳴き且つ飛ぶ。

風吹き又雨降る。

甲及び乙來る。而して丙は來らず。

の且つ、又及び、而して等は皆接續詞なり。

と、かくて今もなほ多くの人に接續詞といふもの認めらるゝなり。今かゝる接續詞と稱せられたる詞どもを次に採録して示さむ。

又、且、そもそも、將、もつとも、かたぐ、たゞし、將又、すなはち、

及び、并に、尋で、就て、隨て、依て、或は、斯くて、あかして、もしくは、

もしは、さて、さては、されば、然れども、又は、そも、されど、さらば、

かゝれど、かゝれば、かゝらば、さりながら、あかし、あかしながら、それ

さるは、さりとして、さはいへど、こゝに於いて、ゆゑ、ため、あひだ、條

まゝ、前、後、中、

以上は大方なれど現今知名の國語學者たる大槻氏、岡倉氏、和田氏、落合氏、岡田氏の

文典中に見えたるものをそこらゝに集めしものなり。

かくてこれらが果して西洋文典にていふ接續詞と同じ意義に用ゐられたる詞なるかを研究せむ。しかして余は先文を接續するものより説をなさむ。

先にもいさゝか注意せし如く、かれらの接續詞は文を續ぎあはすると同時に其れらの意義上の微妙なる關係をも示すものなることに、再注意せざるべからず。又接續せしむといふは如何なる義かを明にせざるべからず。一旦結合したりと稱せらるゝ以上は單に意義の上のみならず、必形體上一連續體となるべくするものならざるべからず。余はこれだけの注意を以て從來諸家が等しく認めて接續詞と稱するものゝ職能を觀察せむとす。

さて從來の諸家が等しく一致して文を接續すと稱する接續詞の例をあげむ。

山を越え又水を渉る。 書を讀み、且字を記す。

春になりぬ、されど、なほ冬のこゝちす。

諸車通行止。但し、空車は此限にあらず。

この且、又、されど、但しは一見上下二文を連續したる結合要素の如く見ゆれど、よく見ればあらぬなり。先終の二例は上文と下文とは形體上又陳述の上に於いて一の連續をなすか決して然らず。上文は上文にて意義完結し、陳述も亦完結せり。されど但しは二文の意義の關係をば示せど、形體上二文を結合して一體となすべき勢力

を有せざるなり。上の二例にては、上下二文は形體上陳述の方法上共に連続して一體となれるなれば、この又且こそかれの接續詞に該當すべけれど思ふ人もあるべし。あかれども、それは英語獨逸語漢文等の接續詞を直譯したるまゝの語を以て直に國語の接續詞となす、頗不健全なる思想を有せるものの言にして毫末もとるに足らず。見よ。かの接續詞と稱せらるゝものを除きて、

山を越え、水を渉る。書を読み、字を記す。

とすれば、各文は獨立して各特立するか否か、實にこれらの文の連接の能力は

山を越ゆを越えとし、 書を読みを讀みとする

語法に存し、この語法によりて二文は一體となりたるなり。又且の有無は文の結合體たるに干與することなし。かゝる見易き道理なれど、洋癖家はなほ容易に承諾もすまじければ、なほ一步を進めて論せむ。

英獨文典などの接續詞の文を連結するものに二種あり。

同列接續詞 Coordinate Conjunctions.

次屬接續詞 Subordinate Conjunctions.

この二種のうち、次屬接續詞といふものは多くはかの關係代名詞關係副詞より來れるものなれば大體に於いては我になしといふことを斷言しうるなり。唯之に代はる語法は存すれど、それは接續詞として取立ていはるべきものならず。今いさゝか、

之を説かむ。かゝる時には我にありては處間故爲の如き廣汎なる義を有する名詞を媒介として、附屬性の文をこの語の修飾的用法に立たしめて、示すなり。

昨日參上致したる處、御不在にて拜眉を得ず。

今日は雨降りし爲、路惡し。

これらをも接續詞といふ人あれど、それはなほ洋癖に惑溺したるより起れる迷なり。この用法は一般の名詞にも存在するものにして決して一文を一文に附屬せしめしにあらで、一文を一語に對して修飾語の位地に立たしめしは明なり。

同列接續詞は一文を他文に對して相對的關係に立たしむるものなり。其の關係は各文章が文章成分としては、獨立の資格を有すれども文法上相互に結合して思想を表白しうるものなり。之を獨逸文典の説明にかれば、三種の別あり。

一 擴張するもの、これは意義の相近き文と文とを結合する者にして、前文の意をうけて、更に他の事を次の文にてあらはすものなり。

二 對立せしむるもの、これは第二の文の意が第一の文を全く打消し、又は唯制限するもの。

三 原因を擧ぐるもの、これは後文が前文の原因を序述し、又其の結果を含蓄するもの。

今これらの接續詞にて連結せられたる文が國語にていかなるさまに譯せらる

(高橋醫學士「獨逸文典」の摘記)

べきか、或はかの所謂接續詞を要するか否かを例示せむが爲に、かの同列接續詞にて連結せられたる文例の高橋金一郎氏の獨逸文典に譯例を附してあげあるものを取りて吾人が譯例を示さむと欲す、かく高橋氏の文典をとりて云々するは同氏に對して禮を缺くに似たれど、余が初めて接せし獨逸文典は同氏にして同氏は余が未識の恩師なり、且は同氏の文典の頗世に流布するが故に之を以て、新譯例を示すも又世益の一端ともならむと思ひ、且は又一々譯例を附しあるものならでは其の差わかりがたかるべく、吾人の持てる文典にて一々譯例を附しあるもの、外になきが故に止むを得ず、これを知りたり。あかして余がこの研究の淵源は實に間接に同氏の恩恵によれるものなることを明言する機會を得たるを喜ぶものなり。(以下同氏文典文論下半の上四一二頁より四一八頁までの例をとる。片假名交りの譯例はもとの例、平假名交りのは余が譯なり、異なることなきは別に余が譯例をあげず。)

擴張する者

- (1) Der Tag brach an, und der Vater reiste ab.  
 夜ガ明ケテ、父ガ出立シキ。  
 (2) Der Blitz zuckt, und der Donner rollt.  
 電ガ閃キテ、雷ガ鳴ル。

- (3) Die Bäume grünen, die Blumen blühen, und die Vögel singen.  
 樹ハ緑ヲ萌シ、花ハ咲キ、鳥ハ囀ル。  
 (4) Sie säen nicht; auch ernten sie nicht.  
 彼等ハ種ヲ播カズ、又收穫セズ。  
 (5) Erst hat er Schulden gemacht; dann hat er Betrügereien verübt; nachher ist er aus dem Lande geflohen; zuletzt wurde er Landstreicher.  
 先ツ彼ハ借財ヲ作り、次ニ詐偽ヲ行ヒ、然ル後國ヲ出奔シ、終ニ流浪人トナレリ。  
 (6) Der Aufenthalt am Meere befördert nicht nur das Wohl des Körpers, sondern er übt auch auf den Geist einen wohlthätigen Einfluss aus.  
 海濱住居ハ、體ノ健康ヲ催進スルノミナラズ、精神ニモ亦好影響ヲ及ボス。  
 (7) Er schreit nicht nur vorwärts, sondern er scheint immer weiter zurückzukommen.  
 彼ハ、進歩セザルノミナラズ、益甚シク退歩スルガ如シ。

以上の例は國語にて所謂中止法を以て結合したる文にして、稀に「テ」の且爾乎波にて結合したるもあれど、そはなほ中止法附屬の者なり。ともかくにもかゝる連結文を結合するには、決して從來の文典の所説の接續詞を使用するものならず。其

の中止法の所には||の符號を附しおけり。注意を向けられたし。

獨逸語にて, erst, nachher, zuletztなどを接續詞に使用したるは、其の文法上、文の述語の形をかへて、その力によりて、文を接續する作用なければなり。而して上の *erst*, *nachher*, *zuletzt* などは *und*, *auch*, *sondern* などとは少しく意義異にして、元來順序をあらはす副詞なれば、副詞固有の意義にて順序を示しつゝ、同時に接續の用をなせるなり。すべてこれら接續詞なきときは、其連結せらるべき文は既に文法上互に獨立なる文として取扱はるゝものにして、決して、連結文として見らるべきものならず。

國語にありては、かゝる連結は主として中止法とて、前文の終末にある述語なる動詞等の語形を變じて、之をあらはす。この故にこの語形を終止法に改めざる限りは決して獨立の文章となることなし。接續詞の有無によりて獨立と非獨立との差異を生ずるものと、中止法と終止法との差によりて獨立と非獨立とを區別するものとの間に重大なる別あること、實に明白なる事實にあらずや、かゝる場合に接續の用をなすものとしては所謂接續詞の無能力なること、少しく、注意して國語を観察せば、直に曉ることを得む。しかもなほこの種の所謂接續詞が果して存在せば、余が論も事實には抵抗すべからねば、其の有りと見ゆるものにつきて論せむ。

(5)の例の譯文にある口符中の語は時として接續詞と認めらる。これ原文の接續詞の譯に該當するを以てなり。然れども原文にありては、所謂接續の用をなしつゝ、

意義の關係を示したるものにて副詞と接續詞と 中間に跨れるものなり。さて之を我に譯するにあたりては、接續の方法は別に存在するが、これらは專副詞としてあらはれ來るなり。試みに是等を除きて見よ。果して文は各切れくゝになりて、獨立したる文となるべきか。

彼ハ借財ヲ作り、詐僞ヲ行ヒ、國ヲ出奔シ、流浪人トナレリ。

といふに何等の障害もなく、連結文たることをうべし。然れば、かの先次に、然る後、終には、殆、文の構造には何等の影響を生ずることなし。かゝるをいかで接續詞と稱することを得む。これらは順序、次第をあらはす副詞の部類に屬するものにして、唯其の事情の次第を明白にしたるにすぎず。

又の如きも、文の構造上何の影響する處あるか。(4)の文の如きは、

彼等ハ種ヲ播カズ、收穫セズ。

といひて結合文たること明白なるにあらずや。はじめのズはズ、ヌ、ネといへる所謂助動詞の中止法なることは(6)(7)の譯例にあると同様にして、別に之を終止法なりと強言すべき理由あらず。なほかかる語例は

彼は此處に至りて行きもせず、かへりもせずなりぬ。  
照りもせず、曇りもやらず。

など、みな然り、惑ふべからず。

又を或は接續詞なりといふ人あれど、其が文の連結に何等の勢力を有せざることは上の如し。管にが副詞なることは亦明なることにして誰も異論はあるまじきなり。

蟻立やしぬる者

- (1) Die Fische haben keine Stimme, *sondern* sie sind immer stumm.  
魚類ハ聲ナクシテ常ニ無言ナリ。
- (2) Es fehlte ihm nicht an gutem Willen; *aber* die Kraft reichte nicht aus.  
彼ニ善キ心掛ケガ無キニハ非ザリシ。併シカガ足ラザリシ。  
彼には善き心掛け無きにしもあらざりしかど、力足らざりき。
- (3) Die Heuschrecken haben viel Schaden angerichtet; *doch* unsere Gegend ist noch verschont geblieben.  
蝗ガ大害ヲナセリ。然レモ我地方ハ尙ホ害ヲ蒙ラズシテ止メリ。  
蝗は大害をなし、かど、我が地方は未害を蒙らずして止めり。
- (4) Das Eisen ist kein edles Metall; *doch* ist es nützlicher als Gold.  
鐵ハ貴金屬ニ非ズ。然レモ黄金ヨリモ有用ナリ。  
鐵は貴金屬に非ざれど、黄金よりも有用なり。
- (5) All war zur Abreise vorbereitet; *indessen* ein plötzlich eingetretenes Gewitter verzögerte

dieselbe.

出立ノ用意ガ殘ラズ調ヒタリ。然ル所不意ニ起リタル驟雨が出發ヲ遅延セシメタリ。

出立の用意が残らず調ひたるに、不意に起りたる驟雨が、出發を遅延せしめたり。

(6) Wir haben weder Mühe noch Kosten gespart; *gleichwohl* haben wir nur geringe Erfolge gehabt.  
努力モ費用モ惜マナカツタ、併シ矢張少シノ成績ヲ得タバカリダ。

努力をも費用をも惜まざりしかど、矢張少しの成績を得しのみなりき。

(7) Die Fixsterne haben ihr eigenes Licht; die Planeten *dagegen* leuchten in erborgtem Lichte.  
恒星ハ自己ノ光ヲ有ス、遊星ハ之ニ反シテ借リタ光ヲ光ル。

恒星は自己の光を有すれども、遊星は借りたる光にて光る。

(8) Der Mensch muss mit seiner Lage mehr oder weniger unzufrieden sein; *sonst* würde er nicht streben.  
人間ハ多少其境遇ニ不満ナラズンバアラス。然ラズンバ拮据セザルナラン。

人間は多少其の境遇に不満なるにあらずば、努力せざるべし。

(9) Du musst *entweder* deinen Verpflichtungen nachkommen, oder du verlierst deine Ehre.

汝ハ或ハ汝ノ責務ヲ盡スベシ、若クハ汝ノ名譽ヲ失フ。

この文は到底原文の形に似たるものに譯し難し、止むを得ず次の如く譯しつ。

汝は汝の責務を盡すにあらざば、或は汝の名譽を失ふべし。

この類の連結文は、國文にありては、第三類且爾乎波を附屬せしめて示すこと、符のある箇所に注目せば、直に了解せらるべし。これも原文にありては、接續詞の存在によりて、始めて連結文たるを得るものなれば、接續詞を除きては、各獨立の文章となる事實に明なる事實なり。國語の矢張(6)の例之に反して(7)の例などを或は接續詞なりと見る人あらむか。然れどもこの詞の存在は文の意義には多少の關係を見るべし(之に反しての如きは、殆、蛇足なり)といへども、連結文たるには何等の關係なきが故に之を除きたりとて連結文たる資格は更に變せず。これが連結文たることを得るは、テ、ド、ガ、ド、モ、ニ、バ、等の第三類且爾乎波なり。この且爾乎波は、己が附屬する動詞形容詞等の語形に一定の法則あるが故に、各固有の形を以て、それらの詞に一定の變化を起さしむ。この且爾乎波を除き、動詞等の語尾を尋常の終止法に還元せば、直に獨立の文となること、なほ獨逸語の接續詞の場合に同じ。

然るに獨逸語の接續詞の如き形を有する接續詞ありとして(9)の例の或ハの如

きものを之にあつるものは誤解によるなり。その誤解なる證は(9)の例の或はを除きて試みよ。其の意義にこそ些少の不完全なるを覺ゆるのみにして、連結文の資格には、なほ、何の障礙をも生せず。これ其の接續詞ならぬ明確なる證據には、あらすや。なほ獨逸文と國文と、この接續的品詞の用法に一の大なる差異あり。獨逸文にありては多くの場合に於いて始の文章には接續詞を附せずして、次なる文章に附加すること最多し。而して、殊に、殆、一般なるは、次なる文章の初頭に附加す、かくの如くして其の連結文の主體として見るべきは始の文章なり。この故に、其の意義の歸著する所は始の文章にありて、次なる文章は頗る省略せられたる語法をなすこと、(8)(9)の例の如し。其の省かれたる部分は始の文章中にて見出すことを得べし。國文にありては殆之と正反對なり。即、且爾乎波を附するは常に始の文章の終にして、決して次の文章に加ふることなし。而して文の主體として見るべき、意義の歸著すべき處は次なる文章なり。さて又語句の省略に至りても、又獨逸文と趣を異にせり。即ある語を時として始めの文章にて省くことあり。然るときは次の文章にその語あるを要す。名詞等は始めの文章に詳なれば、次の文章に略にし、次の文章に詳なる時は始めの文章に省略する等自由なり。動詞は次の文章にありて省略せらるゝことなし。この故に(9)の場合に於いて、動詞の語法助動詞 *musst* が始めの文章に在りて、次の文章に省かれたるを、國文にては反對にして、始めの文章に省きて次なる文章にべ



シといふ語法助動詞を加へて譯するを適當なりとするなり。  
 この種類の連結文を譯するに從來併然れども然る所然らずば若くはなどを以て、かの接續詞と同じ地位に立たしめ、之にて能事終れりと思へるが如し。然れどもこの諸詞は接續詞ならずして副詞の類なることは、なほ別に論ずるを以て、こゝには述べざれど、これを以て連結せられたりと見ゆる文章は、かの且爾乎波又は中止法によりてなされたるものを除けば、皆上文は終止法をとれるものにて、文法上の連結文と稱せらるべきものならず。形體上更に關係なき各獨立なる文章なり。意義の上にてこそ、これらの副詞的語によりて連絡の保たるゝが故に、一文の如く思惟せらるるといへども、構造上この副詞を除きたりとして、加へたりとして、更に何等の關係を生じも失ひもせざるなり。國語にて之を譯すべき語なき時は、勿論止むを得ず、かかる法にても用ゐざるべからず。立派に之を譯すべき、即之が職務を有する語あるを、之をすてゝあらぬものをあて、しかも世の大家先生と稱せらるゝ人々までも其の非をさとらざるは實に國語の學の爲に大に歎くべきことなり。これ必竟接續詞の意義を能くも詮議せず、又外國語の組織にも注意せず、國語と外國語との組織上の差異にも思ひ至らず、漠然とたゞ皮相上の意義によりて論をなせるによるならむ。しかして外國語の先生は外國語の接續詞の眞意は知るとも、國語の組織に通せず、國語先生は亦唯其の皮相を知りて眞相を知らず、甚しきは譯語の上に空中樓閣

を築きしもありてかゝる誤解は出で來にけむかし。

原因を尋ぐる者

(1) Die Sonne kommt uns sehr klein vor; denn sie ist sehr weit entfernt.

太陽ハ吾人ニ甚小ク見ユ、何トナレバ距離甚遠クレバナリ。

太陽は(距離)甚遠ければ甚小く吾人に見ゆ。

(2) Benutze deine Jugend; denn sie geht schnell vorüber.

汝ノ少壯時ヲ利用セヨ、何トナレバ少壯時ハ速ニ過ぎ去レバナリ。

少壯時は速に過ぎ去れば(過ぎ去るものなれば)汝はそを利用せよ。

(3) Die Sterne sind von uns sehr weit entfernt; deshalb scheinen sie uns so klein.

星ハ吾人ヲ距ルコト甚遠シ、故ニ彼ノ如ク小ク見ユ。

星は吾人を距ること甚遠ければ彼の如く小く見ゆ。

(4) Böse Gesellschaft verdient gute Site; deshalb musst du sie meiden.

惡社會ハ良風ヲ腐敗セシム、故ニ汝ハ之ヲ避ケズンバアラズ。

惡社會は良風を腐敗せしむれば、汝は之れを避けざるべからず。

(5) Das Wetter war zu schlecht; darum blieb ich zu Hause.

天氣ガ餘リ惡シカリシ、ソレ故ニ私ハ家ニ止マリシ。

天氣あまり悪しかりしかば、惡しかりければ、余は家に止まりき。

(6) Aus Hellern werden Groschen; darum spare den Heller!  
 青錢が積リテ一朱ニナル、ソレ故ニ青錢ヲ儉約セヨ。  
 青錢も積りて一朱になる(なれば)青錢を儉約せよ。

(7) Es hat seit mehreren Tagen anhaltend geregnet; daher sind die Strassen kaum gangbar.  
 數日以來引續キ雨降レリ、故ニ道路ハ殆歩行ス可ラス。  
 數日以來引續き雨降りたれば、道路は殆歩行すべからず。

(8) Die Sache ist wichtig; ich werde sie daher erst reiflich überlegen.  
 此事ハ重要ナリ、故ニ先ヅ之ヲ熟考スベシ。  
 此事は重要なれば、先之を熟考すべし。

(9) Es fängt an, kalt zu werden; deshwegen werden wir nach Hause gehen.  
 寒クナツテ來マシタ、ソレ故家へ參リマシヨ。  
 寒くなりて来たれば、家へ行かん。

(10) Das Messer schneidet nicht; soglich ist es stumpf.  
 小刀ガ切レヌ、ガカ<sup>ラ</sup>鈍イ。  
 小刀切れざれば、即鈍きなり。

(11) Jener Weg führt nach Norden, dieser nach Süden; demnach haben wir jenen einzuschlagen.

彼道ハ北ニ通ヅ、此道ハ南ニ通ズ、因リテ彼道ヲ取ルベシ。

彼道は北に通じ、此道は南に通ずるなれば、彼道を取るべし。

(12) Alle uns bekannten Planeten sind kugelförmig; also wird auch die Erde kein

Ausnahme machen.

吾人ノ知レル遊星ハ皆球形ナリ、此ニ因リテ地球モ亦此例ノ外ニ出デザルナラン。

吾人の知れる遊星は皆球形なれば、地球も亦此の例の外に出でざるべし。

(13) Er ist fleissig; so wird er etwas lernen.

彼ハ勉強ナリ、故ニ何事カ覺ユルナラン。

彼は勉強なれば、何事かを覚ゆるならむ。

以上の各例皆國語にては、意味の如何に關せず、其れが理由を示すには必ばといふ且爾乎波を動詞等に接せしめて之を示す。獨逸語の如く、場合によりて接續詞を異にするが如き、繁雜なるものにあらず。唯ばの一旦爾乎波の用法を記憶すれば、其の用千變萬化自由自在なるべし。而して別に其の理由の有様によりては、副詞を加ふること(10)の例の如くすべし(11)の例にありて、原語の *soglich* は副詞より來れるにて、こゝにては副詞の意と接續詞の用とを兼ねたるものなれば、即といふ副詞を加へて譯するを可なりとす。しかして即の有無は連結文の構造には關係する處な

し。  
 日本文の配列として結果を先にし、原因を後にするが如き連結文をつくること  
 かなはず。この故に *dem* 又は *weil* などいふ、後退的接續詞を有する文を國  
 語に譯せむには次の文を先にし、始めの文を終りにして位置を轉倒せしむること  
 (1) (2) の例の如くせざるべからず。(3) (4) 以下は其の配列國語に似たれば譯し易きな  
 り。

以上譯例を示ししは彼の文を譯せむには必かくせざるべからずといふにあら  
 ず。かれの連結文を國文にても連結文の形にて譯せむにはかくあらざるべからず  
 といふなり。其の意義のみの譯ならば、高橋氏の例の如くにもありなむ。しかもそ  
 は、連結文として譯したるもの少く、唯義譯したるのみなるに注意せざるべからず。  
 以上述ぶるが如くなれば、國語にては文と文と連接するものに且又などいふ詞  
 はなきなり。それらは唯、接續せる際に或意義を添ふるのみにて結合要素としては、  
 更に何等の價値なきなり。然るを従來の文法家國語家にあれ、洋語家にあれ、殆一人  
 もこれを説破せざりしは遺憾なりといふべし。唯一人の慧眼なる學者ありて、や、  
 この邊の消息を認めたるあり。故草野清民氏なり。氏の遺著「日本文法」二六三頁二六  
 四頁を見よ。この點に於いてわが國語研究に従事する者は決して氏の名を忘るべ  
 からざるなり。余は今敢へて、氏と發見の功を争はず。唯この薄幸なりし國語の愛護

者の姓名を永く國民が記憶せむことを希ふのみ。

草野清民氏が説は「日本文法」中にあれど、不幸にして接續詞の條を逸す。氏の意見  
 の余が意見に合した。し事を發見したりしは實に文法篇中に於いてなりき。今其  
 の説を左に引かむ。これ同氏に對する余が同情の一端を表せむとてなり。

二個以上ノ單文ヲ合成シテ一ノ複文ヲ作ルニハ其方法種々アレドモ、之ヲ大  
 別スレバ合成ノ際ニ且爾波ヲ用キル者ト否ラザル者トノ二類トナル。

且爾波ヲ用キヌ者トハ云々

文ヲ合成スルニ此法ニ依リ、或ハ其外ニ上文ノ下、下文ノ上ニ接續詞形ノ詞(こ  
 の邊誤植あり。推定して上の如くによみたり)ヲ挿ム事アリ。例へバ「酒あり」「肴あ  
 り」ヲ合成シテ「酒あり、又肴あり」トシ「花咲く」「蝶舞ふ」を合成シテ「花咲き、且蝶舞ふ」  
 トスル類ナリ。此等ノ「又」ハ時ニハ接續詞トシテモ用キル詞ナレドモ、ソハ名詞  
 又ハ名詞格ノ間ニ立テル時ノ事ナルヲ知ラザルベカラズ。上ノ例中ニテハ下文  
 全部ヲ修飾スル副詞ニシテ、決シテ接續詞ニアラズ。何トナレバ、上例ニテ「又」ハ下  
 クトモ上文ノ説話ノ變形ニテ接續ノ任務ハ充分ニ盡セルノミナラズ、此變形ナ  
 クバ、縱令「又」アリトモ二文ハ依然トシテ二文タルベケレバナリ。サレバ世ニ接  
 續詞ハ文ヲ絡ギ合ハスル詞ト思ヘルハ大ニ非ナル事ヲモ覺ルベシ。

此ニ限ラズ副詞副詞格ノ詞句ヲ接續詞ト誤認スル事極メテ多シ。能ク心ヲ用

キテ惑フ事ナカレ。

氏の説は大體に於いて余が既に論せし所に似たることを思ふべし。唯氏は之を中止法にて連結したる文にのみ限られたるやうなれど、余が譯例を見し人は且爾乎波にての連結文にもかゝる事存在するは一一一頁の(6)の例、一一二頁の(9)の例、一一六頁の(10)の例にて思半にすぎむ。

右に述ぶる如くなれば、從來文と文とをつなぎ合はする接續詞といふものが、且爾乎波以外にありといふ説の勢力ありしは一に翻譯的文典の餘弊にして更に國語の真相に研究し及ばざるものゝ所論なるはいふまでもなきものにして、若其の説成立せば、かの接續の且爾乎波といふものは如何なる職分をなすものか、或學者の如きは、この本來の接續的任務を有せる且爾乎波を目してかへりて轉來の接續詞などいふ部類に入るゝを適當とすなど論じて書にもあらはせり。實に不思議なる論法なりといふべし。かくの如き人の説をか草野氏にきかしまさば、まさしに何とかいはず。余は斷じてかゝる人は國語を論ずる資格の不足せるものといふなり。以上陳述せる處にて吾人の論據とする點の眞意は明なるべしといへども、なほかの今迄接續詞と稱せられしものを副詞なりといふはあまりに專斷ならずやと傾く人もあるべし。いでや、これに類似するものゝ外國語にも存在することを示さむ。

There is also a class of independent adverbs which closely resemble conjunctions, such as *still* and *nevertheless*, as in *your arguments are strong; still (nevertheless) they do not convince me*, compared with *your arguments are strong, but they do not convince me*.

For convenience we may call such adverbs half-conjunctions. The difference between half-and full conjunctions is that half-conjunctions connect logically only, not formally also, as full conjunctions do. Two clauses connected by a full conjunction run on without a pause and constitute a single complex sentence, while two sentences connected by a half-conjunction may be—and often are—separated by a pause, and the whole group is felt to be a logical not a formal group.

このスキート氏のいへる half-conjunction といふもの、これすなはち副詞にてありながら接續詞の如き役目に立つなり。しかも之によりて結合せられたる二文は思想上の連結はあれども、形體上の連結はなきなり。この故に前文は後文とは形式上連關することなしに必、一回音の斷止ありて、意義完結し、再この接續的副詞の媒によりて次文に思想上の關係を生じ來るなり。この故にかれらの文にありては full conjunction にて結合せられたる文の中間にコンマ(,)符を用ひ half-conjunction にて結合せられたる文の中間には終止(.)符を用ゐるか又はセミコロン(;)符を用ゐて示す。この故に嚴密にいへば、吾人が先に譯例としてあげたる獨逸文のうち、大部分はこの所謂 half-conjunction にての連結文にして眞正の連結文にあらで、かへりて國文の

吾人の譯例こそは眞の連結文なるなれ。此の點に於いて國文は優に彼を凌駕してあまりありといふに憚らざるなり。

わが國文にありても、この half-conjunction の類すなはち從來接續詞と稱せられたるものを以て獨立の二文を思想的に形式的にてはなくのみ連結することをうべく、又この接續詞と稱せらるゝものなくて、先に述べしが如き方法にて連結せられ、形式上に於いて一體となりうることをあるべく、又其が間に更にかの所謂接續詞と稱せらるゝものを加へて思想上の連結を緊密にすることもうべく、すべてかれの一方の方法にてなすものを三様になすことをうべし。若し接續的の語に富むことは言語の高き發達を證明すとの、ハイゼ氏の言をして信ならしめば、吾人の國語は恐らくは英獨諸國語に遙に凌駕せるものなるべし。

次に何が故にかゝる差を生せしかを推考するに、こはかのハイゼ氏の言にいはすや。

Ohne sie würde der Zusammenhang und die feinere Beziehung der Gedanken aufeinander unbestimmt und oft undeutlich bleiben.

これを以て考ふれば、それらの接續詞と稱せらるゝものには思想の連結をなす能力と、又前後兩思想間の關係を示すものが保合せられてあるによりてならむ。この故に唯接續するのみならず、同時に意義上の關係をも示すなり。然るに我にあ

りては直接に兩思想を結合する要素と前後思想間の關係的意義を媒介するものとが別々に發達したるものならむ。これ序論に述べし如く、我國語の分析的特性の著しく認めらるゝ處にあらずや。

この故に吾人は從來接續詞と稱せられたるものゝ大多數はかの副詞の類にして文と文との接續をなす單語は且爾乎波のみなりといふ所以なり。この點に於いて草野氏を除きての他の殆すべての文法家余が知れる限りの國語家に絶對的反對することを宣言す。

次に語と語との接續詞と稱せらるゝものにつきて述べむ。先國語にては語と語の間に接續をなすには所謂接續詞によらでもなしうるものなることを示さむ。すなはち、國語にありては詞と詞との間の接續は且爾乎波にて示しうるなり。其の例左の如し。

と、これは名詞と名詞とを其の必要に應じて連續せしめて一團となし、以て述語に對し、又は其の他の語に對しては一の語と同様なる資格を有せしむ。

松と梅と竹とを松竹梅と稱す。

蘭と梅と菊と水仙との畫あり。

などにありては、とにて連接せられたるものは、一の語同様の資格を有するものにして、其の間に緊密なる關係を有するは、之を一づゝに離して

松を松竹梅といふ。

などいふを得ざるが如き關係ありと見ゆるにても知らるべし。

か 名詞に附屬して其の間の一を選択する意を示す。

汝か我が行かざるべからず。

といへば汝か我がのうち一人は行くべき事を示す。

や これは枚擧して並列する意あり。

是や彼やにかこつけて、

かく國語にては且爾乎波にて同格の接續をなすにとは結合を示し、かは選擇取捨を示し、やは枚擧を示すなり。この外、第二類且爾乎波のもも稍この種の使用法あり。

君も我も彼の友にあらずや。

の如きこれなり。さてかゝる際に使用する彼の接續詞と稱するものは、

und, weder.....noch, oder, entweder.....oder,  
and, neither.....nor, or, either.....or,

等なり。然れどもかれらの接續詞は接續の勢力以上に何等かの意義を附加するものなり。かゝる意義をあらはすにはこの且爾乎波以外に他の副詞的語を加へざるべからず。こゝに於てかの所謂接續詞の如きものの必要生じ來るなり。

かゝる際に使用せらるゝ所謂接續詞は、

選擇取捨を示すものは、 若は、或は、

並列結合を示すものは、 また、かつ、

等なり。今これらの用法意義をとかむ。

若は元來純粹に副詞と稱せらるゝ者にして、假設の意を示すものなり。この故に

つれづれなる夕暮もしは物あはれなる明ぼの。

無文の青色もしは蘇芳など五重にて。

などの如く、はといふ且爾乎波の意義にて分離の意を附加し、こゝに論理上の所謂離接的性質 disjunction をあらはすに至りたるものなり。この故に二觀念の中間に入りてもなほ、その性質をあらはし、獨立せる二文の中間に入りても然るなり。

我が功におきては日本國を給へ、もしは半國を給はりても足るべからず。

等の例あるなり。若くはといふも同じ。

あるひはは時としてはあるはともいふ。共に「或場合にては」「或時は」「或者は」の如き意をあらはす。これも亦本來の副詞にして次の如き用法あるなり。

あるは花を戀ふとてたよりなき處に惑ひ、あるは月を思ふとて、あるべきなき間にたどれる。

あるひはほのほに巻かれてたちまちに死に、或は又僅に身一つからくしてのがれたれども資財を取りいづるに及ばず。

これらが接續詞の類にあらで副詞の類なることは先にいひしにて明なることなり。而して又別に

文或は武を修む。

といふが如く語を接續する者あり、或場合にては文を修め、或場合にては武を研くといふか、又は、或者は文を修め、或者は武を研くといふが如き意を寓したる語法なり。

またも亦動作觀念の重複をあらはす副詞なり。これが名詞と名詞とを複合せしめて、

山又山を越えて行く。

といふが如きも、なほその副詞の原義は保存せらるゝなり。たとへば「山又山をこゆ」といへば「山をこえ又(再度)山をこえ」たるなり。この故に重複することの不穩當なるものにはこの又を使用し難し。

山又山が高し。

川又川が深し。

といふ事は吾人にはいふ事かなはず。若これをとにてあらはしもにてあらはせば、次の如く、

富士山と新高山とは高し。

利根川も信濃川も深し。

といふことをうべし。これとは二者を合して一團とする力あり、もは二者を直接

に述語にかゝらしむる力あるによるなり。又に至りては自家特有の意義ある故にそれに衝突する物は到底媒をなし難きなり。

又は又動詞形容詞等を結合することあり。古今集の

見てもまた、またも見まくのほしければ

とよめるは「見てもまた見たし、又も見たし」といふ意にて副詞なること明なり。

又はといひて、若はに類似する用法をなすことあり。

且は純粹の副詞なること明けきになほ、次の用法に迷ひて接續詞といふ人あり。

不義にして富みかつ貴きは我に於いて浮雲の如し。

の例の「富みかつ貴き」は二状態の存在をあぐるにて、且は片より轉せりといふ、そはとまれ、かくまれ、事物の半面づゝをあげて示す詞にしてこれも一面には富み一面には貴きをいへるまでにて日本語の自然の語法にては「かつ富みかつ貴き」といふなり。

以上述べし四語は語の接續詞と見ゆるものなれども、其の用の全般を見れば、たしかに副詞たるなり。しかもなほ一面接續詞ともいはゞ云はるべき形を有せり。これのみを取りて接續詞といはゞいはるべきかもしられず、しかもこれらはかの西洋文典の接續詞といふものと同義にてはあるべからぬは勿論なりとす。

此の他なほ「及び」といふ二語が接續詞として取扱はれたり。これらは元來本

籍を有する語なれど、なほ、その用法によりて接續詞と稱せらるべきものなり。こは元來漢文直譯調より來りしは著しく、古來の文にては榮花物語に「ならびに」といふ語の見えしを始めとやすべからむ。しかもこれらは漢文直譯調より來りしとは稱しながら、近世文には頗多く使用せらるゝものなれば、なほ存在を認むべく、今、若し語と語との接續詞を認むるならば、これらにやあらむ。これを以て接續詞と稱すべきか否かは今論せず。

かく論じ來れば、國文にありては文の接續は所謂且爾乎波にて行はるゝものにして、語の接續の場合にのみ、かの接續詞に似たる所謂接續詞といふが如きもの存在するなり。吾人は今これらを如何に處分すべきかをいはす。唯かれの接續詞といふものが、かゝるものに該當することをいふに止まらむとす。因にいふ手島春治氏も亦この邊の消息をさとられたるもの如し。但氏の説詳に知り難きを以て十分に余が説に符節を合するか否かは明言すべからず。第三類の且爾乎波を接續詞とせられたるは余が同意する處なり。されば「然れば」の類を接續的副詞といはれたるも亦余が説に一致す。たゞ其の論の西洋文典直譯の臭味を脱せず。接續詞と稱せらるゝものゝうちに包含せられたる語類の雜駁なるは未賛すべからざるなり。

七 間投詞について

國語學の歴史を按ずるに所謂感動詞といふ名目を設くることは西洋文典の模

倣によりて設けられしを始めとす。かくてこの感動詞の名目中に包入せしむる詞につき、ては現今の文法家は二派に分れるものの如し。

甲は あな、 あはれ の如く、他の語の上に用ゐらるゝものと、 かな、 や、 な、 の如く他の語の下に用ゐらるゝものとを總べて感動詞と稱するもの。

乙は あな、 あはれ の類のみを以て感動詞とし、 かな、 な、 や、 の類をば助辭又は且爾乎波の類に入れて感動詞とはせざるもの。

かくの如く、甲、乙、二種あるが、とにかくに感動詞といふ一品目を設くることは是認せり。又所謂他語の上に用ゐらるゝものを以て、獨立に用ゐらるゝものと考へて、之を他の各種の品詞と性質を異にして、獨立にて不完全ながらも文をなしうるものと見る説もあり。又其の形より見て體言とし、又意義より見て助辭の類とする説もなきにあらず。吾人は唯西洋文典の *Interjection* の國語のこれらに該當するか否かを稽査せんとす。

先、西洋文典の *Interjection* は感動詞と稱せらるれど、そは寧ろ間投詞といふ譯語を妥當なりとするなり。間投とは字面不穩なり。投間といふべきか。さて西洋文典の所謂間投詞とは、抑如何なる意義用法を有するか。之を獨逸文典に徴するに、

*Die Interjektionen sind laute Ausbrüche des Gefühls, nicht Zeichen bestimmter Vorstellungen, also keine wirklichen Wörter, sondern bloss Empfindungslaute. Sie stehen ausserhalb des gram-*



metischen Zusammenhanges bald für sich allein, bald im Anfange oder am Ende, bald zwischen einzelnen Worten eines Redesatzes (daher der Name Interjektionen oder Zwischenwörter), Kurz jedesmal da, wo sie Zur Verstärkung des Ausdrucks einer Empfindung dienen sollen.

Ihrer Bildung nach sind die echten oder eigentlichen Interjektionen ursprünghche Naturlaute, die in keinem etymologischen Zusammenhange mit den Wörtern der Vernunftsprache stehen.

Ausserdem werden aber auch einzelne Formen von Verben, Haupt- und Beiwörtern, Partikeln etc. als unechte oder uneigentliche Interjektionen gebraucht.

Die echten Interjektionen können weder ein Wort regieren, noch von einem andern Worte abhängig sein und können daher bei jedem Kasus stehen.

さてかの諸家の等しく認めて感動詞とするものうち先かの且爾乎波の類とせるかななやを以て果してこの Interjection に該當するか否かと願みるに、

真正なる間投詞は或詞をも支配し能はず又或他の詞にも從屬し能はず。

といへる彼の説に合するかかの且爾乎波の種に入れたるかなな等は果して從屬し支配する所に制限なきか殊に又かれの間投詞と稱せらるゝ理由は實に、

文法上の關係なしに或時は獨立にのみ或時は發端に又は終末に或時は全文の個々の詞の間に常に表出の強めの爲に或感情を供せねばならぬ所に存す。

といふには頗矛盾せる所あり即かのかななや等は一定の法則によりて從屬するのみにて自由に任意に使用し得ず又位置にも常規ありて逸すべからずたとへば、

かなは名詞又は動詞形容詞の連體形に附屬して其の他には附屬することなく且必文の終末となるなは一旦終止せる處に更に附屬するのみにて更に他の用法を容さずかれの間投詞の類にはあらざるなりこれを以てかの間投詞の類とするよりも我が舊來の分類に従ひて助辭となすこと妥當なりとす。

かくて残れる乙論者の所謂感動詞は如何今これをかの間投詞の所説に合するかとみるに、

感情の聲高き發表なり確乎たる觀念の符號にてもなく又夫れ故に、少しも事實の詞にてもなきのみならず單純なる感情の聲音なり。

といふ點には或は合せむ然るに其の用法の上に於いて、

文法上の關係なしに或時は獨立にのみ或時は發端に又は終末に或時は全文の個々の詞の間に用ゐる

か否かといふに或は獨立に或は發端に又は終末に用ゐるといふことをうべけむ然れども全文の個々の詞の間には如何にしても用ゐることなきなりこのいづこにも用ゐらるゝ點が所謂間投詞の特性にしてこれあるによりて間投詞といふ一品目も生じ來りしなりさればこの間投性の有無は實に間投詞の生存の要點にして之なくば到底間投詞といふべき資格なきなり然るにこれには其の性質缺けたり且是等は果して或は獨立に又は發端に終末に用ゐるかといふに多くの學者

の説の一致するが如く發端に用ゐるが常規にして、終末に用ゐると見ゆるものは、大抵顛倒したる措置を執れるものなり。又之を獨立語といふ説もあれど、其は必或思想の前行をなすものにして、若し、單獨に用ゐるとせば、其は一の完全思想を發表してこの一語に寓したるものなり。かゝる用法は所謂副詞にも動詞形容詞にも存在するなり。

之を以て見れば、これらの語を総合して間投詞又は感動詞といふ西洋文典の名目を以て一括し去ることは到底能はざるなり。

然らば、とにかくに感動詞といふ一名目を別に存しおく必要ありや否や。これ實に大なる問題なり、深く國語の本質に立ち入りて研究せざるべからず。

余はなほ念の爲、かの間投詞につきて論せざるべからず。西洋文典の所謂感動詞 *Empfindungslaut* は實際感動のみをあらはすものにあらずして、其の間投性あるより、それらの間投性ある語を一括して間投詞の一目を立て、其の主要なるものが、感情をあらはすによりて、感動詞といふ名目を與へたるものと見ゆ。この故に、この品詞は非論理的に二重の意義を有せり。一方よりは觀念よりして感動詞といひ、他方にては其の用法よりして間投詞といふ。しかして此の二概念は實際に於いて、相合一するかといふに感動詞の部類にある模擬音聲も名詞として取あつかはるゝことは少しく外國語を研究せし人のあまねく知れる所、感動の觀念としては既に二

重の用法あり。又名詞にても動詞にても間投的用法あるものは又感動詞なりといふ。かくては觀念としても用法としても致一のものならず。實をいへば、かれは一單語にて一思想をあらはす程のものをばみな感動詞なりといへり。かれらは *Exclamatory* ト氏の所謂 *A word sentence* を殆皆 *Interjection* なりといへり。かれらの文法にては此の一語にて一思想をあらはすものを文章論の所轄にせずして、單語論上の對象とせしかば、かゝる事の生せしものか、或は又かれの語性かくせではかなはぬより起りしものか未詳にせずといへども我にありては何の必要ありてか之を學ぶべき。かれらの間投詞とて、時には全文を支配する副詞の如き用法をなせるもの屢あるなり。これらは果して間投詞の性質あるものか否か、未遽に決すべからざるなり。世の文法家彼の間投詞の本性を深くも研究せで、其の皮相をのみ見て、我にもかかるものありと速了して、更に顧みず。吾人をしていはしめば、間投詞といふを一目とせば、名詞、代名詞、動詞、形容詞等皆間投詞となりうべし。而してかのかなかや、な等は關らざるなり。又感動詞といふ一目を立てば、かの甲の論者の如くすべし。難駁なりとて厭ふべきにあらず。

國語の性質としてかの所謂感動詞のうち二種あることは既にいへり。この二種を合して感動詞といふ名目を與へむか。一は西洋文典の感動詞に該當せず、一は、不合理に陥るなり。其の理由はこの品詞以外の品詞皆唯觀念の上のみならず、用法

職能を主として分ちたるものなるにこゝに至りて遽に其の用法職能を異にせるものを唯意味の類似のみを以て一類とすることは不當なればなり。

かの亘爾乎波の部類に入るべきものは、他の語に添ひ、又は文の終末に附屬し、それが附屬したるによりて始めて感動的調子を其の語其の文に與ふるものなり。其の職能は他の點に於いて亘爾乎波と異なることなし。次に他語の上に来るものは、こは所謂觀念詞の一部にして、とにかくに感動的意義を自家獨立に有し、概して他の語の上において其の下に来る語又は文全體に感情的調子を與ふ。其の職能、かの副詞に似たり。この故に吾人は所謂感動詞といふものをかの西洋文典の翻譯的文法のすべてより離れて、二類なりとせむと欲す。

終に一言すべきは、かれの間投詞は文章成分の外なりといふに我れのは文章成分の内なり。この故に用法上一定の法則あるなり。然らば、我には一切かの間投詞に類するものなきかといふに、吾人はこゝに至りて存在すといふなり。こゝに於いて、かの洋癖家は遂に吾人に降りと思惟せむ。請ふ心を鎮めて、我が言を聽け。

抑かれの感動詞の本性は如何といふに、余は更にハイゼ氏の言を繰かへすべし。  
Die Interjektion sind laute Ausbrüche des Gefühls, nicht zeichen bestimmter Vorstellungen, also keine wirklichen Wörter, sondern bloße Empfindungslaute.

これを以て見れば、かの間投詞とはたゞ單純なる感情より發したる聲音なるのみ。

かゝるものは我にありては所謂雅文には殆存在せねども、又頗多きなり。

しながとり、猪名の湊に、あいぞ、入る舟のかちよくまかせ、舟かたぶくな、ふねかたぶくな。

紀の國の、きのくにのや、しらゝの濱に、眞しらゝの濱に、おり居る鷗は、れ、その玉もてこ。

此殿は、むべも、むべも、富みけり。さき草の、あはれ、さき草のはれ。

酒をたうべて、たべゑうて、たふとこりんぞや、まうでくる。なよろほひそ、まうでくる。たんな、たんな、たりや、らんな、たりちりら。

釣りする所に釣つた所が、はあおもしろいと。

黒木かはんせんかいな、栗かはしやんせんかいな。えゝゝゝ、かはしやんせんかいな。

これらの――符を加へたるもの、これ即かの間投詞にあたるもの、吾人は今文成分としての品詞を研究せむもの、これらは度外に置きて可なり。これを以てもかれらの間投詞といふものは所謂感動詞にあたらぬことをさと、又我が先にかれの間投詞には二重の意義あることをいひたるをさとるべし。かくて吾人は前に述べし如きもの、其の未文成分とならざる類は多數存在することを認め、之を以てかれの間投詞にあて、所謂感動詞と稱せらるゝものは文成分として一定の法則に支配せ

らるゝものなれば、それ〴〵の部門に入れむとす。かくしてこそ、はじめて西洋文典の眞の意義も發揮せられ、國語の本性も害せられざるなれ。この故に西洋文典にいふ感動詞又は間投詞は我にありては三種にてあらはさるゝものなり。一は一語に一思想の寓せらるゝもの、これは主として文章論にて論すべきもの。二は文に感動的調子を與ふる文成分、これはなほ二種類に分割すべきもの。三は眞に間投的用法に立てる自然の聲音、これには調子を添ふるもの、自然の音響を模擬するもの等あるべし。しかもそれは文の構成に關係することなきものなり。西洋の感動詞に、國語を比較したる結果、以上の如し。されば其のまゝ之を國語に適用すべからぬは明なり。

以上は西洋文典の範疇のわが國語に應用せられうるか否かの研究なり。吾人の研究の結果は到底其のまゝにては、不可なることを示せり。余がこの研究をよみてこゝに至れる人は如何に國語を處置すべきかにつきて方途に迷ふ人なかるべし。されど余はなほ輕忽に論斷を下すべきにあらず。余はなほ慎みに慎みて他の方面を顧みて其の可否を判定せざるべからず。こゝに余は舊來の分類法の批評にうつらむとす。

(三) 古來我が國に發達せる分類法は  
果して適當なるか

從來の説に二流あり。富士谷氏のと現今の岡澤氏の主張せらるる説となり。余は富士谷氏の説を除きての他の説にては岡澤氏のを以て最發達せるものと信ずるを以て、先これをこの派の代表者と立てたり。

一 用言と靜辭

岡澤氏は體言、用言、動辭、靜辭の四者なりとする分類をとれり。用言とはかの洋式模倣家の形容詞といへるものと動詞といへるものとの總括なり。これを總括していひたりとて、更に障害なく、專利あるべきは第二節に既に述べし所なり。吾人は、先之を承認す。次は靜辭なり。これは古來且爾乎波と稱せられたるものゝ本體。大槻氏だに且爾乎波とせるもの。これにかの感動詞中他語に附屬して用ゐらるるものを加へたるは我が國語本來の性に適したるものなるは又前節に述べし所にて略知らるべし。この二者につきては洋式模倣のよりも古來の説の正しきは明なり。

二 體言とかざし

さても體言といふ一目は如何。これ實に吾人の論點なり。體言といふ語の本義如何。これが唯に語尾に變化なきものといふならば、靜辭も體言なり。それは岡澤氏が許さざりし處。然らば一步進みて、觀念を有して語尾を變化せぬものとせむか、(辭とも觀念なきにはあらねど、獨立にて觀念を發揮し得ざるが故にかくいふ)所謂副詞の類も接續詞の類も感動詞の類も共に明瞭に觀念を有せり。體言として更に區別

あるべきにあらず。然るに氏は之を二分して正準の別をなせり。體言として同資格なるものならば、何が故に他の名を以て區分せずして正準の差を立てたるか。思ふに氏自も既にこの正と準とは分別すべき性質のものなることを認めたるならむ。然れども氏が分類はこの準なるもの、編入せらるべき部分なきまゝに、便宜上體言に準じたるものならむ。何となれば、かの體といふは犬根氏の説の如く用に對したる名なり。吾人をしていはしめば、豈はなほ哲學上の用語の實體實在、本體の如きなり。用はなほ現象屬性の如きなり。故に用を以て事物の動的、靜的の屬性觀念をあらはす形容詞動詞なりとせば、體はまさに其の屬性の所依たる實體と思惟せられざるべからず。體と用との本義かくの如し。之を活用の有無にあつるは誤解なり。之を獨逸文典の用語にていへば、

Um Bestandteile des Satzes sein zu können, müssen alle Wörter entweder 1) Ausdrücke für das Selbständige (die Substanz) : Substantiva oder Gegenstandswörter sein, oder 2) Ausdrücke für das unselbständige, jenem beigelegte Merkmal (Attribut) : Attributiva, Belege-oder Merkmalswörter. Substantiva 又は Gegenstandswörter が體言に當り、Attributiva 又は Merkmalswörter が用言に該當するなり。かく相對的の名なるに體言を用言の附屬物と見ゆるものまでに擴充するは甚不當なりとす。なほ余は體言用言の稱の古來の變遷を顧みて説を立てむ。

抑體用といふ語を以て、語形の變化の有無を區別するが如きは、我が國古來の用例にもあらず。又支那本來の意義にもあらず。

説文に曰はく、

體總十二屬也从骨豊聲

段注 十二屬許未詳言今以人體及許書覈之首之屬有三曰頂曰面曰頤身之屬三曰肩曰脊曰尻手之屬三曰左曰臂曰手足之屬三曰股曰脛曰足合説文全書求之以十二者統之皆此十二者所分屬也。

用可施行也从卜中衛宏説

段注 卜中則可施行故取以會意。

字書既にかくの如し。決して變化の有無にあらずして本體運用の義に近きなり。所謂性理の學にて用ゐるは實に余が先にいひし如く實體現象の義に解したるものなることは今ことごとくしくいはでも可ならむ。

我にありて體用の二義を相對して用ゐたるはいつを初とするかを知らねど、連歌には屢之を用ゐることあり。

連歌新式追加并新式今案等

一雜物體用事

假令春と云句に弓と付て、又ひく、かへる、をすなど付べからず、是用なる故也。

本末とは付べし、是體なる故也、打越に體あらば本末不可然也、長といふ句に繩と付て、又短など、是を不付、是體なる故也、くるひくなどは可付之、是用也。

この連歌にていふ體用は實に本來の意義を有せるものにして、かの實在、屬性の區別によりたるものなり、連歌にてはこの體用の區分頗嚴重なるものにして、之につきての心得なくば到底連歌よみとして立つこと能はざるなり、老かれどもこは文法上の議論にはあらざるなり、余は唯體用の義の語形の別によるに出でたるにあらずして、意義より來れる別を示すものなる證とすれば足れりとなす、かの木食上人の無言抄などの體用も亦連歌の思想より來れるなり、かの書は連歌の書なるを以ても知られなむ。

體用の別を文法上の意義にて觀察せしもの、吾人は契沖阿闍梨に於いて、始めて之を見る。

もろこしには見花見月など先用をいひて後に體をいふをこゝには花を見る、月を見るとやうに先體よりいひ、老かかくさまも天竺に似たれば云々

(和字正濫鈔)

これを以て見れば師の體用といへるは支那の本義にして、又吾人の所說に一致す、谷川士清氏の和訓栞に曰はく、

諸越には觀花聽笛など先用をいひて、後に體をいふを此間には花をみる笛を

きくとやうに體よりいひならへりといへり、云々

かくの如く谷川氏も亦契沖師の說をうけたるものならむと思はるゝなり

體用を言語の形の變化の有無の區分に使用したりしは誰なるべきか、詳に知る事難しといへども、この說を生すべき豫備をなしたるものはかの契沖師に反對したりし橘成員氏の說なるべきか、その和字通例書中に曰はく、

假字體用

思おもひは體おもふは用なり、他準之、古書におもふは體おもひおもへは用なりとあり、然れどもおもひは我にあり、おもふは人に及ぶなり、譬へば器に鹽たらひは手洗ふといふ用より體を生じ、或は篩ふるひ是もふるふといふ用より體を生ず、此類體用の證なり。

按ずるにこの體用の義なほ本來の意義なれど、用言の活用につきて、云爲する所は自然に後世の誤說を生すべき傾向を生ぜり、老かして、この說によりて見れば、先人の體用につきての說もありけむを、そは誰のをさすにか、管見未之を詳にせず、これより一轉して賀茂眞淵氏に至ります、現今諸家の用例に近づき來れり、語意考に曰はく

此國の上つ代より用來りて、定め有言葉の分ちは横の音にこそあれ、其一言初むる聲、二は言動かぬ聲、三つは言動く聲、四つは言おほする聲、五つは言助くる聲

なり。

とて氏の有名なる初體用令助の目は生じ來りぬ。而して其の説は遂に後世の例を開けり。氏は體とは即言動かぬ聲用は言動く聲といへるにて、體用の別はこゝに動くと動かぬとの區別の名目となりたりぬ。然れどもなほ活用ある言の上にいへるなれば、全く後世の説に一致せりともいふべからざるなり。

本居宣長氏に至りては如何、石上私淑言に曰はく、

さて又拾遺集に

思ひでもなき古里の山なれど隠れゆくはたあはれなりけり。

年毎にさきは變れど梅の花あはれなる香はうせすぞ有ける。

(中略)さて右の歌どもによめるあはれはみな用の詞なり。それを體の詞にいへる

もあり。後撰集

あたら夜の月と花とを同じくはあはれしれらむ人に見せばや。

拾遺集

春はたゞ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる。

かやうに體にもいふ也。

といひ又、

于多は于多布の體なり。于多布は于多の用也。すべて一ツの言を體と用とにい

ふたぐひ多し。

といへるを見渡すに氏の體用は賀茂氏のと異なりてなほ契沖師などの用例に同じきことは明なり。然るに詞の玉緒に至りては、所謂體言といふべき處を動かぬ言といへること例になれり。これを以て見れば、氏は確に二重の意義ありて、まさに過渡の時代を示すものにあらざるか。二世春庭氏も亦かの賀茂氏の系統を引けるものの如し。かく輾轉してかの義門師に至りて、遂に全く外形上の議論になりはて、一切の言語を其の活用の有無によりて體用の二者に分つに至りては、體用の本義を全く失ひ、自然の勢は且爾乎波の類をまで二類に分屬せしめ、終に其の論自身に矛盾を生じ、到底收拾すべからぬに至りしは慨きてもありあり。この故に余は此の過失をかの賀茂氏より義門師に至る間の語學者の責任に歸せむことを斷ず。義門師以後所謂助辭を體用二言の外に分ち出すことをなしたるは確に一進歩なるべし。まかまなほ體言用言を形體上の區別となすが故に、稍正しきにかへらむとし、てかへりて不合理を増し到底精確なる分類をなすことを得ざるなり。今や吾人は其の本義と誤用との歴史的變遷を知れり、而して近時の用法が、本來の意義ならぬと同時に、吾人の研究の結果國語の本性に適應せぬをも知れり。この故に吾人は體用の義を契沖師などの用法にかへして、從來の語學者の誤謬を正さむと欲す。さて立ちかへりて論せむにかの準體言といはれたるものはかの岡澤氏の文典

の頭注に暗示せられたる如く、副詞接續詞感動詞と模倣文典に稱せらるゝものに該當す。あかしてこれらは余が前條の研究によりて知らるゝ如く、皆共に西洋語の副詞に似たる作用をなすものにして決してかの正體言の如く實體的に用言によりて説明せらるゝことなく、かへりて用言の意義を修飾する程のものなり。なほ一言にして其の關係をいはず、用言は正體言に依存し準體言は用言に依存すといふべし。これを一類とすること到底不當なりといふべし。

今若、この形體の區別を以て體用にあつるを固執する論者あらむには、吾人は唯一個の問題をとりて之を破ることをうべきなり。今一步を譲りて論者の如く、形體上の區別なることを許さむか、所謂名詞と所謂動詞形容詞との區別は誠に一見疑ふべからざるに似たり。あかも、論者の假體言居體言など稱するものはいかに説明せんとかする。これらは實に用言より轉成したる體言なるものなれば、假體言とも居體言とも轉成體言とも名づくべし。さて之を用言と區別するには如何にするか。吾人は之を屬性をあらはす語が、其の屬性の抽象概念となり、若くは其の所屬本體の名目に使用せられたるものとなす。こゝに於いて屬性的用法を脱して體言となり、語尾變化の現象より出離したるものなりといふ。之を外形上には如何、外形上よりいはず、これらは用言の變化の一にあらずや、語尾變化ある語が、語尾の變化なき語にかはるには如何なる方法ありてなるか。然らずとすとも、用言が外形上體

言となりたりと識別する理由如何。今若之を「うたひ」に對する「うた」や「どり」に對する「やど」「よどみ」に對する「よど」の如き語尾變化の除き去られたるものにつきて、用言の語尾變化なくなりて體言となりたりといはゞ甚面白し。然れども假體言の場合如何なる天魔鬼神といへども、之を外形より説明することかなはざるなり。即かゝる時はいたづらに循環論法の軌道を旋回するに止まるのみ。この故に體言には語尾變化なく、用言には語尾變化の現象ありといふは或は可ならむ。あかもかゝればとて、語尾變化あるが故に用言なり、語尾變化なきが故に體言なりとの逆の推論は成立すべき理由なく、又事實も之を證明するを拒むなり。

この種の語を富士谷氏が「かざし」と稱して用言たる裝の修飾なる如くいへるはさすがに卓見といふべし。こゝに至りては富士谷氏の説は、たとへ、多少の紛糾あるにもせよ、國語の本性には最適するが如し、舊來の分類とるべくば此の點に於いては富士谷氏のものによらざるべからず。しかれども富士谷氏のかざしといへども、今の吾人の眼より見れば、所謂「かざし」とすべからぬものをも混すること既に述べし所なり。この故に十分に精選せずば、未以て一類を立つること能はざるは論するまでもなきことなり。

### 三 動辭

残る所は所謂動辭なり。之を動詞形容詞等と區別するは富士谷氏のはじめし所



其の系統連綿たえず、富樫氏によりて動辭といふ名目生じ、權田氏には用辭とよばれ、大槻氏は助動詞と稱し、岡澤氏は再之を動辭といへり。

かく諸家が一致して一類に集めたるに關せず、其の彙類の主義は多少異なる點あり、今これを批評せむ。

富士谷氏は之をあゆひの中に説きたり、其の倫六種、身十二種、即これなり。思ふに氏の四大別は主として其の語の本性的位置によれるものにして、其の點よりして之をあゆひ中に入れたるは敢へて異論を挾むべきにあらず、而して倫は其の觀念によりて身は其の活用によりて集めたりといへども畢竟一類たるべきなり。然かも其が中にかの「ゆく」などいふ純粹の動詞も交れり。この故にそが果してあゆひといふべきものか否かはなほ一層研究の上ならでは決し難きなり。

動辭といふ名目は助辭中一亞種たることを示すものなり。これを助辭と稱することは見地によりては不可なかるべし。吾人は今之を可せず。唯この動辭の意義が其の内容に適するか否かを示さむと欲す。この動辭、用辭といふ名目は助辭中にありて語形の變化のあるものの稱とすることか、既にいひたり。たゞ語形の變化の有無によりて體用の別を立つるは不可なること、既にいひたり。この動辭も亦形の變化の存在するによりて與へし名目なりとせば、不合理なる名目なることを直に發見するなり。たとへば「らし」「じ」などは語形は更に變化することなし。ちかしてな

は動辭と稱せらる。奇怪ならずや。これら論者の「はたらく」といふ語の意義はそれら論者の解釋によれば、語形の變化といふ事にして實際の用法は他の意義にてあるなり。且岡澤氏の文典を見れば、靜辭と動辭との區別錯雜せるものありて、殆分別に苦むなり。すべて體言、用言、靜辭、動辭の區別をとれるものは、其の區別曖昧なるものあり。たとへば語尾の變化の有無を以て區別すべしといふ。然れども所謂體言にても「さけだる」「さかだる」となり、「あめみづ」「あまみづ」となる如く、連續によりて語尾の變化あり。さきあげたる「らし」「じ」の類は用辭動辭といはれて語尾の變化なし。かくて體用動靜等のかれらの意義は無意味のものならずや。

大槻氏の助動詞に至りては別に大に論すべきものあり。然れども今其の時機にあらざるを以て述べず。次條に至りていふ所あらむ。

以上は舊來の分類につきての批評なり。以上の研究によりて見れば、在來の研究とても未十分に從ふべき理由存在せざるなり。余は先に西洋文典の範疇につきて批評し、今又舊來の範疇につきて論せり。この間に吾人の執るべき針路は、隱約の間に彷彿として認められたり。こゝに於いて吾人はかの諸説の長短を取捨して、自家の眞理と信する所の體系を組織すべき機會に遭遇せり。然れども吾人はなほ輕忽なる舉動をなすべきにあらず。須らく先其の分類の基礎が那邊に存するかを檢し、さて之を決せむも遅きにあらざるべし。茲に余は次の研究にうつらむとす。

(四) 單語類別の基礎

さても日本の單語をいかに分類すべきか。これ實に語法學上の最大難關にして一切の言論の根源なり。この分類の原理にして、一步を誤らむか、末遂に千里の差を生せむこと甚明なることなり。つらつら思へば從來の研究一長一短、未以て吾人に満足を與ふるものあらず。吾人がこの研究をなすに當りてはまづ之が方針を定めざるべからず。

竊に思ふ。西洋文典の説を輸入して之を奉せるものは果してわれとかれとの異同につきて詳に思ひを致したるか。其の原理が如何に西洋文典に適合せるにもせよ。言語の系統又語性語脈を異にせる我が國語に直に適用せむことは、日本語と西洋語との間にしかなしうべき特別の關係存せざる限りは空しく識者の笑とならざるを知らむや。又舊來の學說を墨守して何が故に其の適當なるかを考へず。古説なるが故に尊しといふが如きものあらざるか。要するに新來の説妄に従ふべきにあらず。舊來の説強ひて捨つべきにあらず。其の取捨は柄乎として日本國語の性質といふ一大標準のあるあり。何を苦んで、方途に迷はむ。この故に吾人は、新舊二説を比較して其の失を失とし、其の長をとり、之を日本國語の特性にあて、可否を決せむのみ。單語分類の方針はこゝに始めて成立ちぬ。

語論の目的は、一切の單語を網羅して、これを其の特性に基きて分類彙集し、依て以て、國語の特性を發揮し、其の運用をはかり、吾人の理性に満足を與ふるにあり。ここに於いては彙集分別の原理方法は悉く論理學上の法則に依らざるべからず。吾人はかの單語に存する特性の一致及差異の度を見て之を類別彙集せざるべからず。こゝに哲學上の語を弄するはをこがましけれど、一切の認識は差別より生ず。差別は關係あるものを比較すること能はず。從つて差別を認むること能はざるなり。ものならば、到底之を比較すること能はず。從つて差別を認むること能はざるなり。又之を他の方面より見れば、すべて事物を類別彙集するには同中異を分ち、異中同を求め次第に順下して一の體系は成立す。同なくんば類別の基礎存せざるなり。異なくんば類別の原理存せざるなり。この故に或は同の一面をのみ見、異の一面をのみ見て、他を顧みざるものは共に談するに足らざるなり。兎にも角にも吾人は論理上の法則によりて國語の特性を顧みて進まざるべからず。かくの如くにして吾人が分類の法則は成立ちぬ。

今西洋文典の單語類別の原理を考ふるに、第一に其の概念の上よりせるもの、如しかくして觀念詞と關係詞との別生じ、觀念詞又別れて主位觀念詞、即、名詞代名詞等と屬性觀念詞、即、動詞形容詞となり、更に屬性の屬性たる一詞を立て、これを副詞とし、關係詞又分れて前置詞、接續詞となれるが如し。これを我が國の三種四種に

分ちたるに比すれば、精緻なりといふべし、大方學者の目を眩せしめしは蓋故あるなり。

然れども、おもふに彼れがかゝる分類をなせるは其の國語の性質によれるなり。かれ如何に精緻なりともわれに適せずばいかでか取るべからむ。かの分類を見るに前置詞接續詞などいふ名目は抑如何なる點より見しものぞ。これ皆文章構成上の作用より見しものならずや。かれらの觀念詞と關係詞との區別は單に意義形體より來るにあらずして實に其の本性の文章構成上に及ぼす作用の異同より來れることは明けし。又かれらの觀念詞中の類別に至りても、主從係屬の關係により類を分てるものなること副詞の形容詞動詞に於ける、形容詞動詞の名詞に於けるが如きは、唯其の觀念の差によれるにあらず、其の觀念、間相互の關係によれるなり。殊にかの名詞動詞等の區別は其の形體の差異よりは其の思想の關係により區別せるものなるは頗屈曲に富める獨逸語などによりて明に見らるゝ所なり。されば余はかの西洋文典の原理によりて單語分類の標準をば、第一に文章構造上の作用關係によりて見、第二に又語と語との關係によりて見、而して其の形體の如きは、殆度外に置くものとせり。

繙つて我が國古來の分類を見るにかの鈴木氏の四種論は形體意義より見たる點多くして關係より見たるは、ただ且爾乎波あるのみ。その他義門師以下の説又然り。果してこの分類は日本單語の分類の典型とするに足るものあるか、思ふに西洋語が形體を度外に置いて其の關係にのみよれる分類をとれるは、かれらの語には語尾の屈曲殆一般の事にして目立たざりしに依るといふものあらむ。又我が國の體用動靜の別はこれらの間に顯著なる差ありしによりて、分別するを可とせむといふ人あらむ。然れども我が言語にこの二大別あるが故に直に之を唯一の利器となすものは未以て可なりとすべからず。見よ西洋語にても屈曲ある語となき語とを區別して、英語にていはゞ、所謂活用語 declinable と不變語 indeclinable or participle との區別をなすことあり。英語よりも遙に屈曲多き獨逸語にても之を以て區別をなすことあり。然れども之を分類の標準として一切之に依據するはあらざるなり。從來の語學者唯支那語との比較のみ位にて論を立つる故に其の語尾變化の有無のみ重するは寧ろ自然の結果といふべし。これ必竟語尾變化其の者の本性をも知らぬ者の論にすぎず。今スキート氏の分類表を次に示さむ。

noun-words :

declinable { adjective-words :

verb :

indeclinable (particle); adverb, preposition, conjunction, interjection.

ハイゼ氏によりて獨逸單語分類表の要を摘記すれば左の如し。

A. Naturlaute der Gefühlssprache : Interjektionen.  
 B. Wörter der Vernunftsprache.

I. Substantiva.

a. Hauptwörter.

b. substantivische Fürwörter.

II. Attributiva.

1. Bestimmungswörter des Subjekts.

1) Bloss benennende Merkmalswörter : Beiwörter.

2) Prädikatwörter mit aussagende Kraft : Redewörter.

2. Bestimmungswörter des Prädikats : Neben-oder Umstandswörter.

III. Partikeln;

(1) Präpositionen.

(2) Konjunktionen.

これらの表を見ては、誰れか唯外形上の區別のみを以てすることの不可なるを知らざらむや。

見よ、語の配列に於いて殆常規なきかの如く吾人に見ゆる英獨語などにていかに語と語との關係が多大の注意を向けられざるかを。蓋これ偶然の事にはあらざらむ。吾人が多數の言語を操縦して一文を構成しうる其の根本の知識は果して語尾の變化の有無によるか。又其の意義の差によるか。余は信ず。われらが少時言語練

習の際語と語との關係によりて生じたる配列の形式を深く、われらが腦底に刻みこまれたるによるにあらざるや。されば、たとへば、外國の單語を國語に借用するに當りてもや、其の意を知るときは之をわが談話に上せ得るものは、即この形式あるが爲にあらざるや。これ其の語の意義に固有せる性質によりて之を如何なる種類の關係に立たしむべきを直に決するが故にあらざるや。すべてかれらの單語といふものは如何なる關係を他の單語に對して有するかといふことが最重要なるは、この關係によりて操縦の方法を認識しうるが故にあらざるや。

言語配列の間に複雑なる變化ある英獨諸國の語と其の配列の一定なる日本語との間にいかに學習の困難の差あるか。思ふにこの配列上の關係よりして單語を類別して妥當なることを得ば、日本語を操縦する上に於いて如何に簡明にして利便多かるべからざるか。かくの如き分類が、果して試みらるゝものとせば、獨日本人のみならず、外國人など、ことに一層の利益をうべきは明瞭なる事にして、又國語の進運を助長する所以にあらざらむや。

惟みるに單語を分類するは、抑何等の理由あるか。言語其の者は決して分類せられむが爲に發生し來れるものにあらず。これ實に吾人の探究的精神と實地の運用とに満足を與へむが爲によりて生じ來れるのみ。此の故に甲の分類と乙の分類との優劣を定めむとするものは、それが如何に合理的なるか、如何に便宜なるか、言語の本

質に對する緊密の度合如何と考ふるより外なきなり。便宜愈多くして本質に愈近く、しかも合理的なる時はこゝに單語分類の能事了れるなり。

### (五) 余が分類

余の上來數千言を費して論じ來りし所は唯、比較的に合理的にして、又比較的に便宜多く、又比較的に國語の本性に密邇したる分類を得むが爲なりき。今茲に吾人が臆説を述べむと欲す。

吾人は種々なる方面より觀察して其の可否を決せむとす。かの所謂名詞代名詞數詞等は共に一括せらるべき類似點を有するは明なること、又動詞形容詞も共に一括せらるべき類似を有せることも既に述べたり。又かの所謂副詞接續詞感動詞の類も一括せらるべき類似を有せるは今更いはでもよき事なり。又かの辭類の類も亦似たる性質を有するは明なり。吾人はこれまでの研究の結果自然にこの四種類を認めうるなり。かの動辭の類は如何にすべきかなほ未決すべからず、今他の方面より研究を試みむ。

一切の單語は之を同の方面より見れば、それが單語たるに於いて一致す。然れども、吾人は其の中に異を求めて之を分類せざるべからず。これ同中異を求むるなり。かくて之を獨立觀念の有無によりて區別すれば、一單語にて一思想をあらはしうる

もの、即所謂 *A word sentence* をなしうべきものと然らざるものとあり。一は所謂觀念語にして他は獨立觀念を有せざるものなり。而してこの一單語にて一思想をあらはしえざるものはかの且爾乎波の類にして専ら觀念語を助けて其らの關係を示す。この關係を示すものと關係を示す詞によりて助けらるゝものとの區別はかの觀念を單獨に有するものと有せぬものとに該當す。この故にこゝに單語を二大別して、觀念語と關係語とに分つ。觀念語と稱せらるゝものは、所謂名詞、代名詞、數詞、形容詞、動詞、副詞、接續詞、感動詞なり。これらは皆時として、一語にて一思想をあらはしうべく、又何等かの觀念を有す。即觀念語は、或觀念を明瞭に指定せるものにして、關係語は其の觀念語に附隨して、それらの間の關係を示すものなり。これらの區別は實に從來諸家の言と辭との區別に相當す。鈴木氏の且爾乎波の説はこれを比喩的に説明したるなり。

かくてこの觀念語を同の一面より見れば、皆一致する點あるものなれど、なほ進みてこゝに異の方面より見て又二分せざるべからず。この故にこの觀念語中に入りて論理學上に所謂自用語となるものと副用語となるものを區別す。自用語とは夫自身に獨立して觀念をあらはし、文を形成する骨子となり、陳述の基礎となるものなり。所謂名詞、代名詞、形容詞、動詞等にして、又舊來の體用二言は之にあたる。副用語とは觀念をあらはしうることは自用語に同じけれど、直接に文の骨子となるこ

となく、必他の語と結合してそれに依存して文の成分となるものなり。この種の語はかの所謂副詞、接續詞、感動詞と稱せらるゝ類のものなり。かくて國語にてはこの區別又明なり。

さて又同じ理によりて、この自用語のうちにも又區分を施すことをうべし。これらは皆文の組成要素たる點に於いて一致す。これを異の方面より見れば、文は實にそれが資料たる觀念又は概念と陳述の勢力とを要す。こゝに於いて、その概念のみにあらはされたるものを今假に概念語といはむ。これに屬するものは所謂體言、又名詞代名詞、數詞等なり。陳述の勢力の寓せられたる語之を今假に陳述語といはむ。所謂形容詞動詞等なり。茲に於いて一切の單語は分類せられたり。之を表によりて示すときは左の如し。

關係語	副詞の類
單語	體言の類
觀念語	用言の類
自用語	陳述語
陳述語	且爾乎波の類

余は以上の分類を執らむと欲す。而してそは頗論理的のものなることを信す。しかもこの區別は果して國語の本性に矛盾を起すことなきかを檢せざるべからず。吾人の研究の經過し來れる所によれば、吾人が概念語と稱する類はこれを一括

して他の語と分ちたる時には、かへりて明瞭なるべきは大槻氏の研究之を證明せり。又同氏の研究と吾人の研究とによりて見ても陳述の勢力を有せる語は又之を一括する方利便なるなり。又かの副詞接續詞の類も亦之を一括し去ること利便なり。關係語に至りても亦大槻氏が之を且爾乎波とせるもの大部分を占む。他との間に矛盾を起すことなし。かくて吾人はこの分類の國語の本性に適せるものなることを公言す。

今、余はなほ他の方面よりしてこの分類の妥當なることを證すべし。國語の特質は實に其の語の性質によりて語順一定せるなり。決して支那語英語などの名詞が動詞の前にあり、後にあり、殆一定の規律なき類ならず。かれらの語には語の種類と語の配列との間に必然の關係あらず。國語にありては語の種類によりて語の配列殆一定せり。これを以てこの語順の上より見てかの關係的分類に參照せしに奇なるかな。これらの間に殆一定の條規あるなり。

先第一にかの關係語と觀念語との位置上の關係を見るに、關係語なる且爾乎波の類は常に觀念語の下にありて其の關係を示す。決して上にあることなし。次に副用語と自用語たる陳述語との位置上の關係を見るに、副用語は必陳述語の上にあることなし。これ富士谷氏のかざしあゆひの命名の起りし處なり。概念語と陳述語との關係も陳述語が陳述をあらはすものとして使用せらるゝ時は又

必下位にありて、概念語の上にあることなし。然れども、其が概念の装定をなす時は下にあることなし。この概念語と陳述語との関係も亦本體的用法としては一定せるなり。

上の如く関係語と副用語との位置の関係は一定の法則ありてうごかすべからず。概念語と陳述語との関係に至りては別に意見ありとす。この陳述語は其の本體は文の陳述をなすものなれども、別に發達をなして、概念語を装定する用法あり。これこの陳述語は陳述の勢力をあらはすと共に屬性觀念をあらはせるものなればなり。しかし其の屬性觀念は或概念につきて、陳述するに用ゐらるゝことあり。又或概念を装定するに用ゐらるゝことあり。こゝに於いてこれらの語は二様の用法を生じ來り、多くの場合に於いて語形の變化を起す。その他前後の連續によりて語形を變化せしむること多し。この點に於いて又概念語との區別を認めうるなり。この故に吾人はこの四種の分類の論理的にして又國語の本性に衝突せず、しかも便利なることを主張す。

これを従來の分類に比するに、概念語は正體言にして陳述語は用言、副用語は準體言、關係語は即靜辭なり。動辭に至りては別に説あるなり。これを富士谷氏のに比するに名は即概念語、装は陳述語、副用語は挿頭、關係語は即脚結なり。元より多少の出入はありといへども余は大體に於いて富士谷氏の説を是認す。この故に余を以

て富士谷氏の説を奉ずるものといふ人ありとても、余は敢へて之を辭せざるなり。余は之を命名するにあたりて、全く通用の名目を取りたり。概念陳述の二類は之を體言用言といひ、關係語は近來の用語にとりて助詞といひ、副用語は西洋流の名目に取りて副詞といへり。かくの如くする時は一方は言といひ、一方は詞といひて、統一なきが如くなれど、事新しき名目は耳目に入り難きを恐れてかくせり。されど、これかへりて利する處少からざるは爾下論歩を進むるに隨つてさとらるべし。

分類の本體	西洋流の名目	従來の名目	余が名目
概念語	名詞、代名詞、數詞	正體言	體言
陳述語	形容詞、動詞、助動詞	用言、動辭	用言
副用語	副詞、接續詞、感動詞	準體言	副詞
關係語	後置詞	靜辭	助詞

こゝに余は動辭即助動詞を用言の部に入れたり。其の説後に至りて明なり。吾人の分類は右の如し。なほ吾人は之につきて其の意義を述べおくべき必要あるなり。

體言用言は、其の實質は從來諸家のと略類似せり。然れども余がこの二種の別は意義に於いてそれらとは大に異なる點あり。吾人の體といひ用といふは、かの契沖師などの用法に同じく、之を獨逸語にていはゞ Substantiva 又は Gegenstandswörter は體言に當り、Attributiva 又は Merkmalswörter は用言に當るなり。論理學上の語にていはば主として主位に立つは體言、賓位に立つは用言なり。この點に於いては從來の諸家の説ける如く語形の變化の有無とはざるなり。

體言は概念をあらはす詞なり。而してこれらは所謂第一類且爾乎波に接して種々の關係を他の語に對してあらはすことをうべし。而してそは如何なるものがあるかといふに、實に吾人が胸中に於いて一の觀念として思惟するものは悉皆體言たることをうるなり。

吾人の胸中に或一思想の活動するや混然たる状態を呈するものなるが、一度思考を之に加へば、こゝに二の異類を生ず。即先實在と思惟するものを認め、又別にこれが屬性たるものを認む。この二つは實際上決して分離すべからざるものなれども、吾人の思想の方便として之を分離せしめたるなり。従つて言語の上に於いて、自二様の區別を生ず。こゝに實在といへるは、哲學上にいふ嚴密なる意義の實在にあらず。事實にあれ、空想にあれ、抽象的概念にあれ、具象觀念にあれ、人間の思想に於いて實在なりと認めたるもの、謂なり。正邪、善惡、美醜、眞偽は語學の關する所にあら

ず。吾人の體言は實にかゝる意義にての實在を代表する單語なり。一面よりいへば概念をあらはしたるものなり。この故に吾人が一の概念と認めたるものは何にてもあれ、直に體言たるなり。用言にもせよ、助詞にもせよ、副詞にもせよ、はた外國語にもせよ、之を一の概念として取扱ふときは、直に體言の資格を有するなり。吾人の體言と稱するものは實にかくの如し。

體言は實在をあらはす概念なりとすれば、直に之に對する屬性觀念を想起せざるべからず。然れども屬性觀念といへども、一の概念なる以上は直に體言の部類に入らざるべからず。吾人の用言は屬性觀念をあらはせり。しかも體言とは異なり、其の差異いづくにかある。これ余が最力をこめて説かむとする所なり。

かの實體と思惟するものと、其が有する屬性觀念と思惟するものとを結合してこれを統一して思想に上すことは、これ實に人間精神の貴重なる作用にして思想の最要々素なり。今こゝに實體と其れの屬性とが相對立せるものとせば、其の間の關係を統一して決定する作用なかるべからず。實體と屬性とのみありとて、吾人の思想之を統一することなくば、唯片々たる觀念の累々たるのみにして一思想を組織すること能はざるべし。この故にこれが統一作用のこの實體と屬性との外に存在するは明なり。こゝに於いて思想を嚴密なる意義にて分析せば、三要素に區分せらるべし。實體、屬性、精神の統一作用これなり。而してこの統一作用の最必要なる



ことは之を缺かば思想は毫末も成立すること能はざるによりても明なり。  
吾人が用言として一括せしものは西洋流の名目にていはゞ動詞、形容詞、助動詞  
なり。従來用言と稱せられたる種類の語は其本體は屬性觀念をあらはすと同時に  
精神の統一作用をあらはせるものなり。従來の學者の用言の定義は形體上の議論  
にすぎざりき。余が用言といふ名の下に蒐集せし詞はいはゆる動詞又は作用言或  
は用言などいふ諸家の説明に見ゆるが如きはたらき詞又ははたらきをあらはす  
義にあらず。用とは思想の運用なり。人間思想の運営によりて生ずと認めらるゝ所  
謂統覺作用 *Apperception* の寓せられたる詞を示せるなり。統覺作用をあらはす詞即  
用言たるなり。屬性觀念即動作性質をあらはすものといふは當らず。屬性觀念をの  
みあらはすものならば、なほ一の體言なり。屬性觀念と同時に統覺作用の入り込み  
てこそ始めて用言といはるべきなれ。この故に吾人の説明は古來のと異なれり。通  
例西洋語の *Verb* を動詞と譯すといへども、かれらの動詞とても動作をあらはすも  
のに限らず、たとへば存在状態をいふもの頗多し。存在状態は決して動作にあらざ  
るなり。又單に屬性觀念をあらはすものにあらず。抽象的に何等の觀念をもあらは  
さず、唯決定要素となるのみの *is* の如きものは到底屬性觀念を含有するもの  
と見るべからず。又語尾に變化ある詞の義にもあらず。實に統覺作用の具存せられ  
たる語の義にあらずや。

*Das Verbum hat zugleich selbst die Thätigkeit, die in ihm enthaltene Vorstellung dem Subjekte  
beizulegen ; es enthält also neben seinem materiellen Inhalte zugleich die formelle Kraft des Aussa-  
gens.*

従來の一切の國語學者果してこゝに著眼して動詞といふ名目を設けたるか、吾人  
は未、全然、然りと答ふべき材料を有せざるなり。吾人の用言といふ名目を設けたる  
は實にこの *die Kraft des Aussagens* を有せる義なり。かの洋癖家皮相の見を以て動  
詞といふ一目を設く、こゝに於いて、形容詞のかれと異なるに至りて其の處置に苦  
みたるなり。吾人の目より見れば、共にこの陳述の勢力を有せるものなればわが所  
謂用言たるなり。吾人の用言と従來の用言との意義の別、實に上の如し。かくて余は  
かの助動詞又は動辭と稱せらるゝものを用言の部類に入れたり。こゝに於いて従  
來の學者と又反對の結果を來せり。こゝに之を述べむ。

舊來の説にいふ所の動辭、即大槻氏の所謂助動詞をば、吾人が體言、用言、副詞、助詞  
の分類をとりつゝも、助詞のうちとせずして用言の一部に編入せしことにつきて  
世間或は異論を挾むものあらむ。一言之を辯せざるべからず。

之について余は大槻氏の助動詞と立てられしを先批判せむと欲す。氏は根柢を  
西洋文典に置き、其の用法が彼と異なりとして遂に一部に立てられたり。其の説に  
曰はく

助動詞ハ洋文典ニテハ多クハ動詞ニ附説セリ。然レモ國語ノ助動詞ハ活用ト法トヲ具シテ、其ノ數モ多ク、其ノ規定モ繁雜ナルモノナレバ、一門ニ立ツベキ價値アリ、且別門ニ立テ、説ク方、學ブニモ便ナリ、因テ今ハ此ノ如シ。

この説によれば、其の一門に立つることの便否はさておき、果して西洋文典の所説の如く動詞に附説することの不可なるか、西洋文典の動詞に助動詞を附説するは國語の如く活用と法とを具備せぬによるか、氏が國語の助動詞が活用と法とを有するを以て、一門に立つべき價値ありと論ずるは動詞と其の活用と法とが一致する點ありといふことにあらずや。即動詞同様の作用を有するを以て別に一門を立てべき必要ありとするものゝ如し。然らば、其の裏面には西洋にては動詞と助動詞とは其の屈曲と法とを一にせずといふことを示すにあらざるか。然れども西洋文典にいへる助動詞は動詞に比較して更に屈曲と法とを異にせざるのみならず、ただの動詞にも劣らぬ繁雜なる用法を有せり。氏は其の數も多く、其の規定も繁雜なりといへれど、わが助動詞の活用は動詞の比して頗缺けたるところあるは明なることにして、かの獨逸文典の如くに繁雜ならず。氏は又數多きを以て區別すべきをいへれど、こは勿論一門を立てる根據とはならず。氏の根據とせる論は一もとるに足らず。若、又、氏が論法に従つて説を立てむか、まさしく動詞と助動詞とは一類たるべきなり。氏は動詞と助動詞と共に活用を具したるものなるが故に別に一門を

立つべしといはれたれど、吾人を以て見れば、これあるが故に一門たるべきなり。似たるが故に、一致する所あるが故に、區分すべしといふが如き奇論は天下にあるべしや。且、又、氏の説の如くせば、我が助動詞よりも獨逸語などこそ助動詞を一門に立つべき理由あるなれ。かれの助動詞は我が助動詞よりも用法遙に獨立的なり。即彼にありては助動詞は意義の上にて動詞を助くるのみにて、形體上相離れて中間に他の語を容るゝこと自由なり。然るに我が助動詞は更に形體上動詞と離れて存在することなし。従つて他の語を其の中間に容るゝなどの事なし。而して動詞の語形の變化に伴ひて其の接する助動詞を異にす。かれと異を立てむと欲せば、寧動詞の變化の一部と見るべく、かれにならつて助動詞の一目を動詞に附説するに止まるが頂上なり。然るにこれを立て、上せて他の名詞等と相對したる一門とすること、これ甚賛成し難き事なり。

按ずるに氏が分類の根基は蓋二重の立脚地より來れり。一は從來の説の動辭なり。一は西洋文典の所謂助動詞よりなり。しかも氏が所説は從來の説とも西洋文典の説とも異なり。これ蓋氏が獨創の見地と稱せらるゝ所以なるか。從來の説によりては活用ある動辭なり。當然動辭の次級分類の一に居らざるべからず。西洋文典の所説によらば、動詞に附屬せしめざるべからず。氏が名を西洋文典にとりて實を動辭にとりたるものゝ如し。こゝに於いて混亂を起したるなり。氏が助動詞の説明は

確に混亂あることを示せり。

助動詞ハ動詞ノ活用ノ其ノ意ヲ盡サザルヲ助ケムガ爲ニ其下ニ付キテ更ニ種々ノ意義ヲ添フル語ナリ。

といひおきながら僅に三行をへだて、更に名詞等にも附屬することありといへり。これを以て見ても氏が助動詞の意義の不確なるを知るべし。これ氏がなりたりせり如しの類をも助動詞として其の他のものと同一列に説明せむと企てしが爲に生じたる混亂なり。氏の説明によれば、助動詞とは動詞を助くるものと、他の語を助くる動詞といふ二様の意義を含有せり。この不確なる意見より胚胎し來れる分類の論理上誤謬に陥り易き弱點を有するは明なる事なり。

それ、體言用言を單に語尾變化の有無によりて分つときはいざ知らず、之を其の實體と屬性又は現象との義にして用言は其の屬性觀念をあらはすと同時に思想の統覺作用をあらはすものとする吾人の定義を一旦立てたる以上は助動詞は當然用言の部類に入るべきなり。西洋にて助動詞は動詞の部類に入るべきものと定めたるは實にこの統覺作用をあらはすが故にあらすや。然らずば、共に屬性觀念をあらはす形容詞を異類に立つる理あらむや。吾人の用言といふも亦この統覺力を有する義とせば所謂助動詞を用言以外に驅逐するは頗、所以なき事ならずや。今仔細に助動詞の本質を観察する時は直に左の數項を見ることをうべし。

一、なりたり、せり、如し、は、名詞等に接して之を動詞形容詞の如き地位にたしむること。

二、其の以外のものは、所謂動詞にのみ附屬して其の動作状態の陳述に關する用法の不備を補ふこと。

三、この第二のものは特に動詞を離れて考ふること難く、殆、全、形體上動詞の語尾の如き觀あること。

第一の場合のものは、實に實質なき用言にして其統覺力をのみ存せるものなり。この故に概念語を以てこれが補缺をなさざるべからず。統覺力を有することは明瞭なり。若、又、之を助動詞と立て、大槻氏の如く一門を立て、又は動辭とせば、佐行變格動詞と稱せらるゝ、すも亦明に助動詞の部類に入るべきなり。この「す」は其の意義漠然たるものにして動詞としての屬性は殆なく、唯動作的統覺作用のみがあらはさるゝなり。この故にこの「す」を明瞭にせむが爲には必動作的概念語を之に補缺として加へざるべからず。而して一面に於いてはこれ實に英語の *to do, to have* 獨逸語の *haben* に酷似するものにして一面は助動詞と見らるべきものなり。然るに之を動詞として、彼れを動辭又は助動詞として全然別類となすは不都合なりといふべし。又この第二の類に至りては吾人は之を一の獨立せる單語として見るよりも一種の語尾と見むと欲するなり。これ實に其の本性が用言の終尾にありて専ら統覺

作用の不備を補ふものなればなり。動作状態の委曲の事は用言其の者にては十分にあらはすこと能はざるが故に之に附屬して、其の動作状態の發現の状況等をあらはすなり。之をかの大槻氏の「耳爾乎波」の類に比するに、これは前後の詞句の間の關係を示すものなり。又かの疑問、希望、感動等の助辭に至りては、その附屬する文全體に思想的調子を與ふるものにして、直に統覺作用によりて生ずるものにあらざるなり。西洋文典には文の性質上の分類として、叙述、疑問、命令、希望、感動等の體を分つことあり。

*In thought, subject and predicate stand to one another in a variety of relations and these relations are indicated in language more or less imperfectly by changes in the form of sentences. In their function of expressing the relations between subject and predicate sentences fall under the four main group.*

と實にスキート氏の言の如く、感動、疑問、希望等は統覺作用に必然依存すべきものにあらすして、主語と述語との間の關係の變態に外ならざるものなれば、統覺作用をあらはす用言に特別にこの語形が依存せざる限りは之と區別すること當然の事なり。吾人が疑問、感動、希望等の助辭を關係語たる助詞の中に入れ、助動詞を用言の一部となしたるものは、これらの理由によりてなり。

副詞につきては、今こゝに特別に言を要することなし。唯これらがかの體言と混

同せらるべからざることを一言しおかむのみ。

助詞は從來の説の辭辭に該當す。他の三者が何等かの獨立觀念を表せるに引きかへ、これは觀念語の補助詞として、これらの語の關係を示すを職とす。其の關係の一例をいへば、概念と概念との間の關係、實體と屬性との間の關係、思考資料と統覺作用との間の關係、主語と述語との間の關係、思想と思想との間の關係等これなり。以上四種の分類の主要を述べたり。今之らが相互の關係を一言せむ。助詞は一種の油の如きものなり。他の三者の運用を圓滑ならしむるものなり。體言は概念をあらはすものなり。いかなるものにも思想上の概念として取扱はるゝものは、直に體言たるなり。用言は屬性をあらはすと同時に統覺作用をあらはしたるものなり。體言と用言との關係は體言は用言に對して陳述の主體となり、客體となり、補助となることあるべし。用言は體言に對して、述語となり、裝定的の語となることをうべし。若、用言が屬性を缺如せる時は、體言を借り來りて之を補ふなり。副詞は用言の屬性觀念又は統覺作用の意義を裝定す。而して又場合によりては體言及文章全體の意義を裝定することあり。又體言、用言、副詞の大部分は一語にて一思想をあらはすことをうべし。

吾人は上來述べし如く、日本語を其の性質關係によりて單語論上に於て四大別することを主張す。其の細目の説明に至りては、章を改めて説かむなり。